

口を開けてペリーヌと中へ這入つた。そこには何百何千と云ふ澤山の小型な機械が、耳が遠くなる程に凄じい唸りを立て、廻轉してゐた。

突然！ その喧しい機械の音の中から、誰れかゞいらくした聲で怒鳴つた。

『何んだ！ 今頃やつて來やがつて！ 怠け野郎奴！』

『まあ！ 怠け野郎つて誰れのこと？ 何あんだ！ 私しのことぢやないんだわ！』とロザリーは一

本しつべい返しを食はせた。

『いままで何をしてゐたんだ？ え？』

『あの…タルウエルさんが、この人をこゝで使つてくれと云つてゐましたが…』

ロザリーは言葉を柔らげて云つた。

この老人は今から十二年ほど前に、この工場でふとしたはづみに機械に觸れて、哀れにも足を二本とも失つて了つた。それからといふものは、その本當の名前を却つて忘れられて、誰れでもこの人のことを「よたよた爺さん」と呼び慣れるやうになつた。木の義足を兩足に附けて居るので、歩くときにはよたよたといつてもよろけながら行くからである。彼れは目下この部屋的女工主任になつてゐるの

だが、どうも事ごとくに口ぎたなく怒鳴るのが癖で、何かにつけてこゝの女工たちに辛く當つた。こゝに据ゑ附けてある機械の作業といふのは、糸巻の糸を捲き上げることなので、絶えず新しいのへ新しいのへと移して行かねばならず、また何かの拍子で切れた場合は手早く結ばなければならず、他よりも殊にこゝでは目と手先の働が必要であつた。彼れはいつも兩足の義足をガタン／＼云はせながら、女工たちを頭ごなしにガミ／＼と吐り附けなければ、自分の責任のかゝつてゐる機械が今にも止るとでも思つてゐるらしい。しかし彼れは心からの悪い人ではないので、周囲のものもあんまり氣にも掛けてはゐないやうであつた。それに始終ブツ／＼と何か彼れが云つてゐても、機械の喧しい輪轉の中へ吸ひ込まれて大概は聞えなかつた。

『ねえ、どうでせう？ そんな譯なんですが…。おや、あなたの機械が止つた！』

ロザリーはそれを見ろと云はぬばかりに、手を振りながら叫んだ。

『なに、介はないよ！ それで…お前さんの名前は何んと云ふんだね？』

彼れはペリーヌに向つて訊いた。

ペリーヌは本名を明したくないのでモジ／＼した。それを「よた／＼爺さん」は聞えないと思つた

らしく、また義足をガタ／＼云はせながら叫んだ。

『おい！ お前の名は何んて云ふんだつて、俺は先刻から訊いてゐるんだぜ！ え？』

彼女はいつかロザリーに云つた名前を思ひ出すのにちつと考へた。

『私し……私し……オウルリー……オウルリー……つて云ふんですの！』と彼女は云つた。

『なに？ オウルリー……何んだつて？』

『たゞオウルリーだけですわ！』

『あゝ、さうか！ まあ、いゝさ！ ぢや、俺れに附いてこつちへ来てくれ！』と彼女は云つた。

彼女はペリーヌを工場の奥にある小さなトロツコのあるところへ案内して、そこでロザリーと同じやうに説明してくれた。

『どうだ？ 解つたか？』

彼女は仕事半ばで何度もさう云つた。

ペリーヌはうなづいた。

實際、こんな仕事は馬鹿でもやれる極くやさしいものだつた。彼女はセツセと仕事に精を出したが、

それでも時々「よた／＼爺さん」は口喧しく怒鳴つた。

『おい、おい！ 遊んでちや駄目だぞ！』

しかし爺さんに見ると、これは怒つてゐるのではなく、注意をするに過ぎないのであつた。

彼女は遊ぶ氣は毛頭なかつた。が、はじめの中こそ彼女は正直に何度も車を押しつゞけて行つたが、

よく遣つて見るうちに、そんなことをしないでまた一押し押せば、何んの障碍もなく車はひた走り

に走つて行くのが解つたので、彼女はそんな風に遣り出した——それをお爺さんは遊んでゐると思つ

たらしい。

晝飯時になると女工たちは各自に——晝飯を食べに家へ急いだ。ペリーヌはパンを半斤買って、そ

れを歩きながら食べた。どこの家からもおいしうなスープの香ひがブ／＼して来て溜らなかつた。

彼女は好きなスープの香ひをせめて嗅ぐだけでもと、そろ／＼と歩いて行つた。彼女は腹が減つて溜らなかつた。僅か半斤のパンぐらゐでは何んの足しにもならなかつた。

暫らくすると、彼女は工場の門へ歸つて来た。木蔭のベンチに腰を下ろして、少年工や女工たちが躍り戯れるのを面白さうに眺めながら、午後の仕事が始まる知らせの汽笛を待つてゐた。みんなと一

緒に遊んで見たいとは思つたが、なんだかヘンに氣怏れがして仲間には這入れなかつた。

そこへロザリーが遣つて來たので、ペリーヌはロザリーと一緒に工場へ歸つた。

彼女はまだ歸る時間も來ないのに、もうこれ以上「よたく爺さん」にガミ／＼云はれても、どうにも動けなくなつたほどぐ／＼つたりと疲れ果てた。

『さあ、さつさと遣るんだ！ もつと手早く出來ないか！ おい！』

「よたく爺さん」は果して怒鳴りつけた。

彼女は義足の音でハツとして、まるで鞭を一つ當てられた馬のやうに仕事をはじめたが、お爺さんが横を向くとすぐまたぐつたりとなつた。肩や腕から頭までズキ／＼と痛んで來た。はじめの中こそこんな仕事は譯がないと思つたが、かうして一日中つゞけてゐるとどうにも溜らなくなつて來た。もう今では一刻も早く歸へりたいと思ふばかりであつた。何故みんなのやうにやれないのだらう？ 中には自分よりズツと年下の人もゐるのに、ちつとも疲れずにさつさと仕事に精を出してゐるのに……。やつぱりこんな仕事でも馴れ／＼ば何んでもなくなるだらう。

彼女は車を喘ぎ喘ぎ押しながら、みんな他の人たちが元氣よく仕事をしてゐるのを見て羨ましかつ

た。

突然！ 切れた糸を機械へ繋いでゐたロザリーがバツタリと倒れたと思ふと、直ぐ消魂しい悲鳴が起つた。

直ぐ機械は止つた。その瞬間四邊がひつそりとしたが、すぐその不吉なしづかさの中から呻き聲が起つた。と、同時に部屋中の職工たちは總立ちになつて、「よたよた爺さん」が尖つた聲を張り上げて何か云つたが、そんなことは耳にも入れず、わつとばかりにロザリー目がけて駆け附けた。

『大變だ！ 大變だ！ おーい、大變だぞー 機械が止つた、機械が止つた！ どうした！ どうした！ どうしたんだ！』と「よたく爺さん」は怒鳴つた。

女工たちはロザリーの周圍を薙めき合つて、ぐつたりとなつた彼女をかつぎ上げた。

『どうしたんだ！』『どうしたんだ！』『どうした！』『どうした！』と人々は口々に罵り合ふ。

『私の手が……手が機械に扱はれたんです。あゝ、痛……』

彼女は微かな聲で云ふ。

彼女の顔は死んだやうになつて、唇はまるで蠟のやうになつてゐた。血まみれな手からは鮮血が

淋漓として床に流れた。けれどもよく調べて見ると、傷はさほどでもなく、指が二本だけやられたばかりだが、その中の一本は折れて了つたらしい。

「よたよた爺さん」は最初のうちこそ氣の毒さうに見てゐたが、これでは果てしがないと思つてか、周圍に群がつてゐる人たちを邪険に押し分け初めた。

「さあ、みんな！ 歸つた！ 歸つた！ さあ、みんな！ 元の場所へ歸つた！ 歸つた！ なあに！ 大したことぢやないんだ！」と彼は叫んだ。

「あはゝゝゝ。さうさう！ お前さんが足をおつぺしよつた時にも、全く大したことぢやなかつたよ！ あ、は、は……。さうだつてね？ 笑はせやがら！」と誰れかど怒鳴つた。

彼はムツとして四邊を見廻したが、大勢居るので誰れが云つたか解らなかつた。すぐまた彼は怒鳴つた。

「さ！ 仕事を初めなくちやいけないぞ！ 早く来ないか！」

さう云はれたので、みんなは仕方なく一人減り二人減りして、だんぐに各自の持場へ歸つて行く……ベリーヌもその中に混つてトロツコの方へ歸つて行かうとすると、うしろから「よたよた爺さん」

が呼び止めた。

「おい！ 新米！ 一寸こゝへ来てくれ！ そら！ 早く来るんだ！ 何を愚圖愚圖してゐるんだ！」

これは何か目に餘ることをしたかなと、彼女は恐る恐る戻つて来た。けれども彼は叱言を云ふのではなかつた。

「おい！ この馬鹿を支配人のところへ連れてつてやれ！」と彼は云つた。

「まあ！ 何んで私しが馬鹿なんでせうか？」と、また輪轉し出した機械の喧しい音の中で、ロザリーはムツとして思はず聲を張り上げた。「私しに罪があるんでせうか？ ねえ？ 私しに咎があるつて云ふんですの？」

「當り前よ！ お前が不細工な真似をするからさ！ 罰だよ！」と云つたが、流石に彼はすつと言葉を柔げて叫くやうにして云つた。

「どうだい？ 痛むかね？」

「さうえ、そんなでもありませんわ！」

ロザリーは伊氣にもさう答へた。

『そんな、そりやあ何よりだ！　しかし、兎に角……家へ歸つたらいゝだらう。さあ！　今日は家へお歸り！』

ロザリーは血だらけになつた左手を右の手でしつかりと押へながら、ペリーヌに扶けられて工場を出た。

『ロザリーさん！　私しにつかまつて行かないこと？　随分痛いでせうね？』とペリーヌは云つて眉を擡めた。

『いゝえ、もう大丈夫よ。何あに……これつ位ぬ！　どうにか歩いて行けるわ！』とロザリーは云つた。

『あら！　まあ！　さうを？　ぢや、それは大したことぢやないのかしら……？』

『まだ解らないわ！　後で痛んで来るものですからね。私し……つい辻つたもんだから、こんな事に成つて了つて……』

『草疲れたからよ！　屹度！』

ペリーヌは自分の身に引きくらべてさう云つた。

『さうかも知れないわ！　誰れでも怪我をするのは、仕事に疲れてついうつかりしてゐる時になるもんですからね。何しろ朝から目が廻るほど忙しかつたもんだから……。だけど、私し困つたわ！　私し……ゼノビイ伯母さんに何んと云つて吐られるでせう！』

『けど、それはあなたの所爲ぢやないわ！』

『さう、私しだつてさう思ふわ！　けど、お祖母さんは兎に角ゼノビイ伯母さんはさう思つてはくれないわ。屹度……あたしが怠けたいから……つて、云ふわ。屹度！』とロザリーは悲しさに云つた。

工場の間を通り抜けて行く途々、二人の姿におどろいて人々は思はず立止つて、どうしたのかと彼方でも此方でも訊ねた。中には氣の毒さうに見送るものもあつたが、大概な人たちは「何んだ！　又か！」と云ふ顔をした。みんなはいつもさう云つてゐた。――怪我なんて病氣をするのと同じさ！

つまり、まあ、一寸した偶然なんだ！　そして、誰れでも一度づゝ順番が廻つて来るんだよ！　お前が今日なら、俺れは明日……と云ふ風に……。だから、こればかりは仕方がないさ！

けれども、中にはこんなことが起ると云ふのが、そもそも間違つてゐると憤慨するものもあるにはあつた。

二人はやつと狭い事務所の前へ来た。入口の低い石段を上らうとすると、そこにはタルウエルが例の癖で——両手をポケットへ潜り込ませたまま、帽子を阿彌陀に被つて立つてゐた。その格好は丁度海軍士官がブリツヂで海上遙かを見張つてゐるかたちである。

『おい、どうしたんだ！』

二人の姿を眺めると、すぐ彼れはとげくしい聲で怒鳴つた。

ロザリーは血だらけの手を見せた。

『ぢや、早くハンケチで繻帯しなくちや駄目ぢやないか！ 仕方のない女だな！ 本當に……』と彼れは荒々しく云つた。

『おい！』

ロザリーはペリーヌに自分のポケットからハンケチを出して貰つた。タルウエルはその間入口の敷石の上を大股に彼方此方歩き廻つてゐたが、ロザリーがペリーヌにハンケチで繻帯して貰つて了ふと、ヅカヅカと彼女の傍へ近寄つて来て立塞がつた。

『おい！ そのポケットを明けて見ろ！』と彼れは恐ろしい聲で命令した。

ロザリーは怪訝な顔附で彼れを見上げた。

『おい！ その両方のポケットにあるものを全部こゝへ出して見ろつて云ふんだ！ 解らないのか！』と彼れはまた怒鳴つた。

彼女は仕方なく云はれるまゝにポケットからいろ／＼なものを出して見せた。胡桃の筒、おはぢき、指ぬき、甘草の根（これはカンサウと云ふ植物の枝を乾かしたもので、我國のニ、銅貨が三枚、それから小さな懐中鏡などが出て来た。

その鏡を見ると、タルウエルの目はギョロリと光つた。

『ほら！ 屹度、此奴があるだらうと思つてたよ。大方何んだらう！ こんなものに自分の顔を映して、いゝ氣になつてゐる中に、糸を切らして機械を止めちやつたんだらう！ 其奴を今更ら狼狽してゐなうとしたもんだから、それ！ そんな事になつちまつたんだ！ 態を見ろ！』と彼れは怒鳴つた。

『でも、鏡を見てなんかおませんわ！』

『ふゝん！ いくら云つたつて駄目だ！ 俺れには解るんだからな。だが、痛むか？』

『さあ、今のところ大した痛みぢやありませんけれど、手を……手を潰して了つたんです……』
ロザリーは今にも熱くなる臉をヂツと耐へて云つた。

『さうか。で、どうしやうつてんだね?』

『「よたよたお爺さん」があなたのところへ行けて云つたものですから……』とロザリーは云つた。

『……で、おい!……お母もどうかしたのか?』

こんどはペリーヌに彼は訊ねた。

『いゝえ!』

彼女はどきまぎして答へた。

『何あんだ! ぢや……』

『いゝえ、「よたよたお爺さん」が私に附添つて行けてこの人に云つたんです。』

ロザリーはペリーヌに代つて辯解した。

『さうか、よし! ぢや、ルウシヨンのところへ行つて手當をして貰ふがいゝぜ! だが、何んだぜ! 俺れがこんどのはよく調べて見るから、若しこれがお前の不注意でこんなことになつたのが解つたら、おい! もしさうだつたら……何んだぞ! 以後氣を附けなくちやいけないぜ!』
彼れは事務所中に叫び響くやうな空威張りな聲で怒鳴つた。

二人が醫者の家へ行かうとした時、丁度そこへ壁にびつたりと身を寄せて手探りながらヴェルフラン・パンダヴオアヌが出て來た。

『一體何んだね? タルウエル君!』

『いゝや、大したことぢやございません、女工が一人手を怪我したんで……』とタルウエルは事もなげに答へた。

『それは、えらい事をしたな。その娘はどこにゐるね?』

『あ! ヴェルフランさん! 私しなんですの!』

ロザリーはさう云つて彼の傍へ駆け寄つた。

『何あんだ! さう云ふお前はフランソアの家でロザリーぢやないかな?』

『えゝ、さうですの。』

さう云ふと彼女は泣きはじめた。口穢なく罵られて胸が一杯になつてゐるところへ、やさしくヴェルフランに云はれたので、ロザリーの目には一時に涙が込み上げて來た。

『お前の手をどうしたといふのだ? ロザリー!』

『あゝ、私し……私し……。指が二本ばかり折れたやうですの。……でも、そんなに痛くはありませんけれど……』

『それはえらい事をした！ だが、何故泣いてゐるんだね？ 痛いのか？ 悲しいのか？』

ヴユルフランはやさしく彼女に訊ねた。

『いゝえ、いゝえ……。たゞ、あなたがやさしく慰めて下さるものですから……』

これを聞くと、タルウエルは肩を聳かせた。

『よし、よし、もう泣かないでいゝ。さあ、お前はすぐ家へお歸り！ 醫者はわしの方から行かせるから……。』

そこまで云ふと、ヴユルフランはタルウエルを顧みて云つた。

『おい、君！ 濟まないがドクトル・ルウシヨンのところへ傳票を一つ書いてくれんか！ 至急を要することだから早速フランスの家へ出向いてくれるやうに……とな。いゝか！ タルウエル君！』

それから、また彼れはロザリーの方を顧みて云つた。

『どうだ？ 誰れか一人付き添ひが無くて歸れるかね？』

『まあ、有り難うございます！ 私し大丈夫ですわ。丁度こゝに友達が一人附いて行つてくれますから……』

『さうか！ ぢや、一緒に行つて貰ふがいゝ。それから家へ歸つたらな、お前のお祖母さんにわしからの言葉だと云つて、くれぐれも話しておくれ！ お前が缺勤してゐる間の給料はわしの方で必ず拂つてやるから……つて！ いゝかな？』

ペリーヌは目の前に祖父のやさしい言葉を聞かされて、他人ごとながらロザリーとともに、あまりのうれしさに涙がこぼれるやうな氣持になつたが、タルウエルがデロムと不思議さうに眺めたので思はずハツとして何氣ない風を装つた。けれども、そこを立去ると間もなく、彼女は溜り兼ねたやうにロザリーに云つた。

『ねえ、ロザリーさん！ ヴユルフランさんつて、随分親切な方だねえ！』と彼女は云つた。

『えゝ、そりやあ親切な方よ！ 萬事あの方が一人で遣つて下さると、どんなにいゝか解らないんだけれど、何も彼もあの「瘦せつほち」任せでちつとも手を出さないんですものね。そりやあ、まあ、あの方にして見れば暇がないんだし、まだ外に心配しなければならぬことが澤山あるんだから、こ

「れはちつと虫のいゝ考へかも知れないけれど……」とロザリーは答へた。

『さうねえ！ けど、あなたには特別親切になさるやうだわ！』とペリーヌは云つた。

『まあ、本當にさうよ！……あの方は私しを見ると息子さんのことを思ひ出すんだわ！ 屹度！ だつて、あたしの死んだお母さんはエドモンさんとは乳兄妹の間柄なんですもの……』とロザリーは力を籠めて云つた。

『まあ！ ぢや、あの方はそんなに息子さんのことを案じてゐらつしやるのかしら……』

『えゝ、さうよ！ 明けても暮れても、あの方はそのことばかり考へてらつしやるのよ。』

どこの家でも二人の姿を見ると入口へ出て来た。ロザリーの手首に巻いたハンケチは眞赤に血が滲んでゐた。それを戸口で見送る人たちの胸は、いつかは自分たちの家族の中でそんなことが起らぬとも限らない不安に脅かされながら、もの珍らしさうに眺めるものもあつたが、中にはさも氣の毒さうに見送るものや、果ては同情のあまりに工場を罵倒するものさへあつた。何故なら、このマロクールに住むものは誰れ一人として工場に雇はれてゐないものはなかつたから——

ロザリーは家まで來るとペリーヌに云つた。

『ねえ、オウルリーさん！ 部屋まで一緒に來て頂戴ね。さうしたらゼノビイ伯母さんもちつとはガミ／＼云はないかも知れないわ。』

けれども、この恐ろしい伯母さんにとつてはペリーヌなどは眼中になかつた。こんな當り前でない時間にロザリーが歸つて來るばかりか、片手に血みどろな繻帯を捲き附けてゐる有様を眺めて、何んで黙つてゐられるだらうか？ ゼノビイ伯母さんはキンキラ聲を張上げて怒鳴つた。

『おや、まあ、呆れたよ！ この子は！ 怪我をして歸つて來たんだね！ 何んて野呂馬なんだらう、この子は！ あゝ、解つた！ お前は私しを困らせやうと思つて、屹度わざと怪我をして來たんだらう？ いゝえ、辯解なんか聞きませせんよ。それに違ひありません！』

『まあ、あんな事を云つて！ 伯母さん！ あたしちつとも伯母さんを困らせなんかしないわ！ 第一費用は工場で拂つてくれるんですわ。』とロザリーは馬鹿にし切つた調子で云ひ返した。

『またそんなお芽出たいことを考へて！ 工場でお前なんかのためにそんなことをするもんかね！ 莫迦な！』

『いゝえ、違ひますよおだ！ ヴェルフランさんがちやんと仰有つて下すつたんだから、全く確かな

もんだわ！』

けれどもゼノビイ伯母さんはそんなこと位では満足はしなかつた。頭からガミ／＼と盛んに悪戯を吐いてゐる中に、フランソアお祖母さんが何事だらうと店から出て来た。

しかしフランソアお祖母さんは少しも叱言を云はなかつた。ロザリーの肩に両手を掛けてやさしく云つた。

『まあ、まあ！ お前は怪我をして歸つて来たんだね。』

『あゝ、お祖父さん！ でも、ほんの一寸ばかりなのよ。……一寸……ほんの指だけなのよ……でも……大して痛みはしないの！』

『まあ、それぢやあ！ 早速ルウシヨンさんを迎へに行つて来なけりやならないね。』

『いゝえ、もう疾づくにヴェルフランさんが云つて下さつたから、もうこゝへいらつしやる頃ですわ！』

ペリーヌもみんなと一緒に部屋へ這入つて行かうとしたが、ゼノビイ伯母さんが彼女を顧みて呼び止めた。

『ちよいと！ 何か御用なんですか？ あの子の介抱ならもう結構ですよ！』と彼女は云つた。

『あら！ オウラリーさん！ もう結構よ。わざ／＼どうも濟まなかつたわねえ！』とロザリーはペリーヌに氣の毒さうに云つた。

さう二人から云はれて見ると、ペリーヌは全く取り附く島もなくなつて、すご／＼と工場へ歸つて行くより外になかつた。

けれども、丁度ペリーヌが工場の入口まで来ると、同時に仕事の終る知らせの汽笛が、高く……高く……鳴りひびいた。

一一一

奇妙な靴

ペリーヌはあの今にも息が詰りさうな部屋で、どうしたら寝られるだらうと、いままでにどれ丈け始終思ひ悩んだか解らなかつた。しかし、いくら考へて見たところで、こんな工合ではいつになつたとて安らかに眠れる筈はない。

苦しい一日の労働から歸つて來ても、その疲れを一つ休めるところもないとしたら、それこそどんなことが起るだらう！

彼女はそれを考へると恐ろしくなつた。若し無理をしてからだに疲れでもして、工場の仕事を休まなければならなくなつたら、それこそその日から工場を追ひ出されるにちがひない！それはもう絶望のドン底である。その時になつてどうすることが出來やうか？ よし又病ひに不幸にして倒れた

ところで、誰れが一人介抱してくれるものがあるだらうか？ たゞ野垂れ死を待つより外に途はない……

しかし……けれども……それほど嫌なものならば、ちやんと金を拂つてゐる以上、無理にそんな部屋に嚙りついてゐる義務もない譯だが、さて、さればと云つて何處に行きどころがあらうか？ それに……何んと云つてロザリーに斷らうか？ みんなが寝起きをしてゐるのに自分丈は溜らないと、どうしたらうまくロザリーに云へるだらう？ だが……それにしても……みんなのゐる部屋を死ぬ程いやがつてゐると知れたら、それこそみんなはどう考へてくれるだらうか？ 仕事がいやで逃げ出すのだと、さう悪くこじ附けられても仕方がなくなるではないか！

いつもそんな風で、愚圖々々のまゝに打ち過ぎた。

けれどもロザリーが怪我をした今になつては、もうその最後の望みも絶え果てた。今日こそはロザリーに云はうと思つてゐた矢先、あんな怪我をしてしまつてはもうここ五六日は起きられないだらう？ さうなればこの庭つゞきの穉苦しい部屋で、今にも息の詰りさうな悪臭と、同室の少女たちのふしだらな生活とに悩まされて、眠るにも寝られずに夜通しベットの上で苦しんでゐるペリーヌのことを考

へられる筈もなく、またこちらからロザリーに知らせることも出来ない。しかし、また一方から云ふと、この同じ部屋の少女たちはその譯を知る筈がないから、ペリーヌがどこかへ行つて了つても別段怪しみはしないだらう？ さうだ！ ここを出るなら今だ！ 今より外に好機會はない！

さう考へたペリーヌは早速これから汀の小屋へ行かうと決心した。あゝ、あそこで眠れたらどんなに愉快だらう！ 四邊は本當に静かだし、雨露は凌げるし、とてもこんなフランソア小母さんの家で眠るのは較べものになるものか！

ペリーヌはパン屋から夕飯のパンを半斤買ふと、フランソア小母さんの宿へは歸らずに、そのまゝいつかの朝早く歩いた——あの汀の小屋へと忙いで行く……。

そこへ向ふから村端れへ歸る職工たちと運悪く出會つたので、彼女は見られたくないと思つて、或る家の垣根の蔭に身を隠した。彼女は物陰へイみながら、そこらの草を抜き集めて箒を拵へはじめた。あの小屋は別に汚れてゐる譯でもなかつたが、やつぱりよく見れば掃除をしなければ使へないし、寢床などは新しい草を取り換へたかつた。

ペリーヌは出來上つた箒の先を藁でしつかり結へると柄をつけた。寢床を換へる草束はひと山にし

て持ちいゝやうにした。

やがて、往來がバツタリと間遠になつた頃、彼女は箒を手を、草束を肩に擔いで道を忙いだ。間もなく狭い草木の茂つた道へ出ると、肩に擔いだ草が木の枝に引つかゝつて歩き憎いので、彼女は屈みながらそろ／＼と歩いた。

島の小屋へ着くとすぐ屋根から壁から床板まで拭き掃除をした。それから寢床を新しいやはらかな草と取り換へた。

ふと池を眺めると、蘆が一面に生ひ茂つてゐるので、彼女はいゝ考へが浮んだ。こんな島で革の靴は必要がないから、何か都合のいゝ靴が欲しいと思つてゐた矢先なので、彼女はその蘆で靴の底を作つて、ズツクの小切れで爪先を縫ひ合はせ、その上からリボンで結んで見たら……と、素敵に面白い考へがふいと浮んだ。

彼女は掃除をそ／＼に済ませて、早速池へ行くとしなやかな蘆を撰り抜いて來て仕事に取りかゝつた。けれども、さてその三尺ばかりもある長い蘆を折り曲げて了つて見ると、それはあんまり間が空き過ぎてゐるから、とても弱くて靴の底などには使へなかつた。そこで彼女は仕方なく前のを棄て

「こんどは改めて蘆の莖をよく叩いて、ゴソゴソしてゐる莖を太い紐のやうにすることにした。そこで、拾つて来た頃合ひの石を金槌にして、彼女は蘆の莖をせつせと叩き初めた。その中に夜になつて了つたので、仕事はひと先づそこで切り上げることにした。やはらかな新しい草の上へ横になると、暫くの間はうつ／＼としてゐたが、やがてペリーヌは空色の紐のついた美しい靴を夢の中に描きながら、しづかな：しづかな夢路をぐつりと辿りはじめた。彼女はたとへ一度や二度は遣り損つても、三度四度：それでいけなかつたら六度も七度も：いゝや十度も：と云ふ風に、倦まず撓まずつゞければ、一たん遣らうと決心したことのが出来たので、その明くる日、十四その翌日の夕方までには靴の底にする丈の蘆を柔くすることが出来たので、彼女は一心になつて錢かけて銀や糸やリボンや、それから丈夫なズツクの小切れなどを買つて来て、彼女は一心になつて自分の足に適ふやうな底を造らへはじめた。けれども、なか／＼初めのうちはうまく出来なで困つた。一番初めに出来上つたのは丸くなり過ぎていけず、その次のは前のよりもズツと念を入れたのに、出来上つて見たら自分の足にはちつとも合はないで——これがまた使ひものにならないし、三度目のでもまだしづ／＼としないで駄目であつたが、四度目のになると流石にいくらか馴れた／＼めに、こん

どはどうやら首尾よく行くことが出来た。

實際、どんな事でも——たとへば初めはまるで出来さうにも見えないことでさへ、ほんの一寸した忍耐と意志とを持つて居れば、人間が一たんかうと決心した事の成し遂げられぬ筈がない！ 彼女は今それをまた明らかに證據立てた。材料を買ふ金もなく、それに使ふ道具もなく、しかも彼女は一倍の不自由と絶えず戦ひながら成し遂げたのである。ペリーヌはそれを思ふと實に愉快で溜らなかつた。

最後に入り用な鋏がなかつたので、持つてゐたナイフの先を滑らかな石で砥いで使つたが、ズツクの切れ端を刈り込んで行くのはなか／＼むづかしかつた。

その翌日の土曜日の朝、彼女は空色のリボンに灰色のズツクの美しい靴を履いて、晴れ晴れした目を輝かせながら工場へと急いだ。

彼女は靴を作りはじめてから足掛け四日間と云ふものは、今まで自分の履いてゐる革靴を留守にする時には、どこへ藏はうかと始終考へてばかりゐた。それにしてもこの小屋へは誰れも人は来る氣遣ひがないから、まづ盗まれると云ふ心配はないけれど、氣にかゝつて仕方のないのは鼠のことであつ

た。これには一番困るので、どうかして鼠の来ないところへ藏はなければならぬと思つたが、さて、戸棚が一つあるぢやなし、箱が一つあるぢやなし、鼠は鼠で何所にでもゐるから、到底靴を破かれないうやうな處へ藏ふことは出来るものでなかつた。これには流石のペリーヌも困り果てた末、遂ひにうまいことを考へつゝいた。それは藁で靴を天井から釣り下げることであつた。

『さあ、これならば大丈夫だわ！』

彼女はさう云つて輝笑んだ。

二〇七 樂しき孤獨

ペリーヌはその新しい靴に大變得意を感じてはゐたが、それ丈けにまた工場で働いてゐる中でも壊しはしないかと心配になつて仕方がなかつた。トロツコを動かしてゐる間にでも、人知れず何十度足許を氣にして眺めただらう！

いつかその様子が周囲の女工たちにも知れたものと見えて、ばら／＼とみんなはペリーヌの傍へ駆け寄つて来て、美しい靴だ！ 美しい靴だ！ と云つて頻りに褒めた。

『その靴は何處で買つて來たの？』と一人が訊ねた。

『まあ！ これは靴ぢやないのよ。草鞋ぢやありませんか！』とペリーヌは云つた。

『あら！ そんなことはないわ！ それは立派な靴ぢやありませんか！ けど、何んてまあ綺麗な靴

でせう！ ちよいと！ あなたは何處で買つて来たの？ いぢやないの！ 教へて頂戴な。』
 『あら、これは自分で造へたのよ。蘆の莖と八錢ばかりのズツクの小切れで作つたの。大したものぢやありませんわ！』

『まあ、さうお！ 素敵だわねえ！』

こんな風で靴がまづ思ひ通り作ることが出来たので、ペリーヌはその次にいろ／＼な仕事を考へ出した。しかし、かうしたいと思つてゐることはいくらでもあつたが、とても現在の境遇では出来ないことや、またあんまり金のかゝり過ぎるものであつたりして、どうもなか／＼思ふやうにはならなかつた。それにしてもまづ彼女の作りたいものは肌襦袢の着更へであつた。何しろかうして寝るにも起きるにも一枚では、洗濯も思ふやうには出来ないし、また洗濯したところで着更へがないから、それの乾くのを待つといふ始末ではいかにも不自由で仕方がなかつた。それも更紗が六尺あれば一枚出来るのだが、いくら位で買へるものやら彼女にはよく解らなかつた。それに買つてからどう裁つたらいいかと心配だつた。あゝして見たら？ かうして見たら？ といろ／＼考へ初めて見ると、なかなかはつきりと決めにくかつた。

それにいろ／＼と考へて見ると、そんな肌襦袢などよりも、まづ上着の方が非道くなつて了つてゐるので、その更紗で上着を作ることが順序ぢやないかしら？ もうこの上着も壽命が疾くに来てゐるのだ！ それをこの上打棄つて置いて着られなくてもなつたら、それこそ着た切り一枚の身でどうして外を歩けやうか！ 毎日のパンを得るためにばかりでなく、これから將來の大きな望みに近附かうとするためにも、どんなことをしても毎日缺かさずせつせと工場へ通はなければならぬ……そんなことを「あゝか？」か「うか？」と寝ながら彼女は考へ耽つた。

しかし土曜日が来て、その一週間の給料一圓廿錢を手にすると、彼女はやはり肌襦袢をどうしても作りたくて溜らなくなつた。勿論上着の方もそのまゝにしては置けないとは思つたが、さうかと云つて肌襦袢の方は尙更ら一枚のまゝでも居られないし、それに性來の綺麗好きなので肌着を作ることには餘計心を動かされた。そんな譯で遂ひにその日肌着を作ることには彼女は定めて了つた。そして、上着の方はもと／＼布地が丈夫なものだつたから、まだ／＼ここ當分持つだらうから、破れたところだけ繕つて置けばいいと彼女は思つた。

ペリーヌは毎日工場の晝の休みを待ち兼ねて、いつもフランソア小母さんの家へ出掛けて行つて、

ロザリーのその後の病状を見舞ふのであつた。しかし、フランスアだと親切に容體を聞かせてくれるが、ゼノビイ伯母さんと碌々口さへ利いてはくれなかつた。そんな風でペリーヌはロザリーの容體を聞ける時と聞けない時があつた。

そのいつもロザリーを見舞ひに行く道の途中に、或る一軒の本屋と呉服屋とを一手に遣つてゐる店があつた。ペリーヌはその前を通る度にはいつも立止つては品物を眺めた。まあ！ 買ひたい！ 欲しいわねえ！ 彼女はいつもシヨウ・ウインドを覗きながら溜息を吐いた。或る時などは、工場の同じ女工だちが何かの買物を大事さうに抱へてその店から出て来る姿を、彼女は物陰にかくれて、それとなくさびしい溜息とともに見送つた。いゝわねえ！ みんなはお買物が存分に出来て……うれしいでせうねえ！ だけど、私にはそんな譯に行かない、そして、これからだつてさうだわ！ 屹度！ みんなは幸福ねえ！

しかしその日は一圓廿錢も持つてゐるのだから、彼女は安心して店へ這入つて行つた。

『いらつしやいませ！ 何を差上げませうか？……はい……』
中から出て来たのは小柄なお婆さんで、にこにこ笑ひながら丁寧な調子で云つた。

『あの……キヤラコは一ヤール幾らするもんですの？……一番安いのでいゝんですけど……』と、ペリーヌはおづ／＼と訊ねた。

『左様でございます。只今のところでは……左様でございますな。一ヤール十六錢でございます……はい……』と店のお婆さんは云つた。

ペリーヌはホツとした。

『ぢや、それをニヤール戴きますわ！』

『左様でございますか？……しかし、これは却つてお爲になりませんよ。二十錢の方になるとズツとお丈夫になりますか……』

『いゝえ、それで結構ですわ！』

『左様でございますか！ いゝえ、もう……私の方はこちらでも宜しいんでございますよ……はい……しかしお間に合はないといけないと存じまして……』

『まあ！ 大丈夫ですわ！』と、ペリーヌはお婆さんの言葉を俄に遮つてさう云つた。

お婆さんががてニヤールのキヤラコを切つてくれたので、彼女はさつきシヨウ・ウインドウにあつ

たものと色艶を心の中でくらべて見た。

『それから……何か外に御入用なものはございませんか？』

お婆さんはキヤラコをピリピリツ……といふ音をさせて裂きながら、ペリーヌに訊いた。

『さうですわね……。糸を少し戴きませうか……四十番の白糸ですよ！ え、四十番ですわ！』とペリーヌは云つた。

買物を新聞紙に包んで貰ふと、ペリーヌは今日こそはみんなのやうに小さな包をしつかりと胸にかへていそぐと店を出た。彼女はうれしくて胸がわくわくした。三十九錢の買物をしてつたので、八十一錢になつて了つたけれど、まづぐ次の土曜の給料日まで大丈夫だらう。食費としては四十錢あればいふのだから、諸雑費お小遣ひとして四十一錢残る筈である。

彼女は急いで島へ歸つて来た。あんまり駈け足で歸つて来たので、小屋へ這入つて腰を下ろすと息をするのが苦しいくらゐに疲れたが、彼女は早速縫仕事を初めた。篋付けはもう出来上つてはゐるが、それよりもまづ真直に裁つた方が、缺もない馴れないものには一番遣りよいと思つた。それから後で今着てゐる肌着に調子を合はせればいふと彼女は思つた。

仕事、案外よく出来た。道具一つない不自由な中でも、やつぱり氣を張つて遣つた所爲か、少しも遣り損ひもしないで布地が裁てた。しかしそれが頸と腕との開きに型を附けるところへ來ると、まあ、ペリーヌはどんなに心配をしたらう！ 裁つものと云つては小さなナイフがあるばかり、これでやつて若し布れ地を裂きでもしたら……と、慄へる手にグツと力を籠めながら運に任せてグイとナイフを更紗に當てた。

こんな風にしてどうかかうか肌着が出来上つたので、火曜日の朝にはその手製のを着て工場へ行くことが出来た。

その日も亦晝の休みになると、ペリーヌはフランソア小母さんの家へロザリーを見舞ひに行つた。ところが庭先で、向ふから縋帯で手を胸のところへ釣るして來るロザリーとバツタリ出會つた。

『あら！ あなたもうすつかり快くなつたの？ ロザリーさん！』
ペリーヌはおどろいて聲を掛けた。

『いゝえ……まだなの！ けど、家の人が「ちつと起きて庭でも散歩したらいゝだらう」つて云ふもんですから……それで……』とロザリーは答へた。

ペリーヌは久し振りでもまたロザリーと會つたうれしさに、次から次からと積る話は盡きなかつたが、どうもロザリーの方は打ち解けてくれなかつた。しかしペリーヌにはその譯が解らなかつた。

『あなたは今何處に泊つてゐるの？』

聽て、ロザリーは横目でデロリとペリーヌを眺めながら云つた。

ハツとしてペリーヌは返事に困つた。

『私し……ね、もつとここに御厄介になつてゐたいんでしたけれど、お金がだんく無くなつて來たもんですから、あなたの家へこれ以上御迷惑かけるといけないと思つて……それで……』

『まあ、さうだつたの！ けど、こゝより安い下宿が見附かつて？』

『あら、無料なのよ』

『まあ！ 何んですつて……？』

さう云つて、ロザリーはペリーヌをデロリとまた眺めたが、何んだか聞いて見なくなつた所爲か、ペリーヌに對する心持が前よりもおだやかになつて來た。

『まあ！ ぢや、あなたは今誰れのところにゐるの？』とロザリーは訊ねた。

ペリーヌはまたこゝで返事に困つた。

『詳しいことは後でお話するわ。ですから、今日は堪忍して頂戴！』とペリーヌは云つた。

『まあ、どうしたつて云ふの！ 一體全體……。え、いつでもいゝわよ！ そんなこと！ けど、オウルリーさん！ これは私からのお頼みなんですけれど、ゼノビイ伯母さんがゐたら、あなたは私の家へいらつしやらない方がよかつてよ！ 伯母さんはあなたがこへ來るのをイヤがつてゐるから……。ですから……。これからは夕方いらつしやいよ！ その時なら……。その時なら伯母さんは忙しいから外へ出て來ませんからね？』

ロザリーはペリーヌのものの悲しさうに顔を伏せるのにも頓着なく、どしどしと明らかにさう云つた。

ペリーヌは思はぬことを云はれて、さびしさうに肩をすぼめながらすすこと工場へ歸つて來た。

ロザリーの家へ行つていけないどんな悪いことをしたらう？ 彼女はその日一日中可哀さうにそればかりを考へつゞけた。

初めの七八日と云ふものは、夕方にさへなつて了へば、もう小屋の中が暗くなるので、たゞほんや

りと一人長い夜を明かすといふ始末で、どうやら退屈にだんぐなつて来た。そこで彼女は島のぐるりの所へ初めてだから行つて見やうと考へた。

それは美しい夕であつた。彼女は池のぐるりの草むらをそぞろ歩いた。ふと、自分の小屋を眺めて見ると、水を隔てた向ふの樹蔭にかくれてよく見えなかつた。鳥や野鼠・栗鼠などは人の氣配には少しもおどろかないらしい。

その時！ 足音におどろいた一羽のばんが飛び起つて水中へ飛び込んだ。思はず彼女はギョツとした。それからそこらを見廻して見ると、ばんの飛び起つて行つた跡には、意外にも美しい鳥の巢があつた。その巢は草と羽毛とでうまく出来てゐて、中には黒い斑點のある可愛らしい卵が汚れて十個ばかり轉つてゐた。

そしてまた面白いことには、その巢は草の中に包まれたまゝ水に浮いてゐた。近寄つてよく見ると、その小さな鳥の巢は打ち寄せる小波にゆら／＼と微に揺れてゐる……。けれども、そのぐるりに茂つた蘆が風や流れにその巢を持つて行かれないやうに、しつかりと、やさしくそれを守つてゐた。

親鳥のばんは遠くの方から心配さうにちつとこちらを見つめてゐる。ペリーヌは自分がかくれたら

巢へ歸つて来るだらうと思つて、傍の背高く伸びた草蔭へそつと身をかくして待つてゐた。

けれども、どうしてもばんが歸つて来さうにもないので、ペリーヌはそこを立ち去つた。彼女の足音におどろいた鳥が四方から飛び起つと、素早く池に漂ふ睡蓮の葉に下りて、ギヤア、ギヤア、と喚いてゐた。

一時間ばかり散歩して小屋へ歸つて来て見ると、もう小屋の中は薄暗くなつてゐた。まあ、何んて静かな美しい夕だらう！ こんな素敵な小屋を持つてゐるのは自分ばかりと思つたら、水鳥までこんな巢を持つてゐたのが彼女にはうれしかつた。

いつもペリーヌの忘れることの出来ないのは、夢にさへ見る過去の悲しい思出の數々であつた。月日としては僅か五六ヶ月に過ぎないけれど、その短い月日に起つた悲しい事、辛いことなどがそれ以來幾度彼女の夢を破らせたことだらう。その度ごとに彼女はぐつしよりと寝汗を掻いて目が醒めるのであつた。そんな風じそれから彼女は夜になりさへすれば、とても言葉にも筆にも現せない悲しい過ぎた日を見るのか、毎夜のやうにうなされてぐつすりとは寝られなかつた。

しかし、かうしてマロクールの村へ住んで、工場へも通ふことが出来て、いよ／＼たのしい行末の

ことが考へられるやうになつた今では、幸ひに夜は前よりもうなされないやうになつた。
 彼女はたのしさうに明日の工場での仕事のことや、欲しいと思つてゐる上着のことや、昨日作つた肌着のことなどを次から次へとたゞ取り留めもなく考へつゞけた。そして、散々考へて考へ疲れるとぐつすりと眠るのがそれ以來の日課であつた。

しかし、その夜はいつにない散歩をして寝たためか、眠ると間もなく彼女は素敵な夢を見た……何處とも當て途なく原の中を歩き廻つてゐると、不思議なことにひよつこりとお城のやうな大きな廣い臺所を見附ける……そこには意外にも恐ろしい顔附の一寸法師が、焰々と燃え上る火を前にした大テーブルにうじやうじやと坐つてゐる。卵を割つてゐるもの、またそれを茶碗の中で掻き廻してゐるもの……一寸法師は今料理の最中……その卵は瓜のやうに大きいのがあるかと思ふと、また中には豆粒のやうに小さいのもあるといふ具合で、これから一寸法師は素敵滅法界な御馳走を作り出す……まづ第一にチーズとバター付きのポイルド・エッグス、ゆで卵、その次にはトマトを添へたポイルド・エッグス、次にはお美味しさうなポーチド・エッグス(落とし卵)、またその次にはフライド・エッグス(卵フライ)、また次にはハムやキッドニイ付きのオムレット(卵焼)、それからジャムかラムの

かゝつたオムレット——そんなものが數限りなくテーブルの上にならべられて、まるで卵料理百般の陳列會のやうで、パチ／＼と音を立しく燃え上つてゐる火の上にはラムがいゝ具合に熱くなつてゐる……その上にもう一つ忘れてならぬ御馳走は、コック長特製のパストリー(麥粉を焼いて作つた菓子)と色のいゝクリームである……まあ、何んてお美味しさうなんだらう!

時々ベリーヌはうつつとしながら、この愚にもつかない夢を消して了はうとしてみたが、一生懸命に消さうと焦れば焦るほどまたまたその夢は甦つて来て、相變らず一寸法師はせつせと不思議な仕事をしづけるので、いつの間にか朝になつて工場の汽笛が鳴り響く頃になつても、彼女はブン／＼いゝ香りのするやうなミルクチョコレットを作る一寸法師を、感心した顔附でぐつと夢の中に眺めてゐた。

やがて、朝の爽やかな空気を吸ひながら、彼女は外へ出て昨日のところをぶら／＼と歩き廻つて見たが、朝の景色は夕方の美しさとは比べものにはならなかつた。けれども昨日の巢のあるところへ行つて、その中の卵を眺めたとき、彼女ははじめて昨夜の不思議な夢の謎が解けた。さうだ! この二週間といふものはパンと水だけで露命を繋いでゐる有様だから、彼女がこの昨日の夕方見た卵をあん

な夢に見たのは怪しむに足りない！ 今から考へて見ればまことに果敢ないあの夢の中で、一寸法師が寄つてたかつてお美しい料理を作つたのも、つまりは長い間お美しいものに飢ゑ切つたペリーヌがせめても夢の中で心ゆくまで味つたのである。お、可哀さうなペリーヌよ！

そんなに食べたいものなら食べるがよい。卵はそこらに幾らでも轉つてゐるではないか！

他人の家の飼ひ鳥ではあるまいし、幾らそれを取つたからと誰れからもとがめられないだらう！

しかし……勿論こゝに臺所道具は元よりフライ・パン一つあるぢやなし、昨夜の夢に出て来たやうな御馳走が作れる譯でもなかつたが、何よりそこに卵がどつさりあるんだから、それ程むづかしい道具立てをしなくても、そこらの樹の枝を一掴み持つて来て火を點ければ、その暖かな灰の中で卵は半熟なりと何んなりと思ふ存分出來るではないか！ これは素敵だ！ 素敵だ！ そして鍋一つぐらゐる心掛けて置けばその中には買へるだらう。まあ、素敵だ！ 素敵だ！

その日は工場の仕事をしながらも、ペリーヌはあくか？ かうか？ とそのことばかりを考へつゞけた揚句、マツチ一箱と鹽を二錢ばかり歸へりに買つて行くことにした。そして、その日の午後歸へる途中で買物をしてふと、彼女は待ち切れなくなつて小屋まで一目散に駆けて歸つて來た。

彼女はこの又とない巢を見附けたのがうれしくて溜らなかつた。丁度幸ひその時には親鳥が何處かへ行つて巢の中にはゐなかつたが卵の數が昨日よりも一つ殖えてゐるのを見ても、たしかに毎日こゝで卵を生んでゐるに違ひない！

さあ！ 又とない機曾だ！ 有り難いことにはまづ卵は新しいし、この中五つや六つ持つて行つたところで、勘定を知らない鳥は氣が附かないだらう！ さあ、又とない機曾だ！

しかし、今までのペリーヌなら介はず巢を空にしたらうが、さて、かうして持つて行く段になつて見ると、そんな可哀さうなことは到底出來なかつた。凡そどんな場合でも、自分が悲しいと思ふことは他人も悲しいにちがひない！ その心持に人間と動物との隔りのあらう筈はない！ 人間が悲しいと思ふことは動物も亦悲しいにちがひない！ 彼女はそれを思ひ遣つて、あのパリカールを可愛がつてやつたことを思ふと、どんな動物でも人間として憐れみいたはつてやらなければならぬ。

卵は首尾よく持つて來られたが料理する場所に困つた。迂濶に小屋の中で料理して煙でも出したら、それこそこゝに自分のゐることが人に知れて了ふからである。彼女はこれには少からず頭を悩ませた。ところが幸ひ小屋の近くにジブシイがテント生活をしてゐたので、そこらで煙を出す分にはまづ人

から怪しまれる氣遣ひはなかつた。

彼女は早速に木枝を拾ひ集めて火を點けると、直ぐ卵の一つを燃え上る火の中へ入れたが、さあ！ 困つたことには卵をうけるコツプがなかつた！ どうしたらいいだらう？ 彼女は一寸途方に暮れてゐたが、間もなくうまい考へが思ひ浮んだ。それは一片れのパンへ穴をあけて卵をそこへ流し込むことであつた。早速一つや〇て見ると、すぐうまい具合に卵がパンへよく滲みて、案外面白いものが出來上つた。それを一口早速煎張つて見ると、そのお美味しいこと！ お美味しいこと！ 何んにたとへやうもない位であつた。

そんな具合ひで、久し振りにペリーヌはお美味しい晩食を濟ませて了ふと、残つた卵を明日からどんな風に料理して食べやうかと考へた。しかし、それにしても卵は萬事儉約して使はないと、こゝ當分はあの巢へ取りにも行けないから……と彼女は思つた。あゝしたらお美味しいだらう？ かうしたらお美味しいだらう？ といろ／＼考へてゐる中に、彼女は卵のスープを考へ附いた。新しい卵を割つて入れたお美味しいスープ——これは何んなにお美味しいことだらう？

さう一圖に彼女は考へたが、すぐ鍋一つないでスープが作れるものぢやないと悄氣て了つた。けれ

ども暫らくすると、あのズツクの靴や肌着だつて不自由を忍んで作つたことを考へると、スープの道具だつて何んとかしたら出來ない筈がないと勇氣が出た。何事によらず苦しさを耐へ忍んで行けば、人間として出來ないことがあらうか——と、彼女はさう考へて見たものゝ、スープの鍋や匙などはとても作れさうにもないので、こんどの給料を貰つた時にそんなものは買ふことにして、それまでは工場への行き歸へりに——途々の家から洩れて來るスープの香ひを嗅いで我慢しなければならぬだらう。

さう獨りつぶやきながら、彼女が工場へ行く途中——丁度村端れまでやつて來ると、道端の塵芥や壞れものゝ捨てゝある中に、大小様々な罐詰の空き罐が澤山轉がつてゐた。

それがまだ錆びてゐないのを見ると、彼女は早速そこへ行つて取つて來やうと立ち止つた。鍋にしる、皿にしる、フオークにしる、匙にしる、臺所道具一式はこゝでみんな準へられると思ふと、彼女はいそ／＼とそこへ行つて空き罐を四つばかり拾つて來た。そして、また夕方工場が終つて歸つて來る時に小屋へ持つて行くことにして、傍の垣根の裏へそつとそれを隠した。

聽て、夕方になつて工場の仕事を濟ませると、ペリーヌは今朝のところへやつて來て、垣根の蔭か

ら四個の空き鑊を取り出すと、いそ／＼と小屋を指して歸つて行つた。

彼女はこの小屋では煙りを出すことはもとより、音一つさせてもいけないと思つたので、その日の仕事が終わると小屋から出て、また近所のジブシイのテントの方へ行つた。そして、そつちの方へでも行つたら、鍋皿や匙などを作るために鑊を平にしなければならぬから、何か金槌の代りにでもなるものがあるだらうと彼女は思つた。

この道具を作るのは随分むづかしい仕事であつたが、中でも一番手古摺つたのは匙で、これには少くとも三日間はかゝり切りであつた。そして、やつとのことで三日目に出来上つたには出来上つたが、とても誰れが見たつてそれは匙だとは思へないものであつた。けれどもこんなところで誰れが見るぢやなし、結局匙に使へさへすればそれで充分であつた。

さあ、かうなると――スープがどんなに戀しくなつたらう！ いや、スープばかりぢやない！ バタもすいばも欲しくなつた。バタとミルクの方はどうせ自分では作れないものだから買ふより外はなかつたが、すいばの方は向ふの野原へ行けばいくらでもあつた。それにそこにすいばばかりではなく、野生ではあるが人參やはまべんけい草などが生ひ茂つてゐる。勿論これらはみづかな野生のものだから、

農夫が畑へ植ゑつけたものとは較べものにはならないが、さうかと云つてそんなに捨てたものでもなかつた。

そして、卵や野菜や食器類が揃つたばかりでなく、尙ほもう一つ有り難いことは――道具さへ作れば池からは魚が釣れるではないか！

そこで彼女は釣糸と餌が欲しくなつた。ところが都合のいゝことにはいつぞや靴の時の糸が残つてゐたので、新しく金を出して準備するものはたゞつりばりだけで、あとの針を結ぶ馬の尻尾の毛は銀冷屋へ行つて拾つて來ればいゝ譯じ、案外わけなく上等な釣竿が出来上るだらう。あゝ、大きいのが引つかゝらなければ小さいのでも介はない。

一四

素敵な御馳走

ペリーヌはそれから夕方になるといつも忙しいので、ロザリーの見舞ひに行かう行かうと思ひながらも、到頭まる一週間が夢のやうに過ぎて了つた。けれども、フランソア小母さんの家に泊つてゐる仲間の一人から、絶えず工場で間接にロザリーのことは聞いてゐるので、ペリーヌはロザリーの容體は毎日手に取るやうに解つてゐた。その中に一度は見舞ひに行かうと幾度考へたか知れないが、毎日夕方になれば忙しいのと、またもう一つの原因はゼノビー伯母さんに會ふのが恐ろしいので、つい明日明日と云ふうちに今日まで見舞ひが延び延びになつたわけだつた。

或る日の夕方のことであつた。彼女はいつものやうに工場の仕事を終へて歸り仕度をしたが、今日は昨日釣つた魚があるので、晩飯の用意をする必要がなかつた。そこで、そのまま真直に家へは歸ら

ずに、久し振りにロザリーを訪ねやうと、丁度フランソアの小母さんの家の前にさしかゝつた。ロザリーは庭の林檎の樹の下のベンチへほんやりと腰をかけて、何か頻りに考へ込んでゐるやうな風であつたが、ペリーヌの姿を見るとツと起ち上つて、どこか不貞腐れたやうな面持で入口の方へやつて來た。

『まあ、オウルリーさん！あれつ切りあなたは來ないのかと思つたわ！でも、よく來られたわね。』

『まあ、御免なさいね！つい忙しかつたもんだから……』

『あら！何んでそんなに忙しいの？』

ペリーヌはまづ靴をロザリーに見せた。それから肌着を作つた時の苦心談を話して聞かせた。

『あら！だつて、鉄ぐらゐは家の人に借りればいゝぢやありませんか！』

ロザリーはびつくりして云つた。

『でも、借してくれる人なんて一人もゐないんですもの……』とペリーヌは答へた。

『まあ、いやだ！鉄ぐらゐ誰れだつて持つてゐるぢやありませんか！』

もうかうなつては祕密を打ち明けて了はうか、どうしやうか？とペリーヌは迷つた。しかし

これ以上どつちにしろ隠してゐたら、さぞロザリーが氣持を悪くするだらうと思ふと、結局打ち明けずには居られなかつた。

『いゝえ、だつて、誰れも居ないんですもの……。』

ペリーヌは癡笑みながら云つた。

『まあ！ 何んですつて？』

ロザリーは目を丸くして訊き返した。

『全くなの……。ですから……たとへば私がスープを食ふたいと思つたつて、ほら！ 鍋や匙がな

いでせう？ だから、私しそれを一々みんな拵へたのよ！ ですけど……ね。今から考へて見ると

……匙を作ることを考へたら、この靴なんて拵へたのは随分やさしいと思つたわ！』

『まあ、冗談ぢやないわ！』

『いゝえ、本當の話なのよ！』

さう云つて彼女はロザリーに一仔細終を物語つた。小屋を偶然見附けたこと、臺所道具を作つたこと、卵をひよつくりと見附けたこと、魚を池で釣つてゐること、それから其れをわざ／＼近所のジブ

シイのテントの脇まで持つて行つて料理をすることなど——それからそれへと残る隈なくペリーヌは話した。

ロザリーはまるでお伽噺でも聞くやうに——目を大きく見張りながら面白さうに耳を傾けてゐた。聴て、ペリーヌがすいばのスープの作り方を話し出すと、ロザリーは思はず両手を叩いた。

『まあ、素敵だわねえ！ お美味しいでせうねえ！ まあ、愉快だわねえ！』と彼女は叫びつゞけた。

『えゝ、本當に……何んでもうまく行つた後には愉快だわ！ けど、どうしてもうまく行かない時なんて、全く情けなくなつて涙がこぼれるわ！ お匙を作るときは一番非道かつたのよ。何しろ三日間

といふものは遣り損ひばかりしてゐたんですもの！ そしてやつとお匙は出来上つたけれど、とても満足には使へませんの！ 鏝だつて三つのうち二つまで無駄にしちやつたんですけれど…… その上

……ほら御覽なさい！ この指を金槌にした行で何百度叩いたか分らないのよ！』

『まあ……！！ けど、先刻云つたのはスープのことよ！』

『あら！ さう……？ えゝ、スープなら随分お美味しかつたわ！』

『何しろ……ね』とペリーヌはまた言葉をつゞけた『原へ行きさへすれば……ね、すいばや人參や、

みづたでだとか……ね、葱やおらんだ防風やかぶら……その外いろくな食べられる草が一杯あるのよ。ですから、ちつとも不自由しないわ！ そりやあ、畑に作つたのとは較べものにはならないけれど、随分お美味しいわよ！』

『まあ、よくそんなこと解るわねえ！』

『ええ、お父さんがよく教へて下さつたものよ……。だから、よく知つてるの。』

ロザリーは一寸考へ込んでゐたが、すぐまたペリーヌに話しかけた。

『あの……あなたのところへ私し行つても介はないこと？』

『あら！ 本當にいらつしやる……？ まあ！ うれしいわ！ けど、他の人にはきつと内密にしといて頂戴ね？ お願ひですから……』

『ええ、そのことなら大丈夫だわ！』

『あら、さう……？ ぢや、何時あなたいらつしやる……？』

『さうねえ……何時にしやうかしら？ あ、さうさう……丁度こんどの日曜には、私はサン・ピホアにゐる伯母さん處へ行くことになつてゐるから、その歸りがけに屹度お寄りするわ！ 勿論……午後

になるかも知れないけれど……』

ペリーヌは一寸ためらつてゐたが、すぐ素直にかう答へた。

『ぢや、たゞ話したつて面白くないから、一緒に御飯を食べませうよ！』

ところがロザリーは田舎の人のやうに深慮ばかりして、堅苦しい言葉でどつち附かすのことをつ

ぶやくやうに云つてゐたが、やはり内心ではよろこんでゐるらしい。ペリーヌは是非に……と云つた。

『ね、さうなさいな！ ねえ、ロザリーさん！ あなたがさうして下されば、私し本當にうれしいん

ですの。いつでも獨りほつちで御飯を食べるので、淋しくて私し溜らないのよ！ ねえ、だから……

お願ひ！』

『さうお……。本當に……ぢや……』

『まあ、いゝぢやありませんか！ ロザリーさん！ 一緒に食べませうよ。いゝこと？ お約束した

わよ！ けど、あなたの分のお匙だけは家から持つていらつしやいな！ 今からあなたのお匙を造へ

初めても間に合はないから……』

『ぢや、パンも持つて来るわ。』

『結構だわ！ ぢや、日曜日の午後になつたら、私しきつとあのジプシイのテントの傍でお待ちして
ますわ！ その頃丁度あたしが煮物でもしてゐるから、直き解りますわ！』

ペリーヌは自分のところへお客をと思へばうれしくて溜らなかつた。……獻立を考へたり、御
馳走を作つたり……だけど、まあ、これはエライことになつた！ せめて相當の日にちのあることな
ら兎に角、かう日が迫つてゐるのに御馳走するなんて、どうしてそんなことを云つて了つたのだらう！
彼女は大變なことをして了つたと思つた。

それに……よく考へて見ると、若し卵なり魚なりが取れなかつたら、それこそ食べるものはすい
ばのスープばかりになつて了ふだらう！ まあ、何んて貧しい御馳走だらう！ けれどもペリーヌ
は運がよかつた。それは金曜日の夕方になつて卵を見附けたからである。いつもの鴨の卵だとよか
つたが、こんどのはばんの卵だつたので小さかつたが、それでも有難いと思はなければならなかつた。
それからもう一つ有難いことには、ロザリーとペリーヌと二人がよりで食べても食べ切れないほどな
素敵な鮒が釣竿に引つかつたのである。かううまく御馳走が揃つて見ると、一寸した口直しが欲し
くなつた。それには丁度お誂へなグースペリーが柳の下になつてゐる。まだ少し青すぎたが、この果

の値打は赤くならない中でも食べられることだ。これは素敵な口直しだ！

ロザリーがジプシイのテントの脇へやつて来たのは、日曜の午後過ぎであつた。丁度その時ペリー
ヌはそこでスープを煮てゐるところであつた。

『まあ、よく来たわね！ あたしあなたの来るのを先刻から待つてたのよ！ この卵をよく掻き廻
して戴かうと思つて……。まあ、濟みませんわね！ お願ひしてよ！ それから私がかうしてスープ
をかけてゐますから、あなたその空いた手で一寸このパンを裏返しにして頂戴な！ パンによくス
ープが浸み込むやうにするんですから……。まあ、濟みませんわね！ 有がたう！』

ロザリーはよそゆきの着物にも頓着なく、甲斐々々しくペリーヌの手傳ひをした。
廳で、スープが出来上ると、ペリーヌはそれを小屋まで運んだ。

小屋の中は美しい花で飾られてあつた。部屋の四隅は野薔薇、あやめ、やぐるまぎく、ひなげしな
どが、寶石のやうにうつくしく咲き亂れて、萌え上るやうな青苔が絨緞のやうに床板に敷かれてゐた。
ロザリーは感謝に満ちた顔を輝かせて、うれしそうに云ふ。

彼女は目を丸くして叫んだ。

『あらッ！ まあ！ 何んて綺麗なんぞせう！ まあ、綺麗なこと！』

青草のテエブルの上には樹の葉の皿が差し向ひに置いてある。その中で細長い大きな葉は盛り皿らしい。新鮮な水たをあしらつた鮎が皿の上でピチピチしてゐる。その傍の小さな樹の葉は鹽皿、その次の葉には蒼白いグースベリーが口直しに盛られてある。それらの皿の合間に飾られたアネモネの白い花が、まるでプラチナのやうにキラキラと青葉の中に光つてゐた。

『さあ、どうぞ座つて下さいな！』

手を伸ばしながら、ペリーヌは云つた。

二人は向ひ合つて座つた。

間もなく御馳走を食べはじめた。

『まあ、あたし來られてよかつたわ！ こんな美味しい御馳走にはなるし、こんな綺麗なお部屋を見せて戴けたし……あたし本當にうれしいわ！』

ロゼリーは口一杯に頬張りながら云つた。

『あら、何か來られない事でもあつたの？』

『ええ、ベンディットさんのことでピツクキニへ言つてを頼まれたものですから……。あの……ベンディットさんは病氣になつたのよ。』

『まあ、どんな様子なんですの？』

『腸空扶斯なの、大變に悪いんですつて。昨日から何んでも……口が利けないし、人の見分けも附かなくなつたんですつて……。困つたわねえ……。？ ですから、わたし……あなたならどうだらうと……思つてゐることがあるんだけれど……。』

『あたしなら……!! 似たこと？』

『いゝえ、あなたなら出タることだわ……。』

『まあ、あたし見たいなものにでも出來ることなら、似たことでもベンディットさんのために喜んでしますわ！ 本當に……。いつでも私に親切にして下さつたんですもの、こんな時こそ御恩返しですわ。けど、こんな私に何が出來るつて云ふんでせう……。？ あたしには薩張り解らないことよ。』

『まあ、一寸待つて頂戴！ オウルリーさん、濟みませんけれど……。そつちのお魚と水たをもう少

し……こつちへ廻して下さいな。まあ、どうも有り難う！ 済みません！……まあ、あなたに解らないの？ いゝわ、話して上げてよ、かう云ふ譯なの……。ベンディットさんは……。ほら！……外国通信の係りで、英語と獨逸語の翻譯を受持つてゐるでせう！ ですから、こんどなんかの病氣ぢやあ、とてもそんな別を使ふ仕事が出来つてないぢやありませんか！ そのためにみんなは誰れか代理にやる人はいかつて探し廻つてゐる譯なの。けど、この代理にやつて貰ふ人つて云ふのは、つまりベンディットさんの病氣が癒るまでつていふんですから……。臨時のわけなのよ！ それで今迄はフアブリーさんとモンブルーさんの二人で代理を務めてゐたわけなのよ。ところが……。フアブリーさんはこんど英國のスコットランドへ出張して了つたので、あとはモンブルーさん一人で遣つてゐるんですけど、大變困り切つてゐるんですつて……。さ。あの人はドイツ語は達者なだけけれど、どうも英語の方は不得手だからなんでせう！ どうも困つた！ 手紙が満足に書けないんだからな！——つて、その時脇であの人が云つてゐたわ。ですから……。あたし……。あなたが英語とフランス語と兩方知つてゐるつてことを、モンブルーさんにお話しやうと思つてゐる——とかう云ふ譯なのよ。』

『あたしはいまゝで、お父さんとはフランス語で話しをしてゐたし、お母さんとなら英語で話しをして

ましたわ。それからまた家中三人揃つて話をする時などには、自由に兩方を混せて話してゐたのよ。』

『ですから……。あたしこんな事をあなたに云つていゝのか、悪いのか知れないけれど、あなたさへ介はなければ、あたし一應モンブルーさんによく話して見やうと思ふんですけれど……』

『まあ、結構ですわ！ どうぞ御願ひしますわ！ あたし見たいな女工でも役に立つと思ふなら……。』

『まあ、女工だらうが奥さまだらうが、そんなことは問題ぢやないわ！ そんなことより英語を知つてゐるかどうかが問題なんだわ。』とロザリーは云つた。

『えゝ、そりやあ、まあ、英語は知つてゐますけれど、商業上の手紙を翻譯することはまた調子が違ひますからね。』とペリーヌは不安な顔附で云つた。

『それはもう大丈夫よ。そんな心配は要らないわ！ モンブルーさんが傍に附いてゐるんですもの。商業上のことならあの人は何んでも知つてゐるわ。』

『さうですわね。ぢや、一つモンブルーさんへよろしく願ひするわ！ こんなことでベンディットさんのお手傳ひが出来るとのなら、あたしよろこんでしますわ。』

『え、承知したわ！』

二人がそんな話に夢中になつてゐるうちに、あれほど大きい魚や氷たでがいつ食べたともなく無くなつてゐた。

そこで口直しといふことになつた。

ペリーヌは起ち上つて、魚の皿と小さなコップ形の樹の葉の皿と取り換へた。そして、絞り模様のやうな美しいグースベリーを枝からもぐとロザリーの前へ出した。

『さあ、うちのお庭の果物を、少しあなたにお裾分けしてよ。』

彼女は人形ごつこでもしてゐるやうな調子で無邪氣に笑ひながら云つた。

『まあ、お庭つて何處？』

『ほら、その上の方よ！ グースベリーが柳の樹の枝にからまつてゐるぢやないの！』

『まあ、面白いわねえ……。けど、オウルリーさん！ こゝに何時まで居るお積りなの？』とロザリーは訊きた

『さあ、冬までは大丈夫だと思ふけれど……』

『冬まで！ まあ、冬まで？ いゝえ 鳥さしが直きにこゝへ来るわよ、屹度！ 毎年いつもさうだから！』

『あら！ まあ！ あたし……どうしやう……まあ！ あたし……どうしやう……』

それを聞くと、いままでの晴れ晴れした心持も一時に曇つて了つた。

その夜は定めしいつになく眠れなかつただらう。

何處へ行かう？ 何處へ行かう？

そして、あんなに辛い思ひをして造へたこの道具を、どうしたら一體いゝのだ？

あゝ、何處へ行かう？ 何處へ行かう？

第一の機會

もしロザリトが獵期が迫つてゐることを話してくれなかつたら、恐らくペリーヌは何んにも知らずに平氣でゐたらう。全くこの話は寢耳に水であつたが、またベンデイツトが急に腸空扶斯になつたことから、翻譯係の話が突然轉げ込んで來たことも、ペリーヌには思ひも懸けないことであつた。本當にこの島は美しい！ こんな美しい島を近い内に見棄てなければならぬと思へば、彼女は溜らなく悲しかつた。しかし一方にはいよく工場の幹部の一人に抜擢される好運が廻つて來たのである。物事もこゝまで運が向いて來たが最後、總べてはもう瞬く間に成るだらう。もう今となつては何より先に腹に決めねばならないのはその事で、もうこの場合になつてはこの小屋を出る悲しさなどは問題にして居られなかつた。或る時は小鳥の巢を漁り、或る時は池に釣糸を垂れ、或る時は花を摘み、

また或る時は梢にさへづる鳥の歌を聞く——さうしたこの島のたのしい狐獨の生活も、つまりはいまだに癒えぬ辛い悲しい旅の疲れを慰める途の一つで、それは決してたゞの遊び半分にしてゐたことではなかつた。彼女はどうしても母の遺した最後の希ひを實現しなければといふ思はくがあつた。

ペリーヌはロザリトと小屋で別れる際に、それでは兎に角明日の月曜日にフランソア小母さんのところまで、モンブルーさんの方の様子を聞きに行くと云つて置いたので、翌日の工場の晝休みにそつとロザリトのところへ行くと、ロザリトの話では——今日のところは英國からの通信がないから頼むものはないが、明日になればきつと出て來るだらうからよろしくたのむ——と云ふことなので、ペリーヌは厚くロザリトに禮を述べて工場へ歸つて來た。

ところがその日の午後二時を打つた頃、ペリーヌの傍へ例の「よたくお爺さん」が義足でピヨンピヨンと跳ねながら來ると、事務所で彼女を呼んでゐるから早速行つて來いと云つた。

『まあ、何んな御用なんでせう？』

彼女はおどろいて彼れに訊ねた。

『それは俺れの知つたことかい！ 何んでもいゝぢやないか……來いつて云ふんだから、さつさへ行

つて来い！』と彼はどげん、しく云つた。

彼女は急いで工場を出たが、何が何んだかさっぱり譯がわからなかつた。モンブルーの翻譯仕事の
手傳ひなら、何も事務所へなど呼び附けられるわけがなし、それに第一事務所の人たちが自分を知つ
てるわけがなし、またこんどの翻譯の手傳ひのことだつて、しぜん知る筈がないし……これは一體何ん
の用があるんだらう？

彼女は急いで石段を上ると、そこにタルウエルが人待ち顔に立つてゐた。

『お前かい……？ 英語を話せるつて奴は……？ だが、おい！ いゝ加減なチャラツポコを云ふと
承知しないぞ！』

『まあ、嘘なんか申しませんわ！ 私のお母さんは英國人で、お父さんはフランス人でしたもの。
ですから、両方の言葉が話せるんですわ。』

『よし！ ぢや、お前はこれからすぐにサン・ピポアへ行くんだ！ ヴェルフランさんがお前に會ひた
いと仰有つてゐるんだから！ おい！ いゝか！』

この言葉を聞くと、ベリーヌは悉皆りびつくりして了つて、たゞ目ばかりパチクリさせてタルウエ

ルの顔ばかりを見詰めてゐた。

『おい！ 馬鹿！ 何をいつまで……鳩が豆鐵砲食つたやうに突つ立つてるんだ！ 馬鹿！』と彼れ
は怒鳴つた。

彼女はハツとしてテレたやうな調子で云つた

『まあ、あんまり突然のこと……びつくりしちゃいましたわ！ けど、私し困りましたわ。まだこ
の土地へ来てから間もないので、サン・ピポアへ行く道筋が解りませんが……』

『そんな餘計な心配はするな！ 黙つて馬車に乗つて行きやそれでいゝんだ！ おい！ ウキリア
ム！ 何を愚圖々々してゐるんだ！ 早く馬車をこつちへ持つて来い！』

パンダヴォア又家の馬車は向ふの木蔭に停つてゐたが、タルウエルの聲と一緒に動き出して、馳て、
しづかに事務所の前に構附けられた。

『おい！ この餓鬼をたのむぜ！ 大至急にヴェルフランさんのところまで運んで行つてくれ！ さ
あ、ほや、くしてゐるんぢやないぜ！』

タルウエルは若い馭者のウキリアムに云つた。

ペリーヌが石段を降りて馭者臺の方へ乗りかけると、ウキリアムは狼狽て、手を振つた。

『おつと、こゝちやいけない！……うしろの坐席、うしろの座席……』と彼れは云つた。彼女が狭い一人乗りの座席へ腰を下すと、すぐ馬車は勢ひよく走り出した。馭者は村を出ると馬の足を緩めながら、くるとペリーヌの方を振り向いて云つた。

『なんだよ……お前さんが行つたら親玉はどんなに喜ぶか知れないよ。』と彼れは云つた。

『まあ、どうしてですの……？』とペリーヌは訊ねた。

『いゝえ……さ、親玉がこんど注文した機械の据附けに英國から技師を招んだんだよ。ところが……ほら！チンプンカンブンと来てゐるだらう。そこで親玉はモンブルーさんに通譯して貰ふ譯だつたが、合憎大將の英語がどうしたのか一向先方へ通じないんだよ。だもんだから、兩方で……お前さん！互ひに頭から湯氣を出してペラム／＼やつてるんだけど、やつぱり一向に通じないんだよ。さあ、さうなると傍に見てゐる親玉が承知しないや。これがまた……お前さん！カン／＼になつて頭から湯氣を出して怒つちやつたんだよ。は、は、は……まあ、一度その珍妙奇天烈なチンプンカンブン・ペラム／＼／＼つて奴を聞いてごらんよ！腹の皮がくしゃ／＼に燃れつちまふよ！實際……』

。かうなつちやあいかなモンブルーさんも、これ以上どうにも手の出しやうがなくなつたんで、早く親玉の角を引込めさせにやならんといふので、それ！お前さんの話しを出したんだよ。ところが親玉はすつかり氣を腐らせてたところだから、本當の二つ返事と云ふ奴で、さあ、その娘さんを直ぐ連れて来い！歩いてなんか居ちや日が暮れる！馬車で迎ひに行け！馬車！馬車！……と云ふことになつた譯さ。だから、お前さんが今行つてやつたら、親玉はどんなに喜ぶか知れないぜ！』

さう云ひ終はると、馭者は口を襟んだ。

ペリーヌは黙つてゐた。

馬車はなだらかな街道を走つて行く。暫くすると、馭者はまたうしろを振り向きながら云つた。

『だけど……何んだぜ！お前さんもやつぱりモンブオさんの細なら、こゝんところはおとなしく歸つた方が無事だぜ！どうだね？ここで降り上げてやうかね？』

彼れは笑ひながらそんな冗談を云つた。

『いゝえ、大丈夫ですわ！』

ペリーヌはしづかに答へた。

『あは、は、は、は……。それで助かつた！……何あに……。ね。一寸云つて見たゞけの事さ！』

『有り難う！ けど、本當に大丈夫ですからどうぞ——』

見たところでは大變落ち着いてゐるやうだが、ペリーヌの胸の中はいろ／＼な心配で一杯であつた。普通日常使ふ英語には充分な自信はあつても、こんどのやうに技師の専門的な話がよく聞き取れるかどうか、何しろ初めてのことだから自分にも見當が附かなかつたからである。ウキリアムが云つた冗談のやうに、モンブロオと同じ失敗をするのではないか？ きつと自分には通譯出來ないむづかしい専門の言葉が澤山に出ることだらう？ さうしたら定めし……解らないでヘドモドするだらう？ それを見たらパンダウオア又はきつと、モンブルーと同じやうに叱り附けることだらう？——と、そんなこんなな心配で彼女の胸は頻りに波立つてゐた。

そのうちに馬車はいつの間にか、ポブラの樹の向ふにサン・ピポア工場の煙突が見えるところまで來た。あそこはマロクール工場と同じやうに紡織工業ばかりでなく、赤繩や赤糸なども製産するところである。けれどもそんなことを知つてゐたところで、これから遣るむづかしい通譯の何んの足しにも

ならないだらう。

馬車はやがて道を曲つた。

ペリーヌは馬車の上から工場をはるかに見渡すと、マロクール工場ほど大きくはないが、澤山の煙突の煙が高く冲天を焦してゐるあたりは、どこか嚴めしいところがあつた。

大きな鐵門を潜つて間もなく、馬車はその事務所の前でピツタリと停つた。

『さあ、來たよ！ ぢや、あたしと一緒に來ておくれ！』と駈者ウキリアムは云つた。

彼女はウキリアムに伴はれて事務所の中へ這入つた。中ではパンダウオアがこゝの支配人と椅子に對ひ合つて何か相談をしてゐた。

『旦那さま！ 只今歸りましてございます。あの……娘さんを連れて參りました。』

ウキリアムは胸のところ帽子をモジ／＼といじくりながら云つた。

『あゝ、御苦労だつた！ お前はあつちへ行つてよろしい！』とパンダウオア又は云つた。

ヴェルフラン・パンダウオア又は無言のまゝ、支配人にこちらへ來いと合圖をさせた。それから彼れは何か小聲で支配人にさゝやいた。すると支配人も亦低い聲でさゝやくやうにこれに答へた。けれ

どもペリーヌは支配人が「はあ、なか／＼嗜好さうな十二三の娘でございます」と答へたのを耳敏く聞いて了つた。

「こつちへお出で……」

パンダヴオアヌはやさしく云つた。

彼女は騒ぐ胸をちつと制へながら彼れの傍へ近寄つた。

『お前の名は何んと云ふのだね？』彼は訊ねた。

『オウルリーと申しますの。』

『あゝ、オウルリーといふのか！ で、お父さんやお母さんは……？』

『二人とも死に別れて了ひましたの。』

『工場へ勤めてから何のくらゐになるね？』

『三週間ばかりになりますの。』

『何處からお前は來たのかね？』

『パリからこちらへ來たばかりですの。』

『で、英語はどうして話せるのかね？』

『はい！ それは……お母さんがイギリス人だもんですから……。大概のお話なら解りますわ。けど……』

『けれども……ではいけない！ 知つてゐるのか、知つてゐないのか！ どつちだ！』

『でも、商賣上のむづかしいお話になると、私しの知らない言葉も随分出るだらうと思ひますわ。』

わたくしはそんなむづかしいことは解りませんの。わたくしの知つてゐるといふのも、平生使ふ英語の會話が自由に出來るといふだけでございますわ！』とペリーヌは云つた。

『ねえ、ブノア君！ この娘はあんなことを云つてゐるよ！ なる程馬鹿ぢやなさうだね。』

パンダヴオアヌは不意に支配人の方を顧みてさゝやいた。

『えゝ、顔附を見たつて解ります。』とブノアは答へた。

『成る程……これぢやあ、どうにかものに成りさうだね。あのモンブルー君ぢや全く弱つた！』

さう云つて、ヴェルフランは片手で支配人の肩を掴みながら、ステツキをつくつと椅子から不自由さうに起ち上つた。

「さあ、わしと一緒に来ておくれ！」と彼は云つた。

ペリーヌはいつも自分を省みることが忘れないが、先のことまでくよくよと女の腐つたやうには考へなかつた。けれども流石にこの時ばかりは心配で溜らなかつた。さあ、英國人の技師とうまく話が出来るかしら……？

やがて大きな赤煉瓦の建物の前へ出た。

ふと前を見ると、モンブルーが入口の前を不機嫌な顔をして行つたり来たりしてゐた。けれどもペリーヌの姿を見ると、彼は苦虫の顔を少しほころばせた。

ペリーヌが二人の跡から這入ると中は大廣間で、澤山の「モルトン・アンド・ブラット商會、マンチエスタア」と商標の附いた木箱が置いてある。英國から来たお客たちはその箱に腰をかけて、ざりざりしながら待ち兼ねてゐた。見たところキチンと洋服を着た紳士然とした男たちばかりなので、ペリーヌはがさつな職人でなくつてよかつたとホツとした。ヴェルフランが這入つて来るとみんなは一齊に起ち上つた。

「さあ、では……な！ オウルリー！ お前から一つその人たちに——お前が通譯をするのだと話し

ておくれ！」とヴェルフランは云つた。

早速ペリーヌは悪怖れもせずみんなに自分を紹介した。その一言でもう英國人たちは満足さうに一々うなづいてゐた。これでやつと助かつたといふやうにみんなはニコ／＼と頬笑んだ。

「話しがよく通じるやうです。」と支配人は云つた。

「さうか……それはよかつた！ それでは……オウルリー！ こんどは皆さんにかう訊ねて見おくれ。いゝかね？ 何故あなた方は打合せの日限より一週間も早くいらしたのですか？ それがために……英語の解る監督技師を暫く留守にさせたやうな手違ひが出来て困りました！ こちらでは打ち合せた日までにその男を歸らせて置いて、あなた方のお着きになると同時に機械の据附けが出来るやうにしようと思つてゐたのですが、こんなに一週間も早くお着きになつては、どうもこちらとしても少々お氣の毒でもお待たせをするより外致しかたございません——と、これ文のことを云つておくれ！」

ペリーヌが早速その通り通譯して聞かせると、一人の男がすぐ答へた。それをまた直ぐペリーヌがヴェルフランに通譯して聞かせた。

『皆さんはかう仰有つてゐらつしやいます。實は……カムブレイへ或る機械の据附けに出張したところ、思つたより早く仕事を終へて了つたので、一旦本國へ歸つてまた出直して來るのも何んだから、そのまゝ一直線にこちらへいらした——と、かう仰有るんです。』

『ふむ、成る程。いや、有難う！ よく解つた。ところで、そのカムブレイの何處の工場へ出張したのか聞いておくれ！』

『それは……エム・エム・アンド・イー・アヴェリン商會ださうです。』

『で、その機械は何んだね？』

それに對してすぐ先方の一人がペリーヌに答へたけれど、彼女はどうかへドモドした。

『何を愚圖々々してゐるのかね？』

ヴェルフランは、もどかしさうにさう云つた。

『御免下さい！ 私に肝心な機械の名が解らないんです。』

ペリーヌは、おどろきとさう答へた。

『よろしい！ では、英語で何んて云ふのだな？』

『ハイドローリック・マングルつて云ふんです。』

『あゝ、それは水力截斷機のことだ！ よろしい！ 解つた！』

ヴェルフランはさう云つて、口の中でその言葉を英語でいく度も繰り返したが、どうもその妙な發音の仕方から見ても、とても英語が話せるところまで行かないらしい。

『此奴はしまつた！ ブノア君！ アヴェリン商會に出し抜かれて了つたよ！ 愚圖々々してはゐられない！ 早速ファブリー君に電報を打つて歸つて來て貰はう。しかしその間へん、と待つてゐる譯には行かないから、早速この人たちに仕事を初めて貰ふやうに話さうぢやないか？ ところで、オウルリー！ 所でみんなは何をしてゐるのか訊いて見てくれ！』

彼女がその通り先方へ通じると、すぐ技師長らしい男が長い返事をした。

『どうしたね？』とヴェルフランは訊ねた。

『私には皆さんの仰有ることがよく解らないんです。』

『まあ、よろしい！ 介はずに云つてごらん。』

『かう仰有つてゐるんです。あの機械を据ゑ附けるには少し床板が弱いんですつて……。重さが……』

……えと……」
 彼女はそこでまづ言葉を切つて、傍の一人の技師をかへり見て機械の重さを訊ねた。すると技師はすぐ答へてくれた。

『あゝ、さうか！ ふむ、ふむ、それで……？』とヴユルフランは云つた。

『ですから……機械を動かす初めたら最後、床板をすぐ打ち抜くだらう——つて仰有つてゐますの。』
 彼女はヴユルフランにさう答へた。

それからそれにまた答へたヴユルフランの言葉を、こんどは技師たちにペリーヌは通譯をした。

『ねえ、みなさん！ ヴユルフランさんの仰有るには——土臺板は幅が六十糎（約二尺）あるんださうですが……』

すると一人の技師が片手を胸のところで振りながらそれに答へたので、ペリーヌは直ぐまたそれをヴユルフランに通譯した。

『……それはよくこちらで調べて見たが、とてもあのまゝでは床板が持たないと云ふんですの。一刻も早く本試験を一つして戴いた上で、丈夫な杵をどうぞ床下へ入れて下さい——つて、かう仰有るん

ですが……』

『うむ、さうか！ なあに……杵のことなら今日からでも遣らせやうが、本試験の方はフアブリーが歸つて来てからにしよう、さうお前から云つておくれ！ それで……仕事の方は精々勉強してやつてくれ！ その代りに職人は大工でも、石屋でも、水車大工でも、欲しい丈けいくらでも出すから、仕事はしつかりとして貰はなければならぬ！ 萬事細いことはすべてブノア君のところへ申出てくれるやうに——と、これ丈けのことを云つておくれ！』

彼女はこれを又みんな通譯して聞かせた。そして、みんなの通譯はペリーヌが一切引受けると云ふと、技師たちは非常に満足な様子であつた。

『では、オウルリー！ お前は今日からこの工場へ當分勤めておくれ。一切の賄ひは私の方でして上げるから、その方の心配はしないがいゝ。それから……よく勤めてくれゝば、フアブリー君が歸つて來たら その時にはお前に少し上げるものがある。どうかそれまでは一生懸命に私たちの手傳ひをしておくれ！ いゝかね？ オウルリー！』

ヴユルフランはやさしくペリーヌにさう云つた。

一六

可愛らしい通譯係

ペリーヌにとつては工場のトロツコ押しよりは、通譯係の方がどれ丈け楽だか知れなかつた。その日の通譯を無事に済ませると、ペリーヌは早速二人の英人技師に附添つて村の旅館へ行き、お部屋などの世話を何に彼としてやつた。ペリーヌも今日からはそのお附合ひで、この旅館の一部屋に寝起きすることになつたが、その部屋の立派なことはとても今迄の物置などは較べものにはならなかつた。それに英人技師は二人ともフランス語は一言もしやべれないので、御飯時にも何に彼につけて不自由だといふものだから、ペリーヌは御飯も二人と一緒に食べることにした。丁卓の上には屹驚りする程御馳走がならべられた。

その夜、ペリーヌは久し振りで人間らしい夜具で寝ることが出来たが、いろいろ行末のことなどが心配になつて眠れなかつた。ついうとくと眠りかけるかと思ふと、すぐ又何かに脅かされて目を醒す……どうかして氣を靜めて寝入らうとしても、臉は晝の疲れにぐつたりと重くなつてゐながら、どうしても眠ることが出来なかつた。いくら考へて見たところで、何事も成るやうにしか成らないものだから、下らなくよくと考へ込まずに、自然の成行に任せるのが一番いゝ。しかもすべてがこんな思ひも寄らない好運に恵まれやうとしてゐるのだから、尙更らのことよくせずにと待つことだ。果報は寝て待て！ 果報は寝て待て！ 運が向いて來たのぢやないか。しかし誰れだつてうれしい時には眠れないものだ。況して、かうして素敵なうれしい時にどうして眠られやう？ さあ、私の黎明が來た！ うれしい、うれしい。

あゝ、私は何んてうれしいんだらう！ 神様にわたしは感謝しなければならぬ。
その翌朝、工場の汽笛が高く鳴り響くと、彼女は二人を起しに英人技師の部屋へ行つた。
けれども二人はそんな汽笛には頓着なく、まづ顔を洗つてから熱心な化粧を済ませ、それからこつてりと焼いた牛肉、バター附きの焼きパンにお茶——といふこゝらの人の食つたこともないやうな朝飯を済ませた。

ペリーヌは外でしづかに二人の出で来るのを待つてゐたが、仲々出て来ないのでどうしたんだらうと心配した。けれどもやがて二人は漸く出て来たので、ペリーヌは二人に従つて工場へと急いだ。屹度、こんなに遅くなつては、ヴェルフランはもう先へ来て了つただらうと彼女は思ひながら歩いた。しかしどうしたことかその日に限つて、ヴェルフランは午後になつてから、甥の一人のカジミールを連れて遣つて来た。

カジミールは伯父と工場へ這入つて来るが早い、据附準備に急いでゐる職工や技師たちの作業振りを見てせうら笑つた。

『伯父さん！ こんなあなたの監督の仕方ちやあ、フアブリー君が歸つて来たつて埒があきませんよ。』
彼は嘲りを口の中に漲らせて云つた。

するとヴェルフランは頭ごなしに叱り附けた。

『何を莫迦な！ お前などに頼める位なら、何にも俺はこんなトロツコ押し娘を引き合ひには出さないのだ！ 莫迦！ お前などは口こそ達者でも仕事は半人前出来やしないぢやないか！ もつと口を慎しみなさい！』

カジミールは満座の中で叱られたのでムツとして、ペリーヌをぐつと睨め附けたが、流石にすぐぢつと耐へて笑ひながら云つた。

『あゝあ、私しもこんなうまいことに有り附けると知つたら、ドイツ語なんかやるより英語を習つときやよかつた！ 全く惜しいことをしましたよ！』

『ふん！ 習ひたかつたらいつでも習ふがいぢやないか！ 今から遣り出したつて遅くはないよ！』
ヴェルフランはもうそれ以上聞きたくない——といふやうな調子で云つた。

するとまた直ぐカジミールが口答へをするといふ工合で、二人は互ひに不愉快な言葉を連發した。

ペリーヌはもう動くことも出来なくなつて、出来る丈け小さくなつてゐたが、カジミールは彼女を睨め附けたまゝ目を離してはくれなかつた。

間もなくヴェルフランは甥の肩に縋つてそこを立ち去つた。

ペリーヌはやつと我れに返つた。何故ヴェルフランさんはあゝも甥に辛らく當るのだらう？ それにしても亦あの甥御さんは何んと云ふいやらしい人なんだらう？ お互ひに敬ひ愛し合つてゐたら、あんなことを云ひ合ふ筈がない！ どうしてあんななんだらう？ あの孤獨な盲目の伯父さんをもつ

とやさしくして上げたらいゝではないか！ またあのヴェルフランさんにしても大事な甥にもう少し親切にしてもいゝではないか！ 彼女は次から次へとそんなことを考へつゞけた。

そこへまたヴェルフランが支配人に扶けられて這入つて来た。そしてヴェルフランが椅子に腰を下ろすと支配人は小腰をかどめながら作業報告をはじめた。

間もなくブノアはペリーヌを呼んだ。

『オウルリー！ オウルリー！』

けれどもペリーヌは自分がオウルリーと云ふのも一寸忘れて、いろ／＼と考へに耽りながら黙つてゐた。

ブノアは溜り兼ねてまた叫んだ。

『オウルリー！ 何處へ行つたんだね？』

その三度目の聲にハツと我れに返つたペリーヌは、驚いて二人のところへ駆け附けた。

『お前はつんぼかね？ あんなに呼んでゐるのが聞えないのかね？』

ブノアは叱るやうな口調で云つた。

『いえ、さう云ふ譯ぢやないんですけれど……丁度機械の方の方とお話をしてゐたもんですから……』

その時、ヴェルフランは何か云ひ出さうとする支配人の言葉を遮切つた。

『いや、ブノア君！ 君はもう彼方へ行つてくれ給へ！』

支配人が出て行つて了ふと、ヴェルフランは一人残つたペリーヌを顧みて云つた。

『お前は文章が読めるかね？』

『はゞ』

『英語も？ フランス語も？』

『はい、両方とも読めますわ！』

『だが、英語を読みながら早速それをフランス語に譯せるかね？』

『はい、そんなにむづかしいものでなかつたら、出来ないことはないと思ひますの！』

『さうか……。實は……お前に読んで貰ひたいのは、毎日の新聞紙からの切り抜きだが……。どうだね？ 出来るかね？』

『さあ、今迄に遣つたことはございませんが、大丈夫遣れるだらうと思ひます！ 英語の新聞をあたしには譯す必要なんかありませんでしたから……』

『成る程……さうか！ ふむ、成る程！ では一つ譯して貰はう！ その前にちよつとあつちの技師のところへ行つて斷つて來るといふ用があつたら遠慮なく呼んでくれと云つて……ね。それ丈けのことを云つたら、直ぐこつちへ歸つて來て、これを一つ翻譯して貰ひたい！』

ペリーヌは早速現場の方へ行つて、伝ひ付け通りのことを云つて來ると、ヴェルフランから渡された新聞を取り上げた。それは印度のダンデーで發行した「ダンデー日報」であつた。

『お読みませうか？』

彼女は新聞を擴げながらさう訊ねた。

『商業欄を探しておくれ！』

ペリーヌは黒や白い欄をあつちこつちとまごついた。さあ、間違つたら……と思ふと手がぶるゝと震へて來た。彼女は上から下まで新聞を眺め廻した。が、なか／＼それとは解らなかつた。こんな間胡々々してゐたらヴェルフランがいら／＼しないかと心配になつて來た。

ところがヴェルフランは却つて緩つくりした方がいゝと云つた。目は見えなくても感のいゝ彼女は、ほと／＼に困つてゐる彼女の様子が手に取るやうに解るらしい！

彼女は新聞がパサパサ音を立てるのを聞いて云つた。

『ゆつくりしていゝんだよ！ それに……お前はまだ商業日誌なんか讀むのは初めてなんだらう？』

『はい！』

さうしづかにペリーヌは答へながら、また商業欄を探し初めた。が、暫くすると彼女は思はず「あゝ、こゝにありましたわ！」と叫んだ。

『解つたかね？』

『はい！ 多分これだらうと思ひますが……』

『では、かう云ふところだけを氣を付けて見てくれ！』と、そこまで云ふとヴェルフランは急に英語で、

『リンネル、麻、印度麻、麻袋、麻糸——とこれ丈けのところを……ね！』と云つた。

『まあ、あなたは英語を御存知ちやありませんか！』

あまりのことに驚いて、彼女は思はずさう叫んだ。

『いや！ なあに……ホンの商賣上の言葉を五つ六つ知つてゐるだけだよ。』
 ヴェルフランは苦笑しながら答へた。

ペリーヌは早速云はれたところを譯し初めたが、どうも馴れないことなので、だんだんに解つて来るやうだがなんとなく頼りなくて、ただ手や額が汗ばんで来るばかりであつた。

『いや、大變結構だよ！ うむ、よく解る……よく解るよ！ さあ、どんどんと先を讀んでおくれ！』と彼れは云つた。

そこで、彼女は職工の打ち下ろす槌の音などが響くと、一段と聲を高くしながら讀みつづけた。そして到頭欄の最後へ來て了つた。

『さあ……そこで……と！ オウルリー一寸待つておくれ。そこにカルカッタから何か報告がないかね？』とヴェルフランは云つた。

彼女は新聞をまた眺めた。

『はい、ございました！ 特派員から——としてございます。』

『うむ。それだ！ 讀んでおくれ！』

『ダツカからこれは受け取つた……と書いてありますが……。あのダツカから……』
 ペリーヌは何故かこの「ダツカ」と云ふ地名を讀むと聲が震へた

ヴェルフランはすぐそれを聞きとがめた。

『おや、どうかしたかね？ 何故お前は震へてゐるのだね？』と彼れは云つた。

『はい……いゝえ……何んでもございませぬの。間違つたら大變だとびくくして讀んでゐたものですから、それで……』と彼女は低い聲で云つた。

『いや、もうそんな心配はいらないと先刻から云つてゐるぢやないか！ なかくお前はうまくやつてくれるから……』と彼れは叱るやうな調子で云つた。

そこで、彼女はブラマプートラ沿岸地方の印度麻採取状況に就いての——ダツカから來た特電を讀み上げた。するとヴェルフランは、こんどはセントヘレナから何か報告があるか見てくれと云つた。早速また新聞の上へ目を走らせて見ると、すぐ「セントヘレナ」とあるのが見附かつた。

『あゝ、これもございましたわ！ えゝ……英國汽船「アルマ」といふのが廿三日にカルカッタから

ダンディーへ向けて出帆してゐます。それから……廿四日にはスエデン・ノールエーの汽船「グルン・ローヴェン」號が、ナラインガンデイからブローニエへ向けて出帆して居りますの！」

さう彼女が讀んで聞かされると、ヴェルフランは大變満足した様子であつた。

『いや、大變結構だつた！ どうもありがたう！』と彼は云つた。

彼女は何んとか返事をしやうかと思つたが、あまりのうれしさに喉が詰つて言葉が出なかつた。

『ベンデイツト君の病氣が快くなるまで、どうかわたしの手傳ひをよくしておくれ！』と彼は云つた。

ヴェルフランは作業報告を一應聞いてから、それ／＼簡単に指圖をしてふと、支配人の室へ一緒に行つてくれとペリーヌに云つた。

『お手をお引きしませうか？』

彼女はおづく／＼さう訊いた。

『うん、さうか！ では、手を貸して貰はうか！ そして道をよく氣を付けておくれ！ ほんやりしてゐちやいけないよ！』

『はい、御安心なさいませ。どうぞ安心してお歩き下さいまし。』

『うむ、さうか、さうか……』

さう云つて、ヴェルフランは右手を椅子に突いて立ち上ると、早速ペリーヌは左手をやさしく曳きながらしづかに歩き出した。

軈て、工場の間を過ぎて汽車の線路のところへさしかゝつた。彼女はこれは危いと思つた。

『おや、こゝに線路がございます。ほら……こゝですの！ どうぞ、お氣をお付け下さい！ どうぞ、どうぞ……』と彼女は云つた。

ところがヴェルフランは首を振つた。

『いや、そんなことは一々云はないでもいゝよ。工場の中にあるものなら、小さなガラス戸一つだつて知つてゐるのだよ。わたしの云ふのはそんなことぢやない！ 不意に危険なことでもあつたら、その時こそ私に云つてくれなければいけない！ いゝかね？ この地所内にあるものなら、私はお前に云はれなくとも皆んな知つてゐるのだ！ いゝかね？』と彼は云つた。

ヴェルフランは地所内の様子を知り抜いてゐるばかりでなく、凡そこの工場に使はれてゐる職工の

一人々々をよくおほえてゐた。やがて中庭へ二人が遣つて來ると、そこにゐた職工たちは一齊に挨拶をした。中には見えもしないヴェルフランの前へ走り出て帽子を脱ぐものもあつた。

『お早うございます！』

『ヴェルフランさん！ お早うございます。』

『お早うございます！ 旦那！』

『お早うございます！』

『お早うございます！』

彼等は彼方からも此方からも叫んだ。

それに對してヴェルフランは一人々々に返事をした。

『やあ、お早う。パスカル！』

『お早う！ ジャック！』

『お早う！ アンリー！』

『やあ！ クールベ！』

ヴェルフランは顔を見ることは出来なくとも、長年使つてゐる人の聲で區別を附けられた。それでもどうかすると一寸忘れたのがあると、彼はツと立ち止つて、

『あ！ お前はアンドレエだつたね？ 違ふかねえ？ え？ うむ、さうだらう！ うむ、やつぱりさうだつたな！』といふ風に一々聞き返してゐた。

うづかりしてゐて人違ひをしたりすると、笑ひながらやさしく云ひ直したりした。

こんな有様で、工場から事務所まで行くのは随分手間が取れた。

聽て、アーム・チエアにどつしりと腰を下すと、ヴェルフランは云つた。

『さあ、もう今日はこれでよろしい！ どうも御苦勞だつたね！ では、また明日來ておくれ！ いや、どうも御苦勞！』

ヴェルフランは彼女をいたはるやうな調子でやさしく云つた。

一七

恐ろしい質問

その翌日の朝、ヴェルフランはいつものやうに支配人の肩に縋りながら、昨日と同じ時間に工場へ這入つて来た。ペリーヌは一寸挨拶に行きたいとは思つたが、丁度その時はこんどの機械据置作業に使はれる職工達——たとへば大工、左官、鍛冶工、機械工などへ、英人の技師長からいろ／＼と訓示があるので、彼女はそれを一々解り易く職工たちに通譯して聞かせてゐたから、少しの間も手が放せなかつた。

彼女は熱心にみんなの質問や應答を双方に通譯した。

その時、ヴェルフランはこちらへ遣つて来た。コトリ、コトリ……と、彼れの握り太なステッキの音が響いて来ると、今までガヤ／＼と相談し合つてゐた一同のものは、一時に水を打つたやうに静ま

り返つたが、ヴェルフランは自分には介はないで打合せを續けてくれと、手をもつてそれを制した。そこで、ペリーヌは云はれるまゝにまた通譯を初めた。その熱心な仕事振りにちつと耳を澄ませてゐたヴェルフランはふと傍の支配人を顧りみて靜かに叫んだ。

『どうだね！ ブノア君！ あの娘は立派な技師になれるぢやないか！』

『全くです！ どうして仲々偉いものです。』

『うむ、仲々偉いものだ！ 實は……昨日わしはあの娘に「ダンデー日報」を譯させて見たんだが、あのベンデイト君より上手だつたのには驚いた！ それが……君！ 商業日報なんか讀んだこともない小娘なんだからおどろくぢやないか！ うむ、仲々偉いものだ！』

『ところで……旦那！ あの子の両親はどんな身分のものだか誰れか知つてゐさうなもんですな！』

『さあ、タルウエルなら知つてるだらうが、わしはちつとも知らん！』

『さうでございますか！ 何んでもあの子は餘程貧乏で……随分困つてゐるやうですな……』

『おい／＼！ ブノア君！ 何を云つてゐるのだ。一日二圓もあの娘に遣つてゐるぢやないか！ それでも給料が足りないとしても云ふのかね？』

「どう致しまして……。いゝえ、私の云ふのはあの子の見すばらしい着物のことです。全く非道い着物です！ 凡そ襪襦つたつてあんなほろがあるもんですか！ つゞれの錦以上ですよ。乞食なら兎に角、とても普通の人間の着てゐるものぢやありません。それに……。靴だつて、着物だつて、無細工なお手製といふ代物です！ 全く非道い着物ですよ！」

「ちや、容貌は何うだね？」

「いや、その方なら上等飛切りです！ 實に惻好さうな美しい子です！」

「ふうむ、ぢや、どこかに下品なところでもないかね？」

「いゝや、大違ひです！ どうして下品なところがある所か、どこから見ても素直な正直さうな子です！ 目と云つたら……。殊に……。さうですな！ 何んと云つたらいゝか？……。さう！。あの惻好な目と云つたら……。さあ……。眼紙背に透る……。つて云ふ工合でせうな！ 兎に角バツチリとしたいゝ目です！ それでゐて決して鋭いばかりぢやない！ どこかに女らしいやはらかな優しさを持つてゐる目です！」

「さうか！ だが、一體あの子は何處から來たのかね？」

「さあ、このフランスのものぢやありませんね。それだけは確かです！」

「もつともあの子の云ふには、何んでも母親が英國人だとかいふが……」

「いゝや、しかし……。英國人ばかりぢやないやうです！ どこかまだ外の國の血が混つてゐます。けれども實際美しい子ですよ。あんな非道い襪襦を着てゐてさへあんなに綺麗なんですから。あれで相當の着物でも着せたらどんなに氣高い子になるでせう！ しかし……。あんな着物で平氣でゐるところを見ると、餘程しつかりした心の娘さんですね。」

「さう云つて、ブノアは思ふ存分ペリーヌのことを褒め立てた上に、ヴェルフランに嬉しがらせを云ふことも忘れなかつた。」

「もつとも何事にもカンのいゝ旦那のことですから、私しから今更ら申し上げなくとも、こんなことは先刻御承知でせうがね。」

「うむ、大分褒めるな！ ブノア君！」

「いや、實際です！ 正直正銘のところを申上げるのです！」

「うむ、さうか！ よし、よし、よし、兎に角あの子の言葉は大變洗練されてゐると思ふよ！」

ヴユルフランと支配人とはそんなことを叫び合つてゐた。

ペリーヌはまるで聞えなかつたが、どうかするとそれでも一言二言耳に這入つて來るので、その度に胸の中がわく／＼した。けれどもそんなことに氣を取られてゐては、目の前で話し掛ける技師や職工たちの通譯の方がお留守になつて了ふ！ どうかして落ち着かなければいけない！ もし通譯のしぐじりでも聞かれたら、ヴユルフランはどんなに仕事に不熱心な女と思ふだらう！ 彼女はさう考へて、たゞ波立ち騒ぐ胸をデツと制へた。

しかし、ペリーヌの通譯は双方とも満足し切つてゐた。それは何よりも熱心と誠實であつたからに違ひない！

その仕事を済ませると、ヴユルフランはすぐ彼女を呼んだ。

『オウルリー……』

ペリーヌはこんどこそは一聲でヴユルフランの傍へ駆け附けた。

また昨日のやうにヴユルフランの傍へ腰を下ろすと、こんどは「ダンデーー商事新報協會々報」といふ——印度麻商策上の政府公報を翻譯させられた。彼女はこれなら別に特別欄を探する必要がない

ので、昨日よりは易々と全部済ませて了つた。それから、それが済んだので、いつものやうに工場内を見廻はるのかと——彼女がヴユルフランに云ふと、それには何んの返事もしないで、ヴユルフランはペリーヌ自身のことを意外にも聞き初めた。

『お前はいつかお母さんに死に別れたと云つたが、それは何時のことだね？』

『五週間前のことでございます！』

『巴里で……かね？』

『え、パリですの！』

『で、お父さんの方は……？』

『お母さんよりも六ヶ月前に死にましたの。』

彼女は低い聲でさう云つた。

その時、ヴユルフランの握つてゐた彼女の手がぶる／＼と震へた。屹度、亡き二た親のなつかしい思ひ出に彼女はまた悲しさを新にしたにちがひない！ さうヴユルフランは思ひ遣つたが、彼れはどうしてもその質問を思ひ切ることは出来なかつた。

ヴェルフランはしづかに言葉を續けた。

『で、お前の親達の商賣は何んだね？』

『いろ／＼な道具を賣つて居りましたの。』

『ほお！ 巴里で……かね？ それとも巴里の邊でかね？』

『いゝえ、何處でといふ定まつたところはございません！ 昨日は東、今日は西へと……幌馬車に乗つてさすらひ歩いて居りましたの！』

『ふむ！ で、お母さんが亡くなられてすぐお前は巴里を立つたのかね？』

『さうですの！』

『それはまた何故だね？』

『それは……お母さんの遺言でしたからですの。そして、その時、お父さんの親類のゐる北の方へ行

けと云はれましたの！』

『では、また何故お前はこの土地へ來たのかね？』

『それにはいろ／＼な事情がございますの。お母さんがいよく病氣が重くなつて來たので、私は

どうかしていゝお医者さまにも見ていたゞき、いゝ薬も飲ませて上げたいと思ひましたの。けれども情けないことには、それまでに有つた僅かなお金はいつの間にか使つて了つて、もうその時にはまだ一錢もございませんでした。どん／＼お母さんの病氣は悪くなるばかり……。もう一刻も猶豫してゐる場合ではないと私は思ひました。それで……別段お金の出る途とはありませんので、いよいよ永年住み馴れた幌馬車も、驢馬も、その外の細かい道具なども、一切賣り拂つて藥代にすることにいたしました。それをお母さんに打ち開けたとき、おゝ！ お母さんはどんなにお歎きになつたでせう！ それから間もなく驢馬は馬市で、馬車は人手にそれ／＼僅かな金で賣つて了ひましたの。その代りにお医者さまにも見ていたゞけましたし、お薬や卵や葡萄酒なども、お母さんに買つて上げることが出来ましたわ！ まあ、その時の私しのしんから嬉しかつたこと！ それからは……たゞお母さんの御病氣が一日も早く癒るやうにと、一心になつて神様にお祈りいたしました！ けれども……ああ！ お母さんは悪くなる一方でした。さうして或る日のこと、無理に巴里を立つと云つてベットから起き上つた日、到頭バツタリと倒れたまゝ、間もなく死んで了ひました……あゝ、死んで了ひましたの……。お葬式はまはりにゐた親切な人たちの手で行はれました。けれどももうその時には無一文

になつて了ひました！ パリをいよ／＼立つ時ポケットにある金は、僅かに二圓十五錢でしたの。けど、どうすることも出来ません。そのまゝ親切にしてくれた人たちと、お母さんのお墓とに別れを告げて、遺言通りにすぐパリを（先刻も申し上げた通りに）出立して了ひました。けれどもその僅かなお金では、とても汽車には乗れませんから、どんなことをしても歩いて行かうと決心いたしましたの。それから……」

彼女がもの悲しさうに——まだ生々しい傷痕あざやかな思ひ出を、次から次へと物語つて行くのをヴェルフランはデツと耳を傾けてゐたが、やがて思はず彼女の手を握り締めた。彼女はハツと思つて言葉を途切らせたが、ヴェルフランがどうしてそんなことをするのか解らなかつた。ひよつとすると……こんなじめ／＼した話がもう澤山になつたのぢやないか？ 彼女は急に心が震へた。

「まあ、御免下さいませ！ こんな煩いことを申し上げまして……」

「いゝや、そんなことはない！ 却つて……お前が包み隠さず話してくれるのがうれしいのだ。私しはお前のやうに——何事にも容易には屈しない丈けの、勇氣と強い意志とを持つた人間が大好きなのだ！ お前などはまだほんの子供なのに、さういふ美しい心を持つてゐたと思ふと、私しはもう嬉し

くて溜らないのだ！ さあ、その先を話しておくれ！ 先刻の二圓某の金を持つてパリを出立したところから……」とヴェルフランは言葉をつづけた。

「それから……ナイフと……シヤボンと……指ぬきと……針二本と……糸と地圖と……それ丈けが小さな風呂敷包に這入つて居りましたの！」

「ほお！ 地圖がよく解つたね？」

「えゝ、それは今迄に旅行ばかりしてゐるので、もともと知つてゐましたの。見馴れてゐますから……。そして、これが親類のところを探す唯一の頼りですよ！」

その時、突然、ヴェルフランは

「いや、一寸待つて呉れ！ この外庭の左側に大木があるだらう？」と云つた。

「えゝ、腰かけるところもありますわ！」

「では、あそこへ行かう！ あつちの方が話しいゝからね？」

二人はその木蔭へ行つて座ると、またペリーヌはその先を物語り初めた。彼女は心の中では——どうせこんな身の上話を冗々と聞かせては退屈だらうから、どこかで筋を切りつめて手短かに話して了は

うとは思つてゐたが、ヴェルフランの方で熱心になつて聞くものだから、ついつい話を飛ばす折がなくなつて了つた。

やがて、彼女の話が森の中の嵐の恐ろしい一夜——のところまで来ると、ヴェルフランは言葉を不意に挟んだ。

「乞食になつたら……と考へたことがあるかね？」

「いゝえ、一度だつて、そんなさもない氣持を起したことはございませんでした！」

「だが、仕事一つなくて、お前はあの時何をたのみにしてゐたのだ？」

「私は何んにもたのみにしていませんでした。たゞ……この力のある限りは、どんな苦しさにも耐へて行けば、きつと最後には望みを果す時が来ると信じて居りました。たゞそれ丈けのことでございます！ けれども……道傍でお腹が減つて倒れて了つた時ばかりは、全く精も根も疲れ果て、ただ何事も諦めて了ひました。もう一時間も愚圖々々してゐたら、私は本當に死んで居ましたわ！」
それから……彼女は驢馬に顔を舐められて我れに返つたこと、紙屑買ひラ・ルケリーに助けられたことから、そのラ・ルケリーと数日の間屑皮を買つて歩いたこと、それからマロクールへ来る途中でロ

ザリーと一緒になつて友達になつたことなどを、それからそれへとまるで面白い繪巻物でも繰りひろげるやうにして物語つた。

「そして……その時ロザリーさんが云ふのは、誰れでもこの工場へ行けば使つて下さるつて教へてくれましたの！ それでかうやつて此處で働くやうになりましたの！」と彼女は云つた。

「成る程！ よく事情が解つた！ で、お前は何時親類のところへ行くね？」

さうヴェルフランから云はれると、流石のペリーヌもグツと返事に窮した。眞逆こんなことまでは聞くまいと思つてゐたのに！

「さあ、當分……のところは行く氣がございません！」

彼女はどぎまぎしながらやつと答へた。

「……と云ふのも、實は……先方の親類はお父さんのことで大變怒つてゐますから、頼つて行つたところで置いてくれるかどうかさへ解りませんの……。どうせこんな寄る邊ない私しですから、どうかしてそこへ……いゝえその親類のある近くへでも、せめて行きたいとは思つて居りますけれど、それから先のことを考へると、何んだか頼りない氣がして溜りません！ それよりもかうして仕事をさ

せていつまでもここに置いて置く方が、どれだけ幸福か解りませんの。もしこゝを振り切つて行つて見ても、案の定追ひ出されでもしたら、それこそ私はどうなることでせう？ おゝ、恐ろしいことですわ！ それよりもこの工場で使つて戴いてゐる方が心丈夫ですもの！ いつかのやうにまた頼りない旅をつゞけて行くのかと思へば、もう思つた丈けでもぞつといたしますわ。ですから……いよいよこれなら大丈夫と解らないうちは、決して私しがこゝにゐることも知らせたくございませんの！」

『さうか……。だが、親類の方からお前を探してゐるのぢやないかね？』

『いゝえ、そんなことはございせんわ！』
 『ふうむ、さうか！ ぢや、それもいゝな。だが、會ふのが嫌やなら手紙でなりと知らせてやつたらどうだね？ そして、その上で——先方が承知をしないなら、こゝで改めていつまでも暮して行くことにしたらいゝではないか！ また……若しみんながお前の行くのを待つてゐると知れたら、何もお前はこんなところに居る必要はないではないか！ その若い身空で……お前は一倍の苦しみを嘗めて來たのだ！ 私はもつこれ以上の悲しいことのないやうに祈らう！ 早くお前は親類の人たちの暖い心に慰められるがいゝ！』

『まあ、そんなにやさしく仰有られると泪がこぼれますわ！ それは私も悲しいとは思つて居ります。……本當に毎日私は泣いて居りますの！ もし親類さへ喜んでくれるなら、それこそ私は今にも駆け附けて行きたいんですの。ですけれど……やつぱり私にも辛く當るでせう……』

『そんな事はない筈だ！ それとも……何かね？ 親類をそんなに怒らせることでもお父さんがしたのかね？』

『いゝえ、そんなことはないと思ひますの？ 第一あんなに親切ないゝ人が、どうしてそんな他人から憎まれることをするでせう？ そんな筈はありません！ それは屹度意見の衝突だらうと思ひますわ！ それでなければ……』

『さうだらう！ さうだらう！ そんなことに違ひない！ だが、いかにお前のお父さんが憎いからと云つて、何んにも知らないお前までを憎むといふ法はない！ お父さんの過失はお父さんの過失で決してお前と關係の有るものではない！』

『まあ、それが本當なら、私はほんとにうれしうございますわ。』

彼女は胸をわく／＼させながら云つた。その言葉が震へてゐたので、ヴェルフランはこの娘の感動

があんまり大きいのおどろいた。

『お前はさぞ親類のところへ行きたいだらうなあ!』と彼れは云つた。

『は、一刻も早く行きたうございます! けれども……出て行くと云はれたら……あゝ! どうしたらいいでせう?』と彼女は答へた。

『いゝや、そんなことがあるものか! で、何かね……? お前の祖父さんお祖母さんところには、外に伯父さんか伯母さんでもゐるのかね?』

『いゝえ、一人もございません! 親類と云つても先方はお祖父さんが一人ゐる丈けなんですの!』
『何んだ! そんならお前は立派な後継の孫ではないか! その大事な孫を何んでお祖父さんが憎むものか? 莫迦な! お前は孤獨のさびしさが解らないのだ。』

『でも……私も長い間たつた一人ぼつちでございましたから、孤獨のさびしさも知つてゐる積りですわ。』

『うむ、それもさうか! だが、若いものは元氣もあるが、……しかし……一日々々と老いさらばえて行く老人にとつては、決して孤獨はとても堪へられるものではない!』

彼女はヴェルフランの顔をデツと見詰めた切りでゐた。まあ、これは何んといふ言葉だらう? 彼女はヴェルフランの言葉から、その悲痛の表情の中から、その胸を掻きむしり去つたものを探し出さうとした。

ヴェルフランは暫らくの間黙つてゐたが、聽て言葉をつとけた。

『それぢやあお前は……これから先どうしやうといふのだね?』

『さあ、何んですわ……追ひ出さないと解るまでは、とても決心が附けられませんの。それより外に途がございませんもの!』

『あゝ、お前は世間を知らないのだ。年寄りになると……いゝや年寄りといふものは……殊に孤獨では居られないのだ。』

『まあ、お年寄りはみんなさうお考へになるでせうか?』

『さあ、さう考へない人間もあるか知れない! けれども……まづ當り前の人間であつたらさう考へるだらう。』

『ぢや、あなたはそんな風にお考へになりました……?』

心持震へながら、彼女はヴェルフランの顔をデツと見詰めて云つた。

ヴェルフランは直ぐには答へなかつた。

聴て、彼はひとり言のやうにして静かに呟いた。

『さう……さうだ……さう感じるものだ……』

間もなく——彼は突然起ち上ると、込み上げるさびしさを打ち消すやうに、いかにもわざとらしい重々しい口調で彼女に云つた。

『オウルリー！ 事務所へ伴れて行つておくれ！ 私しはあそこへ行きたくなつた！』

第二の機會

技師のフアブリーは何時歸つて来るのだらうか？ 彼女にはこれが何より心配の種であつた。フアブリーの歸つて来る日——それは彼女の通譯の仕事が止めさせる時である。

また例の新聞の商業欄の翻譯仕事は、ベンディットの病氣が全快する時まで続けさせて貰へるのだらうか？ 彼女にはこれがまた一つの心配の種であつた。

それは火曜日のことであつた。いつものやうに彼女は英人技師二人と一緒に工場へ來て見ると、意外にもフアブリーがいつの間にか旅先から歸つて來てゐて、丁度その時は工場で準備作業の出來上りを視察してゐた。

さうなるとペリーヌはうつかり出過ぎたことは出來ないので、片隅の腰掛けにしづかに腰を下して

呼ばれるのを待つてゐたが、英人の技師長がすぐ彼女をさし招いてフアブリーに紹介した。

「……實際……この娘さんが傍にひてくれなかつたら、私たちは全くあなたがお歸りになるまで、たゞのんびんだらりとしてゐる外はありませんでしたよ、仕事がこれだけ捗取つたのも全くこの娘さんのお蔭です……。」

フアブリーは彼女をデロリと眺めたが何んとも云はなかつた。彼女の方でも亦今後の身の振り方を訊きたいとつい思ひながら云ひそびれて了つた。

「さあ、それではこの工場にこのまゝ居ていゝのかしら……？ またはマロクールへ歸らねばならぬのか……？ けれども自分をわざと下さつたのはヴェルフランさんだから、こゝに居るのも歸へるのも——それはヴェルフランさんの口一つにあるのだと考へながら、ペリーヌはたゞモジモジしながら立つてゐた。

聴ていつもの時間になると、ヴェルフランは支配人ブノアの肩に縋りながら遣つて來た。いつものやうに彼れは椅子に腰を下ろすと、フアブリーにこんなことを注意したとか、こんどの機械据附作業はこんな風にしたらいゝとかなどと、簡単な意見をブノアに話して聞かせてゐたが、どうしたもの

か不思議に今日はつまらなさうな顔をしてゐた。

「あの娘が居ないのは困つたな。兎に角……」と彼れは云つた。

「いゝえ、旦那！ オウルリーはこゝにゐます。」

支配人はさう云つて、こつちへ來いとペリーヌに合圖をした。

「あゝ、お前はまだマロクールへ歸らなかつたのだな？」と彼れは訊ねた。

「えゝ、さうも思つて見ましたが、あなたからお許しの出るまでは歸るまいと思つたもんですから……」と彼女は答へた。

「うむ、さうか！ よし、よし！ いつでもさうして私より先に來て待つてゐなければいけない……」

……ところで……と……こんどはマロクールの方で少し手傳つて貰ひたいことがあるから、お前は今日こゝの時間が退けたら先に歸つてゐてくれ！ そして明日の朝からはマロクールの事務所の方へ出て來ておくれ！ 解つたかね？ オウルリー！ 萬事はその時に云ひ渡すから……」とヴェルフランは云つた。

それからその日はいつものやうに英人技師たちの通譯を濟ませて、やがて工場の退ける時間になつ

て了つたが、その日に限つて新聞を讀ませられないのが不思議であつた。ペリーヌはこゝへ来る時には馬車で通つた路を、今日はあるいて歸つて行く……途々、ヴェルフランの先刻云つた言葉をくり返した。

それにしても……ヴェルフランさんはどんな仕事をさせて下さるのだらう……？ 彼女はいろ／＼と考へて見たけれど見當が附かなかつた。しかしもうトロツコ押しをやらされないのは解るやうな氣がした。ヴェルフランのあの時の様子や言葉から察しても、きつといゝ話にちがひないから、何も彼女はイライラ心配してゐる必要がなかつた。この分でペリーヌが焦らず狼狽せず一歩々々と亡き母の遺言をよく守つて行きさへすれば、やがて幸福な生涯に這入れるだらう。ペリーヌよ！ 母の遺言を忘れてはいけない！ 何事にも決斷強くなければならない！ 決して苦しさで遭つても負けてはならない！ 誰れも頼つてはいけない！ 天は自ら助けるものを助く！ たゞ一人で進め！

聽て、マロクール村に行き着いたが、まだ時間が早いので彼女はそこを久し振りで散歩してゐる。道端の垣に咲いた花を摘み、牧場の中に笑つてゐる美しい花を折り、彼方の木蔭へ行き、こちの道傍にイヌミ、彼女は心ゆくまでにそゞろあるいた。どうせ急いだところで、小屋へは夕方ま

でに歸ればいゝのだから……。それにしても……これからもまだ苦しい目に遭ふに違ひないが、決してそれに負けてはならない——これが彼女の守らねばならない決心である。どんな苦しい目に遭つても負けるものか！ 彼女はさう呟いて固く唇を噛みしめた。あゝ、ペリーヌよ！ さうなくてはならない！ どんな苦しさ、悲しさにも打ち克たなければならぬ！ おゝ、どんな悲しさにも打ち克つて見せる！ さう固く決心しながら歩いて行くペリーヌの顔には、動かし難い力と意志とが輝いてゐた。彼女の手は美しい野の花で一杯であつた。

久し振りでペリーヌは小島へ遣つて來て見ると、幸ひにもいつかのまゝになつてゐた。多分まだ誰れもこゝへは遣つて來ないらしい。小屋の入口の柳にからんだグース・ベリーが、すつかり見ない中に眞赤に熱して、小鳥が愉快な喉をふるはせながらそれをついばむでゐた。まあ、有難い！ 晩御飯の御馳走が澤山あるわ！

まだいつもより時間が早いので、晩御飯を食べて了つてからも、彼女はそのまま寝て了ふのが惜しい氣がした。そこで小屋を出ると、ペリーヌは暮れかゝる靜かな池のほとりにゐんだ。

考へて見れば、ペリーヌがこの小屋を留守にしたのはホンの僅かな間ではあつたが、今かうして再

び歸つて来て気が附いたのは、おどろくほど四邊が騒々しくなつて来たことである。前なら畑にも、池にも草叢にも、たゞ静けさを破るものは、夕べの家路へ忙ぐ小鳥の群のざわめきばかりであつたが今ではもうその静けさはどこにもない。どこからともなく車の軋る音や人聲が聞えて来る……。四方の畑は見渡す限り穀物が豊かにみのつてゐる。まもなく農夫が刈り入れを初めるだらう。もうどちらにしてもこの小屋を、こゝ數日の中に立ち退かなければならない。——屹度農夫がこゝへ遣つて来るか、鳥差しが来るかするから、もう愚圖々々してはゐられない！ いや／＼この小屋とも別れねばならない日が近づいた！

その夜はまた久し振りで懐しい草の床にベリーヌは寝た。この數週間サン・ピポアの宿屋で立派な夜具にくるまつて眠つたことを思ふと、なんだか今では夢のやうな気がしてならない。

彼女が目を醒したのは翌朝の日の出時刻であつた。

工場の門を這入ると、その日はもう仲間と一緒にトロッコのところへは行かずに、彼女は一人みんなの間を擦り抜けるやうにして、急いで事務所へ行つた。しかし入口のところまで来ると、さて這入らうか、這入るまいかと、おづ／＼とためらつてゐた。

この玄關先で待つてゐたら、誰れかゞ気が附いて呼び入れて呉れるだらうと思ひながら、彼女はその壁に寄りかゝりながら心待ちにしてゐた。

さうして彼女は一時間は待つてゐたらうと思はれる頃、不意に入口の戸が開いてタルウエルが首を出した。

「おい、そこで何をしてゐるんだ！ 莫迦！ 早く工場の方へ行かないか！ 何時お前はこつちへ歸つて来た？ 昨日か？ 一昨日か？ おい！ 何を愚圖々々してゐるんだ！」

「あの……ヴユルフランさんが今朝はこつちの事務所へ来てくれと仰有つたものですから……」

「ぢやあ、さつさと事務所へ這入つて来たらいゝぢやないか！ いつまでもいつまでもそんな青天井の下にゐて……。それともそこが事務所だつて云ふのかい？ 莫迦！」

「でも……私し呼んで下さるのを待つてゐましたの。」

「ぢや、早く這入つたらいゝぢやないか！」

彼女はタルウエルの跡からおづ／＼と部屋へ這入つた。

「おい！ どうした？ 何時歸つて来た？ なに……？ 昨日の夕方？ うむ、さうか！ で、サン・

「ピポアの方ではどなたの仕事をしたんだな？」

タルウエルはやがて自分の椅子に腰を下ろすと、ペリーヌの方をかへりみながら横柄な口調で訊ねた。

「彼女は一仔始終のことを物語つた。」

「ふうむ、ぢや、つまりフアブリー君に邪魔されたつて譯なんだね？」

「あら、そんなことございませんわ！」

「なに！ そんなことはない……？ へ、へ、へ……。お前はどうかしてゐるよ。お前はそいつを知らないでゐるのか？ 馬鹿だな！」

「さあ……でも……」

「何がさあ……でも……だよ！ おい！ しつかりしないか！ そんなことは解り切つた話ぢやないか！ しかし……はあ……！ それともなにかい！ お前は俺れに隠す積りでそんなトボケを云つてゐるんだな！ おい！ もしそんな不了簡なことをすると承知しないぞ！ 俺れを誰れだと思ふんだ！ おい、一番この俺れを誰れだと思ふんだよ！」

「はい、支配人さんだと思つてゐます……」

「よし、知つてゐればそれでいゝ！ そのことを忘れるな！ いゝか！ 支配人と云つたら荷くもこの工場を任せられた役目にある人なんだぞ！ 早く云へばお前たちの主人も同様なのだ。だから、俺れに何事も包み隠しをしてはいけないぞ！ ヴェルフランさんも俺れも同じことなのだ！ いゝか！ 俺れは何んでも知つて置きたいのだ！ いやだと云ふものがあれば、すぐにも俺れは追ひ出してしまふぞ！ いゝか、その場限り放り出してしまふのだぞ！ 覚えて置け！」

成る程このタルウエルは噂される丈けのことはある。あのフランソア小母さんの臭い部屋に寝てゐたとき、周囲の女工たちがこの男のことを頻りに悪く云つてゐたが、まだあの時にはペリーヌは工場へ這入つて初めての目で様子が解らないから、大してそんな話は氣に留めてなかつた。けれども今こそ彼女は成る程とうなづけた。この空威張りの瘦せつほちな暴君は、このマロクール工場ばかりでなく、サン・ピポア、ラクール、フレキセル——凡そヴェルフランの持つてゐる工場の全部を、自分の野心通りに行はうと云ふ恐ろしい男であつた。彼れの野望を満すためには、ヴェルフランの言葉さへ聞き入れなかつた。

『おい！ ファブリーは何をしてゐた？』
彼女は急に聲を落として彼女に訊いた。

『まあ！ だつて、知らないものはお話し出来ませんわ！ 私しの知つてゐることゝ云つたら、ヴェルフランさんの仰有ることをイギリスの技師に通譯して上げたこと丈けですわ。』

そこで、彼女は仕方なく通譯した一仔始終を漏れなく話した。

『それでお終ひなのか？』

『えゝ、それ丈けのことでしたわ。』

『だが、何か外に……たとへばヴェルフランさんはお前に手紙を翻譯させなかつたかね？』

『いゝえ、そんなことは一度もありませんでしたわ。たゞ私は「ダンデー日報」と「ダンデー商事新報協會々報」といふのと二つ切りしか譯しませんでしたわ。それもペラ／＼の紙きれでしたの！』

『それは本當のことなんだな！ 嘘を云ふと承知しないぞ！ いゝか、嘘を云ふと承知しないぞ！ もし本當のことが云へないのなら……すぐに出て行け！ さあ、すぐに出て行け！』

『まあ、嘘なんか云ひませんわ！』

『よし、それならいゝ！ しかし……よく覚えて置け！ いゝか！ それ丈けのことは忘れるなよ！』
『はい 畏りました！』

『よし、よし！ ぢや、あつちの腰掛で待つてゐろ！ ヴェルフランさんが本當にさう仰有つたのなら、そのうちにお前を呼びに来るだらう！ 今はお客と話中だから……。』

彼女がそこへ腰を下ろして一時間ばかりも待つてゐた。タルウエルはその間ちつとも傍を離れなかつた。まあ、何んと云ふ恐ろしい人だらう！ 彼女はタルウエルが恐ろしくてならなかつた。けれどもそんな弱見を見せてはならない。タルウエルは彼女からヴェルフランの心をさぐらせ、譯した手紙の文句を訊かうと思つてゐるのだ。

けれども、いくらそんな脅しを云はれたつて介はないと彼女は思つた。タルウエルの考へでは、ベインデイトが病氣で傍にゐないから、きつとペリーヌを代理にいろ／＼な手紙をヴェルフランは譯させたに違ひないと思つてゐるのだ。

彼女が腰掛けて待ちあぐんでゐる向ふの廊下を、駈者ウキリアムが幾度も往つたり來たりしてゐる。

馱者以外の時にはかうしてヴェルフランの用をこまぐとす——まめくしい男である。あんまり何度も何度もペリーヌの目の前を往たり來たりするので、彼女はいよくヴェルフランが自分を呼ぶために來るのかと思つたが、また一言も云はずに忙しさに通り過ぎて行く。

暫らくすると、到頭四五人の男たちが事務室から不機嫌な顔をしてドカムと出て來た。それからウキリアムがこんどこそ彼女の方へ出て來て、どうかここの部屋へと合圖をした。そこでペリーヌは慎ましやかに部屋の入口のところまで行くと、ヴェルフランは臺帳で一杯になつた大テエブルの前に腰かけてゐた。その臺帳の一つ一つに字を大きく刻んだ文鎮が乘せてある。目の見えないヴェルフランはかうして臺帳を見別けるのであつた。

ウキリアムは何んの挨拶もなくペリーヌを部屋の中へ押し遣ると、直ぐパツタリと戸を締めて行つて了つた。彼女は一寸の間黙つて椅子に腰を下ろしてゐたが、ヴェルフランは目が見えないのだから聲をかけて上げやうと思つた

「あの……オウルリーでございますけれど……」

彼女は低い聲でおづくくと云つた。

「あゝ、オウルリーかね！ 足音で先刻から知つてゐたよ。さあ、もつと私しの脇へ來てくれ！ 私して私しの云ふことを聞いておくれ！ 私しはお前が忘れられないのだ！ 私しはお前のやうな子が好きなのだ！ お前が勇氣のある子だといふことはお前の話でよく解つてゐた！ ところが……こんどはまた翻譯や通譯をしてくれたので、お前がどの位の惻かな子かと云ふことも解つた。さあ……ここで私しからお前に頼みがあるのだ！ それは……お前も知つての通り、私しはこの通りの盲目なのだから、萬事身のまはりの面倒を見て貰ふ人間がなくてはならない。で、今迄私しはウキリアムに遣つて貰はうと思つてゐたが、困つたことにあの男は酒飲みだからとても信用する譯に行かない。……で、どうだらうそれを一つお前に頼みたいのだが、承知しては呉れまいか！ 私しの頼みといふのはつまりこれなのだ！ お前さへ承知してくれれば、私しは早速月給を三十六圓出さう。どうだらう？ 承知して貰へないものかな？」

ペリーヌはあまりの嬉しさに口が利けなかつた。何時までも、何時までも……

『おや、オウルリー！ 何故お前は黙つてゐるのだ？』

ヴェルフランは溜り兼ねたやうにさう云つた。

「私し……あの……お禮の申しやうもございませんわ！ 本當に……まあ……」
さう云ふ言葉は震へてゐた。

「あゝ、さうか、さうか！ それは何よりだ！ 私しも非常にうれしい！ では、どう……これからは一層私しの面倒をよく見ておくれ！ ……さう、さう！ それはさうと、いつかの親類のところへ手紙を出したかね？」

「い、え、實は……實は……紙が丁度なかつたものですから……」
ペリーヌはどぎまぎしながらさう答へた。

「あゝ、さうか！ よし、よし！ 紙ならペンデイト君の部屋にあるからお使ひ！ そのうちにお前がこゝで立派に勤めてゐることを、親類のところへしつかりと書いてやるがいゝ。先方がお前を家へ置きたいと思へば呼びに来るに違ひない。もし又迎ひに来なかつたら……何あにお前はいつまでもこゝにゐてくれ、ばいゝのだ！」

「まあ、私し……屹度……屹度……いつまでもこゝに置いて戴きますわ！」

「うむ、何んだか私しもそんな気がする。またその方がお前のためにもいゝだらう。それから……お

前はいよく事務所で働いて貰ふことになるのだから、みんなにも紹介せなければならんし、私と一緒に外出したり、また私しに代つて工場のものへ命令も傳へて呉れねばならん場合もあるのだから、もうそんな工場の仕事着などを着てゐてはいけない！ プノア君の話では随分非道い着物ださうぢやないか！」

「えゝ、全くぼろゝになつて了ひましたの。けど、私しそんなことは何んでもありませんわ……」

「ふむ、そりやあ解つとる！ 解つとる！ だが、兎に角そんな着物は脱いで貰はう！ さあ、それではこれから向ふの會計室へ行つて、その譯を話して傳票を一枚書いてお貰ひ！ そしてそれを會計から渡されたら、それを持つてラアシエエ雜貨店へ行つて、着物とリンネルと帽子と靴と……まあ、さう云つたものを一通り買つて來たらいゝだらう。それで……」

聞いてゐる中にペリーヌは夢心地になつて了つた。目の前でやさしくいたはつてくれるヴェルフランの——蔭翳な盲目のみじめな姿はいつの間にか消えて、まるで美しい仙女が魔法の杖を打ち振つてゐるやうな気がしてならなかつた。

暫らくの間といふものはたゞ呆然とペリーヌは立ち盡した。

聴て、ヴェルフランの言葉で再び我れに返つた。

「どんなものでも……お前の好きなものを撰つておいで！だが、買物の仕方て人間の本當さが解るものだよ！いゝかね……？さあ、それ丈けのことが解つたら、直ぐにこれから行つてお出で！今日
はもうこれでよろしい！」

さう云つて、ヴェルフランは見えない目でデツとペリーヌを眺めた。

疑ひが晴れて

彼女は會計室へ行つて、ヴェルフランの伝ひ附け通りのことを云ふと、會計係長はじめ部屋中の書記たちが、ペリーヌの頭から足の爪先までを、デロ／＼眺めながら、聴て一枚の傳票を書いてくれた。けれどもラアシエ雑貨店といふのはどんな家だらう？工場の門を出ながら彼女は心配して歩いた。

その店がいつか更紗を買つたことのある店だつたら都合がいゝと彼女は思つた。それは初めて行く店よりも、一度でも行つたことのある店の方が買物がしやすいからだつた。しかし……それにしても……澤山の商品の中から、一體どれを撰んだらいいのか？どんな風なものを買つて行つたらいいだらう？自分でばかりいゝと思つても、買つて行つて見てからヴェルフランに氣に入らないかも知れ

疑ひが晴れて

「ない！「買物の仕方」で人間の本當さが解るものだ。」と最後に云つたヴェルフランの言葉——それを思ふと益々心配になつて来た。一體どんな風なものを買つたらいいのだらう？

勿論、贅澤なものを買つてはいけないのは解り切つたことだが、一體どんな風なものを買つて行つたら、ヴェルフランの考へと同じものになるか——それが溜らなく心配であつた。思ひ出せば——まだ彼女がほんの五つか六つの頃は、随分美しい着物も着たし、上等な品物などを持ちたがったが、今はもうそんな場合でもなく、またそんなものを買つてならないことは勿論のこと、一番人目に立たない丈夫なものを買ふのがいい。

しかし、まあ、この廣い世の中に——人から新調の洋服を贈られるといふのに、こんなにもおどおどと心配するものがあるだらうか？ 彼女の胸は嬉しさと心配とが一緒になつて渦を捲いた。

ラアシエエ雑貨店はマロクール隨一の大店で、街の教會の近所にあつた。シヨウ・ウギンドオの中には赤、青、黄、緑さまざまのリボンや、純白な下着類、美しい型の帽子、きらきら輝く星のやうなダイヤモンド、ルビー、サファイヤ、トパーズ、アレキサンドリアなどの寶石、可愛らしいびんや箱の化粧品など、凡そ最近流行の粹といふ粹はみんなこゝに陳列されてあつた。この美しい小さな窓一

つに、こゝらの浮薄な若い女たちが誘惑されるのは當り前のことで、男たちが居酒屋で小遣ひをみんな飲んで了ふと同じやうに、女たちはまたこの窓の中へみんな小遣ひを吸はれて了ふのであつた。

ペリーヌはその美しい行列を見ると、まづ當惑して眉を顰めた。彼女が勢ひよく店へ這入つて行つたはいゝが、そんな見すほらしいペリーヌには誰れも見向きもしないらしく、誰れ一人店の者が用を聞きに来ないので、暫くの間はたゞボンヤリと立ち盡してゐた。けれども何時までさうもしてゐられないので、彼女は向ふの帳場の前に頑張つてゐるこゝの女主人ラアシエエのところへ行つて、封筒ごと例の傳崇を出した。

「何が入り用なんですか？ 姉さん？」

ラアシエエは帳場の「上」から横柄に彼女を見下しながら云つた。

けれども目の前に出された封筒に「マロクール工場、ヴェルフラン・パンダヴォアヌ」と書いてあるのに氣が附くと、ラアシエエの顔色はガラリと早速に變つた。

「あら、まあ、何がお入用なのでございますか？ お嬢さん！」

さう云ひながらラアシエエは帳場からわざ／＼下りて来て、傍の椅子を出して「さあ、どうぞお掛

「け下さいませ！ どうも滅切りいゝ氣候になりましたこと！ よく被在つて下さいました。毎度ありがたうございます」と云ふ調子……。

着物、下着、靴、帽子——と、それ丈け一つ見せてくれとペリーヌはおづ／＼云ふと、ラアシエエは頻りにペコ／＼と頭を下げながら云つた。

「はい、畏りましてございます。丁度只今は上等なものが澤山ございます。何しろ丁度今がお更衣への季節でございますので、こちらでも特別にお格安に致して置きますでございます。はい！ ところで……お嬢さん！ ……あのやつぱり洋服からお先に御覽なさいますか？ はあ、洋服から！ はい、はい！ 畏りましてございます。では、只今こちらへ持つて参りますから、少々お待ち下さいませ。」

聴て、ラアシエエの持つて來たのを見ると、どれもこれも目も眩いほど美しい上等な洋服の生地で、ペリーヌの買はうといふものとは大變な違ひであつた。ペリーヌはこんな立派な洋服の生地でなく、格好な値段の出來合ひがあるかと聞いた。そして、それでないと明日にでもヴェルフランが外出するとなれば、一緒に附添つて行くのに間に合はないからと、ペリーヌはラアシエエに附け加へた。

「へえ、まあ、あなたがヴェルフランさまと御一緒にどちらへかお出掛けになるのでございますか？ まあ、それは……それは……」

「ラアシエエはさう早口に答へたが、心中では何んて不思議な話だらう？ 一體どうした譯なんだらう？ など、自ら問ひ自ら答へてゐた。このぼろ／＼の見すほらしい少女と、どう云ふ譯があつて、あの大工場主のヴェルフランと一緒に出掛けるといふのだらう？ そして一體どこへ行くのだらう？ ラアシエエはあまりのことに、思はずペリーヌに訊き返さずには居られなかつた。

「ペリーヌはそんなことには答へないで、黒服の出來合ひがあつたら見せてくれと云つた。

「はい、畏りましてございます。ですけれど……お嬢さん！ 何んてございますか？ どこかお葬式にでもお出でになるので……？」

「いゝえ、お葬式のために着るものではありません！ たゞ喪中の普段着にするんですが……」

「はあ、はあ！ 解りましたでございます！ では、お嬢さん！ まことに恐れ入りますが、お値段と型と生地の御注文を伺ひたいものでございますが……」

「えゝ、型は並で結構ですわ！ 生地は軽い着よいものなら何んでもいゝんです。値段は一番安いのにして下さい！」

『はい、はい、畏りましてございます！ では、早速お見せ申しますから、少々お待ち下さいませ。あの！ ちよいと！ ヴァージニイや！ このお嬢さんのお相手をしておくれよ！ 私しは今一寸急しい事があつて手が離せないから！』

まあ、何んといふ調子の變り方だらう！ ラアシェエはそんな安物買ひの相手はしてゐられるかいと云ふ態度で、また胸を突き出しながら帳場の椅子へ座り込む……。この子は屹度下男の娘だらう？ その下男の中の誰れか？ 死んだので、ヴェルフランさんがこの子のために喪服を一着買つて遣るのだらう？ しかし……それにしても下男の誰れが死んだのかしら……？ ラアシェエは帳場の机へ片肘を突きながら、餘計なことをいろ／＼と考へ耽つてゐた。

聽て、ヴァージニイと云ふ女店員が持つて來たのを見ると、それは金モールと黒糸とで縁を取つたカシミヤ織りの服だつた。

これも駄目だらう——と、ラアシェエは帳場の上から見切りを付けて了つた。

『駄目、駄目！ そんな値段の張るものを持つて來たつて駄目だよ！ あの……あれを見せて差上げてごらんね。あれを……何んだつたつけ……えいと……さうさう！ ほら……あの小さな水玉

模様の縮まじりの黒い洋服——あれを……！ あれを出して來てお見せしてごらん！ きつとあれならお氣に召すだらう！ 身幅も又も少し長いと思つたが、少しつめればいゝんだから譯なしたよ。まあ、あれで我慢をして戴くんだね。

そんな風にペリーヌはどれもこれも氣に入らないものばかりだつたが、こんどのだけは寸法こそ合はないが氣に入つた。この寸法の違ひはすぐつめればよくなると女店員は云ふし、ペリーヌにしてもさうして貰ふことにして二も二もなくそれを買つた。

下着や靴下の方は値段の安いものさへ買へばいゝのだから、服を撰るよりズツと時間がかゝらなかつた。彼女がやがて靴下と肌着とを二つづゝ取り出すと、到頭ヴァージニイまで主人と同じやうな馬鹿にした顔附になつて、靴や黒い麥稈帽子などを被せて見る時などは、これも商賣だから仕方がないが、本來ならばこんなほんつくをいつまでも介つちやゐられないんだよ——といふ風に、頭から恩に着せたりやうな様子でブリブリしてゐた。

あゝ、しかし何んでペリーヌがほんつくだらう！ ヴェルフランの喧ひ附け通りに贅澤なものを買はないで、彼女は靴下二足肌着二枚だけ貰ふと云つただけではないか！ それからペリーヌは前々か

ら心掛けてゐたハンケチを三枚買ったが、店中の者はやはり嘲笑を浴びせかけてゐた。

「うふ！ 何んて貧乏なんだらう！ 何に一つ持つちやゐないんだよ！ ごらんないな！ ハンケチまで買ってゐるわ！」

みんなは店の隅でひそ／＼叫き合つた。

「では……これをお届けしませうかね？」

ラアシエエは帳場の上からからかふやうな調子で云つた。

「いゝえ、夕方になつたら私しの方で取りに來ます。その時縫ひ直しも出來てゐたら持つて行きますわ！」とペリーヌは云つた。

「はあ、さうですか！ ぢや、必ず八時から九時の間にお出で下さい お待ち申して居ります！ はい、毎度ありがとうございます！」

ペリーヌにはこちらから出向く方が都合がよかつた。まさかにあんな小屋へ品物を届けて貰ふ譯には行かない。それにもうあの小屋へ行つて寝ることも出來ないので、今夜から何處へ行つて泊らうか——その當てさへまで附いてはゐなかつた。あの小島の小屋にはいつ人が來るか知れないから、もう

それを頼みにするわけには行かない。まるで着のみ着のまゝのものならば、戸閉りのない露天同様のところに住んでゐても介はないが、さて少しでも持ち物を持つて見ると、もう人からは馬鹿にされない代りには、またそれだけのものを盗まれないやうに用心しなければならぬ。そこで彼女はどこかへ泊らうと思つたが、やつぱりロザリーの家へ行つて見やうと考へた。

ペリーヌはラアシエエ雜貨店を出ると、そのまゝフランスア小母さんの家を指して出掛けた。うま／＼く部屋を都合して貰へるといゝが、しかし、それかと云つて——いつかのやうな臭い部屋でないといゝが……彼女はそんなことを絶えず考へながら歩いて行く……。

フランスア小母さんの家の門まで來ると、家から急いで出て來るロザリーとバツタリ出會つた。

「あら、お出掛け？」

「えゝ、まあ……あなたはもうこつちへ歸つて來たの？」

二人はそこへ立止つて、早口にベチャ／＼と話し合つた。

ロザリーは丁度その日は大事な使ひでピツキニイまで行かねばならないから、ペリーヌのためにいろ／＼と世話をしたいがすぐには歸れないが、何んならピツキニイまで一緒に附合はないか！ さう

すれば川を早く済ませて二人で一緒に歸つて来やう！ さうしてはどうかと親切に云ふ。ペリーヌにしても久し振りで會つたロザリーと散歩するのはうれしかった。え、行きませう！ 本當……？ え、行きませう！ まあ、うれしい！ さあ、それでは出掛けませう！ うれしいわね？ うれしいわね！

二人は足並も軽々とピツキニ指して肩をならべて行く。少し行つては花を摘み、疲れたといつては木蔭に休み、お互ひに積る話を語り合ひながら、二人は手と手をつないで歩いて行く……。マロクールのフランソア小母さんの家へ二人が歸つて来たのは、夜に近かつた。けれども二人とも久し振りにしみじみ語り合つたうれしさに、時間の経つたのもまるで夢中で、ロザリーなどは自分の家の入口へ来てやつと夜に近いのおどろいた位であつた。

『さあ、困つたわ！ またゼノビイ伯母さんに叱られないかしら……？』

ロザリーは不安の肩をすほめながらつぶやいた。

『まあ、私しどうしやう……？』

ペリーヌは氣の毒さうに云つた。

『あ、どうせ遅くなつたんですもの！ 何んて云はれたつて介はないわ！ ……それよりか、今日ぐらゐ私し面白かつた事ないわ！ ねえ……？』

『まあ、私しもよ！ 私しなんか特にさうだわ！ あなたのやうに毎日いろ／＼話しをする人があるからいゝけど、私しをどらんさいな！ 私しと來たら誰れ一人しみ／＼と話相手になつてくれる人なんてゐないでせう。でも、今日ぐらゐ嬉しい日はなかつたわ。ねえ？ ロザリーさん！』

『え、本當ねえ！ 私しだつてこんな樂しかった日半れて初めてよ。それを考へれば……ちつと位ゐゼノビイ伯母さんに叱られたつて、私し何んでもないわ。』

ロザリーはそんなことを云つた。

ところが、ゼノビイ伯母さんは幸ひにも臺所の方が急しいと見えて出て來なかつたので、部屋を支度や何や彼やはフランソア小母さんがして呉れた。そのために値段も格安に早く間に合せてくれた。

下宿代は三食附一箇月二十圓で、部屋代は別に四圓八十錢。部屋の明るい窓際には小さな鏡臺が置いてある。

食事は八時きつかりに食堂で一人で済ませ。それから三十分後にラアシェエ雜貨店へ今日買つて

疑ひが晴れて

預けた品物を取りに行つた。そして、ドアに鍵をかけて寝たのは九時。かうして初めて床に寝て見ると、餘計いろ／＼な考へが浮んで眠れなかつたが、彼女は心から希望で一杯であつた。さあ、もう眠らなければならぬ。

翌日の朝のことであつた。

ヴェルフランは幹部の人達に一應命令を傳へて了ふと、ベリーヌを自分の部屋へ呼んだが、その顔色のたゞならないのに彼女はハツとして胸を躍らせた。彼女が部屋へ這入つて来たとき、ヴェルフランはチャリとベリーヌの方に向いたが不機嫌な顔附で黙つてゐた。たしかにこれはどうかしてゐるらしい。

これはまたどうしたことだらう？　いつもの親切なおだやかなヴェルフランが、今日はまるで別人のやうに怒つて黙りこくつてゐる……。まあ、どうしたといふのだらう？

何か怒られるやうな悪いことでもしたのだらうか？

さう考へては見たけれども、どうも自分には心當りがない。これはひよつとするとこんどの買物が思ひの外高過ぎたのかしら？　しかしあの時は贅澤なものもは絶対に買はないで、一にも經濟、二にも

經濟といふ風にして、出来る丈け身分相應のものをと氣を附けたのに……？　あれもいけなかつたとする、では、どんなものを買つたら好かつたのだらうか？　それに……買つて来たどれがまたいけなかつたのだらうか？

あれか……？　これか……？　彼女は立ち騒ぐ胸を押し鎮めながら考へてゐると、間もなくヴェルフランは重々しい口調で云つた。

「こら、オウルリー！　何故お前は嘘を云つたのだ？」

「えッ？　まあ！　私し……どんな嘘を申し上げたでせう？」

彼女はあまりのことに驚いて云つた。

「この村へ来てからのお前の行動のことに就いて……お前は私しに大變な嘘を云つたぞ。」

「まあ、そんなことはございません！　何も彼も私しは本當のことばかりを申上げて来たんですもの！　決して嘘なんか申し上げたおぼえがありませんわ！」

「だが、いつかお前は私しにフランソアの家に泊つてゐると云つたではないか！　けれども訊いて見るとお前はあの家には一晩しか居なかつたと云ふ！　それからお前はどこへ行つたのだ？　昨日わし

は外の用でゼノビイを呼んだので、話の序にお前のことを訊いて見ると、お前の話しと大變違ふ！お前がフランスアの家にお泊つてゐたのはたつた一晚だけだと云ふぢやないか！あの女の話しによると、その翌日お前は不意に姿を消して了つた切り、いまだに何處にどうしてゐるか解らないといふ！こら！オウルリー！お前は何故そんな嘘を云ふのだ！」

初めのうちは胸がしびれる程に痛かつたが、段々聞いて行くうちにペリーヌはまた元の平靜に歸ることが出来た。

『その本當のことを知つてゐる者が、たつた一人でございます。』

彼女はしづかにさう云つた。

『誰れだ！それは？』

『ロザリーさんです！あの人なら知つてゐます。あの人なら屹度本當のことをお話しします。私の申し上げたことに嘘はございませんの！けど、あなたのお耳に入れる程のことではございませんが……』

『いゝや、お前がわしに使はれてゐる以上、どんな些細なことでも隠してゐてはならぬのだ！そ

れはお前の義務ではないか！』

『はい！では、かう致しませう！早速ロザリーさんをこゝへお呼びになつて、私に會はせない前によくお聞きになつて下さいまし。さうすれば……私が嘘を申し上げないことがお解りになりますわ！』

『ふむ！さうか！よし、よし！だが、兎に角一應わしに話してくれ！』

さう云ふヴェルフランの聲は、前よりもズツとやさしかつた。

そこで、彼女は夜の恐ろしく寝苦しかつた話、その部屋が不潔で臭くてとても居溜らなかつた話、そして、そして息も詰りさうになつて、やつとのことで夜明けの庭先へ這ひ出たがらいゝやうなものゝ、もう一分間も愚圖々々してゐたらそれこそ生命にもかゝはるだらうと云ふ話などを、それからそれへと包み隠さず物語つた。

『だが、外の子供たちが我慢出来ることを、お前だけには出来なかつたのかね？』とヴェルフランは訊ねた。

『それが私には不思議で溜りませんの。けど、みんなは吃度いゝ空気を吸つたことがないんだらうと

「思ひますわ！ それでなくてはあの部屋にとても居られる譯がございません。我儘からこんなことを申し上げるんぢやございません！ 本當なんですわ！ これ以上お金が出せないんだからと思つて、必死になつて我慢もして見たんですけど、その部屋にばかりはどうしても居られませんでしたの。ですから、もう二度とこんなところへは寝まいと思ひましたの！ だつて、死んでは大變ですから……。とてもお話しにならない部屋ですの。もう一刻もあんなところで寝たら、とても生きては居られませんわ。まあ、何んて非道い不衛生な部屋だらう——と、今でも考へ出した丈けでゾツといたしますわ。」

「そりや怪しからん。この世の中にそんな恐ろしい部屋があるものか……？」

ヴユルフランは心の中に、さうした部屋の中でうごめいてゐる薄倅の少女たちを哀れに思つた。しみじみと、しみじみと……。

「ええ、そりやまあ大變なお部屋なんでございますの。まあ、そこへ一度行らして見たらお解りになりますわ。そりやあお話しにならない臭い御部屋なものですもの。もう絶対にこんな部屋に寝てはいけないつて、きつとあなたは仰有らずには被在しやれませんわ。」

「さあ、その先を話してくれ。」

ヴユルフランは突然に云つた。

そこで、彼女はそれからの事——小島を見附けたこと、それからそこにあつた小屋の中で此間まで暮してゐたことなどを、残る隈なく手に取るやうに話して聞かせた。

「ふむ、だが、一人で……夜などは恐ろしくはなかつたかね？」とヴユルフランは訊いた。

「いゝえ、もうそんなことは慣れつこになつて了りましたもの……」

さう云つて、彼女は美しい顔を少しほころばせた。

「ふむ、一寸待つておくれ。お前が今云つた小屋といふのは、サン・ピポアの側の左手にある——あの小屋のことかね？」とヴユルフランは訊ねた。

「ええ、さうでございますわ。」

「あゝ、さうか。あれはわしの甥達が使つてゐるのだ。では、そこで寝起きしてゐたといふのだね？」

「いゝえ、そればかりぢやありませんの。そこで私には靴や肌着やお勝手道具などを造へましたし、

また朝と夜にはそこで毎日御飯も食べて居りましたの。いつだつたかはロザリーさんを呼んで一緒に御馳走を食べたりしましたわ。これはロザリーさんがよく知つてゐますから、どうぞお聞きになつて下さいまし。さうして私は先達つてサン・ピポア工場の方へ呼んで戴く日まで、毎日そこで暮して居りましたの。けれども……今では下宿代も自分で拂へるやうにして戴いたので、またフランスア小母さんの家に厄介になつて居りますの。どうか今迄のことはお赦し下さいまし。』

『ふうむ！ だが、ロザリーと御馳走を食べたりしては、その時だつて相當に金があつたのぢやないか？』

『いえ、違ひます。本當を云ふと……』

そこまで云つたが、彼女はまた口をつぐんだ。

『これ、何も彼も云つて了ひたさい！』

『でも……あんまり細かくお話して、却つてあなたのお暇を潰してもいけないと思ひますけど……、それとも……ロザリーさんと私と……二人の話を一々聞いて下さいませうでせうか？』

『あゝ、介はないとも、話しておくれ。私はさう云ふ面白い話を聞くのが大好きなのだ。今迄だ

つて……どんなにお前のやうな話し相手が慾しかつたらう。そして、どんなに……お前のやうな無邪氣な子供から、そんな話を聞かせて貰ひたかつたらう？ だが、わしは今迄はちつともそんな暇がなかつた。一にも工場、二にも機械、それでなかつたら……職工の怪我をした報告……そんなことで……長い長い年月を暮して來たのだ。あゝ、思へば……何んと云ふ長い長い……空虚な生活であつたらう……』

ヴェルフランの顔はさびしさに震へた。何千萬といふ富と、絶大な権力と、宏大な工場とを持つて、その名譽は遙かにフランスを超えて海外にまで及び、何に不自由なく暮らす身でありながら、誰れ一人として慰めてくれる家庭の人を持たないとは、あゝ、何んといふ氣の毒な、何んと云ふさびしい生活だらう？

『あゝ、思へば……何んと云ふ長い長い……空虚な生活であつたらう。』

彼女はその言葉を聞くと涙がこぼれて來た。自分もやはり父母に死に別れてからは、廣いこの世界に頼るものとは一人もなく、いつもいつも行末のことを心配しながら、一日の勞働に疲れても……絶えず心から離れないのは、亡き父のこと、母のこと……誰れがこのさびしさを慰めてくれるでは

なし、たゞ泣いて泣いて……母戀ひし、父戀ひしと、自分の果敢ない運命を呪ふばかりなのだ。あゝ、自分はどんなに親身のやさしい言葉に餓ゑてゐるだらう？ おゝ、お父さま！ お母さま！ たつた一言でも呼び掛けたい！「まあ！ 私しの可愛いペリーヌや。」——そんな時、お母さんはよくさう云つて頭を撫で、下さつたつが……。けれども、けれども……。あゝ、今では……。その両親とも永久に別れて了ひ……。やつと懐しい祖父にかうして會つてゐながら、悲しい一つの過去のために、かうして未だに名乗り合ふことさへ出来ない。なつかしい祖父さま！ たつた一人のお祖父さま！ 私しのさびしいお祖父さま！ たとへあなたは貧乏や労働の疲れは御存知ないとは云ひながら、凡そ世界中の不幸を一人に背負つてゐらしやる。私しには解ります。そのお見えにならない目に涙をたゞへて、うなだれながら仰有つたその悲しい……。悲しいお言葉！ それです。それですわ。何も彼もみんなそれが不幸を導いたのですわ。

ペリーヌはヴェルフランが疲れたやうだつたら、今にでも話しを止めて了はうと思ひながら、ロザリーと自分との——あの日の愉快だつたことを話してゐたが、彼は退屈らしい顔をするどころか、「ほお！ それは愉快だ。それで……。さあ、その先を早く話しておくれ。」などゝ一膝も二膝

も乗り出すと云ふ騒ぎ……

そしてヴェルフランは、ペリーヌに話を飛ばさないで話せと云つた。そればかりか……。道具を作つたことから魚を釣つたことまで、一つ残らず詳しく訊きたいと云つた。

「ふむ。そんなことまでしたのかね。ふむ、ふむ、さうか……。それで？」

ヴェルフランは何度も何度も感嘆の聲を漏らした。

やがて長いペリーヌの物語りが終はると、ヴェルフランは思はず彼女の頭をやさしく撫でながら云つた。

「おゝ、何んといふお前は勇敢な娘だらう？ よく正直に話してくれた。人間はどんな場合にも勇氣さへあれば、苦しいことにも打ち克てるものだ。それを聞いてわしはうれしい。流星にお前だ。よく遣り近したものだ。うむ、わしはそのお前の話からいろ／＼なものを教はつた。有り難う。わしは心からお禮を言ひますぞ。さあ、では、お前の事務所へ行つてゆつくり休んでをれ。随分長話して疲れただらう？ 御苦勞であつた。だが、三時になるとわしは外へ出るから、その時にはお前も一緒に行つて貰はう。では、あちらでゆつくりと休んでおくれ。いや、御苦勞であつた……

……』
ヴェルフランの口元には明るい微笑さへ浮んでゐた。

謀叛人の群れ

ペリーヌの使つてゐるペンデイトの事務室は小じんまりとした部屋で、道具らしいものといつては——テーブルと椅子が二脚、それに黒たんの本棚、それと壁にかゝつてゐる世界地圖と——たゞそれだけのものだつたが、床板が松板でキラ／＼光るほど磨きがかけてあつたり、美しい赤い窓掛が微風にゆらいで、何處からどこまでキッチンと片附いてゐることが何よりも氣持のよいことだつた。それにそつと入口の戸を開けて置きさへすれば、他の人たちの事務室の様子が手に取るやうに解る便利があつた。

ヴェルフランの事務室の右と左に塙のテオドルとカジミールの部屋がある。會計室はその背後で、一番最後の向ひにある大きな部屋はフアブリー技師のゐるところだつた。そこではいつも澤山の製

圖工が机を並べて圖を引いてゐる。

ペリーヌは部屋へ這入つては來たものゝ、さて改つて何をするといふ仕事もなかつたので、ベンディットの使ふアーム・チェアに腰を下ろす氣にはならなかつた。入口のところへ椅子を持ち出して坐ると、面白くもない辭書を二冊木柵から引き出しては見たが、それを讀んで見やうとする前にもう欠伸が出るといふ始末。あゝ、つまらない。彼女は心の中でさう呟いたが、すぐまたそんなことを考へるのは勿體ないと思ひ返した。あの辛いトロツコ押しの勞働をしてゐた時のことを思へば、こんな立派な事務室の中にゐられること丈けでも勿體ない。けれどもさうしてたゞボンヤリと時間を潰してゐるためか、その日は殊に時間の經つのが遅いやうな氣がしてならない……しかし、聽て……。

到頭晝休みの鐘が鳴る。

ペリーヌも今日ばかりは待ち兼ねてゐたことゝて、我れ先きにと部屋を飛び出して、書飯を食べにフランスア小母さんの下宿へ急いで行く途中、やはりこれも亦食べに歸るフアブリーとモンブルウの二人とバツタリ二緒になつた。

「やあ、いよ／＼僕達のお仲間になりましたねえ。お芽出たう。オウルリーさん。」

モンブルウは意地の悪い笑ひを浮べながらさう云つた。いつかのサン・ピポアの失敗を救つて貰つたのが小癩に觸るらしい。

ペリーヌにはそれが變な當て附けのやうに聞えて不愉快にもなつたが、すぐ何氣ない笑ひを漂はせながら快活に云つた。

「まあ、どうしてとせう？ 違ひますわ。私しがあなた方のお仲間だなんて……。そんなことごさ
いませんわ。やつとウキリアムさんのお仲間になつたまでとすわ。」

この謙遜した答へ方がいかにも氣に入つたらしく、フアブリーはペリーヌの方を顧みながら、頼母
しさうな笑みを漏らした。

「でも、あなたはベンディット君の代りになつたんぢやありませんか。」

モンブルウは少し執拗い調子で云つた。

「いや、オウルリーさんはベンディット君の留守をしてゐるんだよ！」

フアブリーは不意に言葉を挟んだ。

「何んだ、同じ事ぢやないか。」

「いゝや、さうぢやないさ。ペンデイト君の病中のこの一二週間だよ。あの男が病氣さへ癒ればまた元通りに引き續ぐのさ。だが、このオウルリーさんが代理をしてゐて呉れるんで、あの男も安心して病院にゐられる譯だよ。」

「しかし……君や僕もあの男にや随分手傳つてる積りだよ。」

「うん、そりやさうだ。だけど、まあ、このオウルリーさんが一手に引受けてゐるやうなもんだからね。我々はたゞその取り卷きに過ぎんよ。しかし……まあ、何んだよ。かうして我々三人にやあべンデイト君も禮を云ふ必要があるね。」

「フアブリーはまたペリーヌを見て笑ひながら云つた。」

實際、モンブルウは果して自分を仲間だとしんから思つて、あんなことを云つたのかどうか解らないが、フランソア家のペリーヌに對する態度には、成程と思ひ當ることもあつた。みんな外の上等の下宿人は一緒のテーブルで食事をするのに、彼女だけは御飯はいつもみんなの後で食べさせられる。これはどう考へてもやはりみんなと一緒に扱つては居ないらしい。しかしそれが何故かは彼女にも解らなかつた。

ペリーヌは、しかし、そんなことは何んでもなかつた。御飯などを眞先に食べられまいが、そんなことは大した問題ではない。こんな上等な御飯が食べられる身分になつたこと——もうそれだけで幸福だと思はなければならぬ。その上、さうしてみんなと自由に話しの出来るやうになつたのは、少女に似合はない難かしい仕事をするペリーヌにとつては、何に彼とそれが爲めになるに相違ない。みんなはヴェルフランのことや、彼れの二人の甥たちのことや、また例のタルウエルなどの話ごととはよく知り抜いてゐるから、屹度何に彼につけて噂話が出ることだらう……。ペリーヌにとつては、その四人をいつもはらはらと氣に掛けてゐる丈けに、さうしたみんなの噂話しは、一語千金の値打ちがある。もし耳に入れて置かなければ、それこそどんな失敗するかも知れない。けれども彼女は決してあのイヤな立ち聞きをする必要はない。お互ひにみんなの前を承知して話し合つてゐるのだから、ペリーヌも何んの氣兼ねなく一緒に聞ける譯で、何よりもこれは有難い。

ところがその日はどうしたことか、みんなはどうでもいゝ世間話ばかりに花を咲かせて、ペリーヌが思つてゐるやうな話しが出て来ないので落膽りした。そこ／＼に晝飯を食べて了ふと、ペリーヌはロザリーのところへ行つた。例の汀の小屋の一件がどうしてヴェルフランの耳に這入つたか、それが聞

いて見たかつたのである。

『それは……あの「痩せつほち」(タルウエルのこと)なのよ。ほら、此間まであなたはピツキニイに行つてゐたでせう？ あの留守に何かの用で私しの家へあの人が来て……ね、序でにゼノビイ伯母さんからあなたのことを聞いて行つたの。あの伯母さんと来た日にや、また、何か一つ耳へ這入るとすぐしやべつて了ふんですからねえ。本當に仕用がない人だわ。それだもんだから……あなたがあの時一晩しかこゝに居なかつたことも、それから外のことみんな話してゐたわ。』

『まあ、外のこと……つて、一體何んなこと……？』

『さあ、傍に居た譯ぢやないから、よくは解らないけど、どうせあなたのことを思ひ切り悪く云つたに違ひないわ。でも、まあ、却つてそれがあなたにはいゝ工合になつた譯なのね？』

『本當よ。随分私しには都合のいゝことになつたのよ。それに……ヴェルフランさんに先刻聞かれたので、私しみんなお話しして了つたの。だから、もう安心だわ。』

『あら、好かつたわねえ。ぢや、あたし癩に觸るから伯母さんに話してやらう。きつと目を丸くして驚くわ。』

『あら、そんなことを云つちや駄目よ！』

『なあに……云つてやるわ。だつて、もう今ぢやあヴェルフランさんが立派な後楯なんですもの。もうゼノビイ伯母さんぐらゐ何を云つたつて恐いことなんかないぢやないの。まあ、本當に好かつたわねえ！ 伯母さんだつて何も彼も知つてゐるのよ！ 大變褒めてゐたわ！ ですから、あなた、これからはどつぞ伯母さんと見掛け丈は仲よくしてゐて頂戴ね？ どうせお互ひに同じ棟のうちにゐるんですからね。まあ、お互ひに顔を合はせても笑へないぢや困りますからねえ。どうぞ明日は伯母さんと會つて、何んとか挨拶をして下さいね。お願いだわ！ けど、あの「痩せつほち」にしやべられるといけないから、仕事の方のことは何んにも云はない方がいゝことよ！』

『えゝ、さうするわ！』

『實際、あの伯母さんと來たら、そりやあとても人が悪いのよ！ 氣を附けた方がいゝわ！』

『えゝ、でも、もう……こんどこそ大丈夫だわ！ あなたに云はれたんで、随分助かつたことよ、どうも有りがたう！』

約束の三時になると、ヴェルフランはベリーヌを自分の部屋へ呼ぶと、支度もそこ／＼に二人はい

つものやうに馬車で工場巡視に出掛けた。職業に勤勉なヴェルフランは、雨が降つても槍が降つても、十年一日の如くこの巡視を今迄に怠つたことがない。

そして、その見えない不自由な身でありながら、テキパキと命令を下して行く有様は、まるで目明きさへ及ばない程しつかりしたものであつた。

その日は巡視をフレキセル工場から初めた。

それから暫くして、悉皆り巡視を終へてヴェルフランがペリーヌと一緒に玄關へ出て見ると、馬車はあつたが——肝心の馭者の姿が見えない。ウキリアムは何處へ行つたのだらう？ 云はずと知れたそれは酒場へ行つたに違ひない。ヴェルフランを馬車から下ろして、二人が玄關の中へ這入つて行く後姿を見届けてから、早速いつものやうに近所の酒場へ駈け附けて……さて、折好く居合はした相棒と、時も忘れてメートルを上げてゐるのにちがひない。

ヴェルフランは一人の男を探しに出た。そして暫くの間玄關でいら／＼しながら待つてゐた。けれども仲々歸つて来ない。ヴェルフランはすつかり怒つて了つた。その中に向ふからウキリアムが、一杯機嫌の千鳥足で遣つて来た。

「や！ あの足取りで見ると、ウキリアムはまた酔つてゐるな。ブノア君！ さうぢやないかね？」
ヴェルフランは傍の支配人を顧みて云つた。

「はい……どうも恐れ入ります！ 全くあの男は酔拂つてゐます！」

ブノアは仕方なくその通り云ふより外に途はなかつた。

ウキリアムは何か鼻唄を歌ひながら、彼方へひよろり、此方へひよろり……と、よろけ、よろけ、歩いて来たが、ヴェルフランやブノアの姿を見ると、ガリガリと間の悪るさうに頭を搔いた。

「いやあ、こ、此奴は……どうも……弱りやしたな。實は……その……エへ、へ、へ……一寸そ
の……一杯……エへ、へ、へ……」

ウキリアムはろれつの廻らない口で、頻りに云ひ譚をしはじめた。

「澤山だぞ！ ウキリアム！ そんな云ひ譚は聞きたくない！ 見ろ！ そのだらしのない口の利き方を！ 莫迦！ その歩きさまは何んて事だ！」

ヴェルフランは嚴かにさう云つた。

「いや、これは又強いお叱りやうで……。いや、これは、これは……。どうぞ……まあお赦し下さい。

實は…その…これには…深い…仔細が…オットット…

さう云ひながら、ウキリアムは馬の手綱を解きかけて、思はずバツタリと落した鞭を拾ふのに、彼方へよろけ、此方へよろけ、手ばかり振り上げたりしてゐる。

支配人はこの有様を苦々しく見てゐたが、あまりのことに耐り兼ねて、

『こりやあ、とてもウキリアムでは途中が危険です！ 私しがマロクールまで馬を御して参りませう。』と云つた。

それを聞くとウキリアムは肩を聳やかせた。

『な、何んだつて…？？？へん、憚りながらこのウキリアムは…と來ら…』

『黙れ！ 何んと云ふ莫迦だ！ もう貴様のやうな奴は今日限りだ！ たつた今暇をやるから、どこへでも行つて了へ！』

ヴユルフランは頭から極め附けた。

『あゝ、旦那様！ けれども…それぢやあ…あの…どうぞ、まあ…』

ヴユルフランはそれを手で制すると、ウキリアムの泣き言などには目も呉れず、支配人を顧みて

云つた。

『いや、ブノア君！ 心配しないでくれ給へ！ 馬車のことならこのオウルリーで大丈夫だよ。何かに…このココは猫のやうにおとなしい奴だから、放つて置いたつて安心してゐられるよ。それに…こんなのだくれよりこの娘の方がどれ丈けましか知れないさ！ さ、オウルリー、そろ／＼行かうぢやないか！』

早速ヴユルフランはペリーヌとブノアとに援けられて馬車に乗る。ペリーヌはその横の馭者臺に腰を下ろす。馬は一と鞭當てられた！ 馬車は走り出す。

ペリーヌは馬を御することには馴れ切つてゐたけれど、それでもこの大きな責任を考へると無暗なことは出来なかつた。

彼女はまた馬に一と鞭當てやうとすると、早くもそれと見て取つたヴユルフランは云つた。

『そんなに急がせなくてもいいのだ！』

『あら、まあ、御免下さいまし！』

『あゝ、これで結構、結構！ 並足でいゝよ。』

ヴユルフランはやさしくさう云つて點頭いた。

「聽て、馬車はマロクールの街へ這入る……。街は相變らずの賑やかさだ。通りすがりの村人たちは目を丸くして馬車を眺める。この黒い喪服を着て、同じ色の麥稈帽子を被つた——不思議な少女の馭者に驚いたらしい。いつものウキリアムなら馭者臺で、いつも眞赤な顔で危なさうに手綱を握つてゐるのに、今日はまたこの少女の物馴れた——落着き拂つた馭者振りはどうだらう！ これはまあ一體どうしたことだ？ そして一體何處まで行くのだ？ 人々は寄ると觸ると呷き合つて、二人の馬車をいつまでも見送る。ペリーヌのことを知つてゐるものは殆んどなかつた。」

丁度馬車がフランツア小母さんの家の前を通りかゝると、ゼノバイ伯母さんが二人の女と門のところで立話しをしてゐる。そこへペリーヌの姿が見えると、ゼノバイ伯母さんはびつくりして目を丸くした。

「まあ、今日は！ ヴユルフランさま！ よいお天氣でございますこと！ まあ、オウルリーさん、御苦勞さま！」

今日はまた伯母さん殊の外に機嫌がいい。

ゼノバイ伯母さんは遠くなつて行く馬車を見送りながら、ペリーヌのことを褒めること、褒めること……。近所のお内儀さんたちはたゞ煙りに捲かれて了ふばかり……。ゼノバイ伯母さんの言葉通りに考へると、ペリーヌのこんどの出世はまるで伯母さんが一人で取り持つたやうだ。

「本當に……。あの娘は感心ですよ！ けれどもまた私だちも随分……。あの娘のためには成つてやつたんだから、お禮の一つぐらゐは云つて貰ひたいものですよ。それにしても……。兎に角……。あの娘は珍らしい感心な子供ですよ！」

聽て、馬車がマロクール工場の事務所の入口にピッタリと停ると、急いで出て來たタルウエルはペリーヌを見て仰天してしまつた。

「こりやあ一體どうしたんです？ ウキリアムは何處にゐるんです？」

石段を駆け降りて來て、バツタリ打つかりかゝつたヴユルフランに、タルウエルはせか／＼した調子で云つた。

「あの飲ん兵衛には暇を出したよ！」

ヴユルフランは苦笑しながら云つた。

『どうせ……こんなことになるだらうと思つてましたよ!』

『うむ、全くその通り……』

ヴユルフランはあつさりと言つて答へた。

タルウエルが今日のやうに兎に角工場支配人にまで出世したのも、たゞこの「さうだらうと思ひましたよ」といふ短い言葉が役に立つたのである。いつも彼れは物事が人より先に解るといふのを見せたため、ヴユルフランに自分の熱心な仕事振りを見て貰ひたいのだ! この風はこのタルウエルは狡い男だから、一方にはまた朝から晩まで八方に目を配つて、それこそ手紙一つ見逃すやうなへまはしない。彼れは元來犬のやうに何んでも嗅ぎ廻ることの天才であつた。

『あゝ、どうせさうだと思ひましたよ!』

これが彼れの十八番であつた。

ヴユルフランもそんな時にはいつもかう答へる。

『うむ、その通り……』

これがヴユルフランの十八番であつた。

そこで、タルウエルは今日も例のやうに首を傾げながら、もつともらしい顔附で云ふ。

『で、こない、馭者をお見附けになつたつて譯ですね? 成る程、何れはこんなことになると思ひましたよ!』

タルウエルはヴユルフランを援けて、ヴェランダの石段を上がりながらさう云つた。

『うむ、その通り……』

ヴユルフランはまたさう答へた。

『成る程ね、流石にあなたはお目が高くてゐらつしやる! ロザリーが最初その娘を連れて來た時から、私しはもう此奴使へる子だぞと睨んでゐたんです。ところが案の定! どうです! あなたがもうこの通りこの娘を抜擢なさるぢやありませんか! いや、全く不思議に當つたぢやありませんか! 私しの眼力も違はなかつた譯ですから、愉快ですよ! 旦那!』

タルウエルは一方にさう云ひながら、また他の一方ではペリーヌを意味あり氣に眺めてゐる。何んとも口には出さないが、それだけ露骨にその目がものを云つてゐる。

『おい、俺れがこんなにお前を褒めてやるんだ! 忘れるな! いゝか! その代り……あとで俺れ

の云ふことを聞くのだぞ！」

確かにその目が云つてゐる。ペリーヌは思はずギョツとした。

案の定！ 間もなく報いがてき面にやつて来た。

ペリーヌが入口のところで、ヴェルフランの再び出て来るのを暫くの間待つてゐると、タルウエルが戸の隙間から小聲で云つた。

『おい、ウキリアムがどうしたんだつて？ そつと話してくれ！ さ、早く、早く……』

ペリーヌは口を利くのはいやだったが、こんなことは別段云つても差支へないと思つたので、その顛末を精しく話して聞かせた。

『あゝ、よし、よし！ さあて、俺れのところへさへ来れば、彼奴の歸參の叶ふやうにしてやるがな！』

タルウエルは高を括つたやうな調子で云つた。

その夕方の飯時には又、フアブリーとモンブルウとが交る交る出て来て同じことを聞いた。もうウキリアム解雇の一件が知れ渡つて了つたらしい。誰れも彼れもみんなウキリアムをよく云はなかつた。

『實際彼奴は仕方のない奴だつた！ 今迄に追ひ出されないのが全く不思議さ！ 毎日のやうに酔つ拂つてゐるんだから、馬を曳いてゐる格好つたらないよ。あのおとなしい馬を……何しろ……ふらふら人形のやうにして曳いてやがる。彼んな奴に暇を出すのは當り前さ。』とフアブリーがいま／＼しさをうにして云ふ。

『全くだよ！ 本来ならそれが當り前だが……ね、そこにはそこがあるんだよ。何しろ彼奴を手鹽に掛けてかばつてゐるやつがあるんだからね。それだからこそ、今日まで首が繫つてゐたのさ！』

モンブルウは笑ひながら云ふ。

ペリーヌは心の中で耳をそばだてた。

『……だが、もうかうなつちや、そのかばつてゐた奴等も一寸困るだらうよ。大事なたまを亡くして了つたんだからね。しかし……今だから云つてやりたいね。彼奴は散々みんなから道具に使はれてるのを、ちつとも今だに知らないでゐるんだよ。すこぶるお芽出度い奴ぢやないか！ ねえ、君！』
そこへゼノビイ伯母さんがお皿を換へに這入つて来たので、みんなは一齊に口を噤んで了つた。二人ともあんまり話に夢中になつて了つたので、片隅で黙つて聞耳をそば立てゝゐるペリーヌのことは

忘れたらしい。間もなくゼノビイ伯母さんが部屋を出て行くと、また次から次へと話しつづけた。

『……だが、あのエドモンさんが歸つて来たなら、一體こりやあどうなるもんだね？』とモンブルウが訊くと、

『さうだねえ、あの人が歸つて来たとなりやあ、大概な人は喜んで迎へるよ！ ヴェルフランさんもこれからは年を老る一方だからねえ。だが、どうも僕の考へでは……あのエドモンさんは死んで了つたらしい……』とフアブリーが答へた。

『さうかも知れなくて……。しかし……さう事が解つたら最後、あのタルウエルの野心がどこまで手を延ばして行くか、此奴はえらい事になるぜ。君！ 彼奴は前からこの工場を……あはよくば……自分のものにしてはうとしてゐるんだからな。』

『さうだ！ 實際、彼奴はそんなこと位遣り兼ねない！ これもたゞ僕の考へに過ぎないんだが……事に依ると、何んだね。あのエドモンさんも彼奴に一杯嵌められたのかも知れんね？ しかし……こりやあ、まあ、僕たちが二人ともここには居なかつた當時のことだから、あんまりはつきりしたことは云へないが、今から考へて見ると、あの男ならその位のことは遣り兼ねないぢやないか！』

『ふむ、さうかな……。しかし……そこまでは僕も考へてはゐなかつたがね……』

『いゝや、屹度そんなことに違ひないさ！ それでもその時にやあ……眞逆に奴さんだつて、エドモンさんの地位を狙つてゐるものが他にあらうとは思はなかつたどらうさ！ 今になつて少しは驚いてるだらうよ。まあ、何事にも抜け目のない彼奴のことだから、この頃はどんなことを目論んでゐるかはつきりは解らないが、僕の考へるところでは……何かかう途鐵もなく……大きな……』

『その通り、その通り！ 僕もさう思つてゐる！ どうも何かしら卑劣なことをたくらんでゐるやうだよ。まあ、しかし……今のところはまだ考へてゐる丈けのことだらうが……そんな奴でゐて、彼奴は二十歳になつても自分の名が書けない奴だつたが、さう云ふ悪智慧の方面はなかく、達者なものだ！ 實際驚くよ！』

そこへ不意にロザリーが這入つて来て、そこらまで使ひに行くのだが附合はないかとペリーヌに訊ねた。ペリーヌは行きたくはなかつたが、もう晩飯が済んでから随分時間が経つてゐるのだから、いくら話が聞きたいからと云つて、いつまでもこゝにへバリ附いてゐたら、屹度みんながへんに思ひはしないかと思ふと、やつぱり素直に行つた方がいゝと考へて起ち上つた。

外はしづかな夕暮れである。村の人たちは皆んな愉快さうに世間話で時を過ごしてゐる。往來にも家の前にも、三々伍々として他愛ない噂をし合つてゐる。部屋窓からは明るい灯が赤々と路上を照らしてゐる。夜のどばりが刻一刻と……夢のやうに下りて行く。

ロザリーは用を済ませて了ふと、そこらを二三軒話しに寄つて行かないかと勧めたが、ペリーヌはもう疲れたからと云つてそこで別れた。彼女は部屋へ歸つては來たがそのまま寝る譯ではなく、一人になつて考へて見たいからだ。彼女は思ひ當ることを、どこまでも考へ詰めて見て、成る程といふところまで突き詰めて見たいのであつた。

彼女はフアブリーとモンブルウとが盛んにタルウエルのことを噂してゐるのを聞いた時、タルウエルといふ男は何んといふ恐ろしい人間だらうと震へ上つた。先達つても「俺は主人も同様だぞ！」と脅かされて吃驚りしたが、これはまた聞けば聞くほど恐ろしい男である。

空威張り屋だといふことは知り抜いてゐたが、今こそ何も彼もよく解つた。この恐ろしい男はウリアムが居なくなつたそれからは、自分をその身代りとして白羽の矢を立てるに違ひない。あゝ、どうしたらいいだらうか？

このタルウエルが自分の父を追ひ出したといふことは屹度事實に違ひない！それが證據には、こんどはまた何かをたくらんでゐるではないか。一體、こんどは何んだらう！こんどはあの二人の甥をどうかしやうと云ふのぢやないか？あゝ、これはとても自分がウキリアムの身代りに使はれることも免れることは出來まい。いくら逃げやうと足掻いても、屹度あの男は押へ附て離さないだらう！恐ろしい！恐ろしい！あゝ、神様！この可哀さうな子を助けて下さい！

その夜ペリーヌは殆んど明け離れるまで、あゝか、かうかと心配しながら、いくら寝やうと焦つてもどうしても眠れなかつたが、終ひに流石に疲れてぐつたりと寝入つて了つた。

ダツカからの手紙

ヴェルフランが朝工場へ出勤してまづ第一の仕事は、手紙を一通り調べると云ふことである。そこには内地の手紙や、外国から来た手紙などが山と積まれてあつた。けれども彼れの目が見えなくなつからは、内地便は二人の甥とタルウエル、英文はフアブリー、獨逸文はモンブルウと云ふ受持ちにして、その五人が彼れの傍でそれ／＼に聲高く読み上げるのであつた。

それはあのペリーヌを心配させた話のあつた翌日のことであつた。いつものやうにヴェルフランは、自分の傍で二人の甥とタルウエルとが読み上げる手紙を黙つて聞いてゐた。すると、突然にテオドオルが叫んだ。

『おや、ダツカから手紙が來てゐます。日附は五月二十九日。』

『フランス語で書いてあるのかね?』とヴェルフランは云つた。

『いえ、英語です。』

『名前は何んとしてあるね?』

『どうもそれがハツキリしてゐないで……えゝと……フィールドのやうにも見えるし、フィールドズかな……その初めの言葉が解りません。全部で四頁あります。あなたの名前が處々に見えるんですが……さあ、どうです! 一つフアブリー君に見て貰ひませうか?』

その時、テオドオルとタルウエルとは、思はずヴェルフランの顔色を窺つた。けれども二人は互ひに何かを探るやうな目で眺め合つた。

『ちや、伯父さん! 今の手紙をこのテエブルの上に置いときますよ。』とテオドオルは云つた。

『いや、わしに貸して貰はう!』とヴェルフランは答へた。

タイピストが澤山の書類を抱へて立ち去ると、ヴェルフランはタルウエルと二人の甥たちにもその場から立ち去らせて、ペリーヌをベルを鳴らして呼んだ。

彼女はすぐに遣つて來た。

「あの……何か御用でございませうか……？」と彼女は訊いた。

彼女はヴェルブランから無言のまま渡された手紙に一通り目を通した。その時、どうしたことか彼女はサツと顔色を變へると、手紙持つ手はわな／＼と震へ出したが、幸ひ目の見えないヴェルブランからは氣附かれなかつた。

「これはダツカから来た英文の手紙ですわ。日附は五月二十九日になつて居りますの。」
彼女はどき附く胸をヂツと制へて、これ丈けのことをやつと答へた。

「誰れのところから来たのかね？」

「フィールズといふ人からでございます。」

「何んと書いてあるかね？」

「あの……その前に……ホンの二三行讀ませて戴きたいのですけど……」

「よろしい！ だが、早くしておくれ！」

彼女は一刻も早く讀み終はらうとすればする程、書いてある字がまぢ／＼になつて、却つて一字も満足に解らなかつた。

「さあ、何んと書いてあるね？」

ヴェルブランは待ち切れなくなつて聲を掛けた。

「まあ、仲々むづかしい文章ですこと！ それに文章が大變長いので、なかなか讀み切れませぬわ！」

「何あにそんなに丁寧に譯さなくてもいゝよ！ 大體の意味を云つてくれ／＼ばいゝのだから……。」

ペリーヌは長いこと黙つて手紙を見詰めてゐたが、やがてそれを讀み初めた。

「大體の意味を申しますと、フィールズといふ人がかう云つてゐるのです。いづぞやの御便りにあつたレクラアク氏は既に死んで居られます。つまりまだあなたへこの御返事を書かない前に逝くなられてゐます。早速御返事を書くやうにと遺言されたのでございませうが、何しろあなたの方の御希望條件があんまり澤山なので、それを一つづ／＼纏めてゐる中についついこんな遅れて了ひました。ところが私はフランス語は丸で駄目でございますので失禮ながら英語で御返事を書くことをお赦し願ふ次第でございます、と書いてございます。」

「……で、どんな通信が来てゐるかね？」

「さあ、一寸お待ち下さいまし！ まだそこまでは参りませんから！」とペリーヌは答へた。

彼女はこの返事をしづかな聲で読み初めたが、これではまるで次から次へと急ぎ立てるやうなものだと思つたヴェルフランは、やさしくそれを止めさせた。

「あ、もうよろしい、よろしい！ わしに説明するのは……もう二三度よく読んで解つてからの上にしておくれ！ あつちの部屋で緩つくりと考へた方がいゝだらう！ そして正確に譯せたらそれをまたフランス語に書き直して、それを一つ読んで貰はう！ それがいゝ！ さあ、早くして来てくれ！ わしには中に書いてあることが心配なのだから……。」

早速ペリーヌが部屋から出て行かうとすると、ヴェルフランは狼狽して背後から呼び止めた。

「こんな事は云はなくてもお前には解つてゐるだらうが、それはわし一個人に宛てた手紙なのだから、誰れにもそれを見せてはいけない……！ 假令へどんな人間にも……いゝかね？ 解つたかね？ もし無理にでも聞かうとするものがあつたら、何んにも云はないで黙つてゐるがいゝ、いゝかね！ ほのめかし一つ云つてもいけないのだぞ。わしは心からお前を信用してゐる。どうかわしの言葉を守つて貰ひたい！ お前が誠實にさへ仕事をしてくれるなら、わしはもつとお前を何んとかしやうと思つてゐるのだ！ いゝか、解つたかね？」

「はい、畏りました！ どうぞ御安心下さいませ。」

面に熱誠を現はしてペリーヌは云つた

「うむ、よし、よし！ では、早く遣つて来ておくれ！」

けれども彼女は急ぐわけには行かなかつた。まづ第一行目からお終ひまで読んで了ふと、また読み返へす……。さうしてはまた繰返へす……。

聽て、ペリーヌは大きな紙を出して來ると書き初めた。

それには左の様なことが書いてある。

(ダツカ發・五月二十九日)

拜啓

いつぞや或る重大な取調べを御依頼なさつたレヴェランド・ファア・レクラーク氏が、既に逝去されてゐることはまことに残念なことだと思ひます。その臨終の床へ私しを招いて、氏は私しにかう云ふことを申しました。それはあなたにこの御返事を私から送つて呉れとの一言でございます。けれ

ダツカからの手紙

どもその後いろ／＼な支障が出て來ましたために、誠に不本意ながらこゝに十二年の歲月を費して了ひました。それが今日になつて漸くあなたに御返事を差上げられる運びになつたことは、せめてもの義務を果す一端と考へて居ります。長々御無音のまゝ延引いたして居りましたことは深くお詫びを申し上げます。尙ほ私しことフランス語の知識に乏しいため、英文でこの御返事を草しましたことを、併せて御海容下さいませやうに……

ペリーヌは先刻ヴェルフランに讀んで聞かせたところまで來ると、そこでまづ讀むのを止めて、一二箇所讀み違へたところなどを訂正した。

そこへ突然テオドルがドアを開けて這入つて來た。彼れはドアを又もとのやうにピツタリと閉めると、彼女の傍へニヤニヤ笑ひながら寄つて來て、佛英辭典があるかと訊ねた。その時、丁度ペリーヌはそれを使つてゐるところだつたが、仕方がないので彼れに渡した。

『おや、これはもう要らないのかね？』
彼れはさう云ひながら尙ほも寄り添つて來た。

『えゝ、結構です。』

『どうして？』

『だつて、私は英語をこれで引くんぢやないんですもの！ たゞフランス語の綴り字を間違ひなくかうと思つて、それでフランス語を引いてゐるんですわ。』

テオドルは丁度背中の中、うしろに立つてゐるので、何をしてゐるのかハツキリは解らなかつたが、どうも肩越しにそれを讀んでゐるやうな氣がした。

『はゝあ、ダツカから來た手紙を譯してゐるんだね？』

テオドルはニヤ／＼笑ひながら不意に云つた。

ペリーヌはこんなに隠してゐる手紙をどうして知つてゐるのかと驚いた。これは字引を借りに來たのもみんな口實に過ぎないのだらうとすぐ氣が附いた。成る程、さう考へて見ると、英語を知らないテオドルに、どうして英語の字書が要るだらう？ これは成る程をかしい！

『えゝ、その手紙です。』

彼女はキツパリとさう云ひ切つた。

『どうだい？ うまく譯せさうかね？』

テオドールはまたニヤニヤと狡るさうな笑ひを浮かべながら云つた。

その時にはもうテオドールは身體をかどめて、ペリーヌの頭越しにヂツとその譯文を見詰めてゐるらしい。これは大變だ！ さう思つたペリーヌは急いでそれを裏返して了つた。

『まあ、どうぞこればかりは讀まないで下さいまし！ これは……あの……間違ひだけで……目茶苦茶なんです。ほんの下書なんです……』

『何あに……介ふことはないよ。いゝから、一寸お見せ！ 一寸！ 一寸！』

『まあ、だつて、私し……こんな間違ひだらけなのをお見せするのが、何んだか恥しいんですもの。』

『あは、は、は……何にそれでいゝんだよ。お見せ、お見せ！ 何んともしやしないよ。一寸だ！ 一寸！ 一寸！』

彼れはさう云ひながら手紙を取らうとしたので、彼女は吃驚りして両手でそれを隠して了つた。誰れにだつて見せるものか！ 私はこれを厭く迄も護らねばならない！ 彼女はさう固く決心した。するとまた彼れはニヤニヤ笑ひながら云ひつゞけた。

おい！ こつちへそれを寄こしてお了ひ！ 冗談ぢやないよ！ いつまでも學校の先生が生徒と遊んでゐるんぢやあるまいし！ いゝ加減にしてこつちへお寄こし！ いつまでもお前の相手はしてゐられないよ！』

終ひにはさう云ふ彼れの聲には怒氣さへ含んでゐた。

『でも、こればかりはいけません。これはどんな事があつてもお見せする譯には參りません。』

彼女は頑として訊き入れなかつた。

悉皆りテレ切つて了つたテオドールは、尙ほも笑ひに紛らせてその手紙を彼女の手から取らうとしたが、彼女があくまでも拒んで訊き入れなかつた。

『いゝえ、いけませんわ！ どんな事をなさつてもこれはお貸し致しません！ まあ、駄目ですつたら！ 駄目ですつたら！』

彼女の顔には必死の色が漂うてゐる。

これには流石のテオドールも弱り切つたらしい。彼れは一層テレ初めた。

『あは、は、は……冗談だよ！ 冗談だよ！』

彼れはゲラゲラと笑ひ出してしまった。

「いゝえ、冗談ぢやありません！ 私しは眞面目です！ ヴェルフランさんが誰れにも見せてはいけ
ないし仰有つたのです。私しはそのお言葉に背く譯には行きませんの！」

「ふゝん！ だが、そんなことを云つても、その手紙の封を切つたのは僕だからね。」

「まあ、だつて、英語の手紙と翻譯とは別物ですわ！」

「まあ、いゝさ、まあ、いゝさ！ お前なんかに見せて貰はなくても、伯父は僕にきつと見せてくれ
るさ！」

彼れはそんな不貞腐れたことを云つた。

「えゝ、えゝ……どうぞ！ ヴェルフランさんがあなたにお見せになるのなら、私しちつとも差支
へございませんの。けれども私からは絶対にこのお手紙をお見せすることは出来ませぬわ！ どん
なことがあつても、私しはヴェルフランさんのお言葉に背くことは出来ませぬ！」

彼女の聲は凜として四邊に響き渡つた。

テオドールはもうかうなつたら力づくで——と思つたが、ペリーヌに悲鳴でも揚げられるだらうと

考へると、流石にそこまではやれなかつた。

「あゝ、さうかい？ まあ、いゝさ！ さう云ふ言葉を聞いて僕も安心したよ！ 何あに……僕はた
ゞお前が仕事がどの位眞面目にやるか試したげなんだよ！ 何あにもうその手紙を見せて貰はな
くていいよ！ 成る程ねえ、お前は思つたよりもしつかりした子だ！ うむ、感心したよ！ いや、
どうも大變仕事の邪魔をして濟まなかつたね。さて……どれ行かうか！」

彼れはそんなことを云ひながら、薄氣味悪い笑ひ方をして部屋を出て行つた。

ペリーヌはそれからまた仕事を續けやうと遣り掛けて見たが、先刻のことですつかり胸がわく／＼
するばかりで、とても一字さへ頭に這入らなかつた。テオドールは怒つたに違ひない！ いかなテオ
ドールでもあれ丈け云つたら怒るだらう！ これはいつかその仕返しに来るにちがひない！ さあ、
その時にはこの強敵をどうして防がう？ 外の人間ならいざ知らずテオドールを敵にしたことは大變
なことだ。もうかうなつては今日にでも自分は追ひ出されて了ふだらう！ さう考へるとペリーヌは
覺悟してゐるとは云ひながら、あまりの恐ろしさに震へ上つた。

その時、また戸がそつと開いて、抜き足に部屋へヌツと這入つて來たのは、あの恐ろしいタルウエ

ルだつた。

「彼はすぐにテーブルの上の手紙に目を附けてニヤリと笑つた。」

「ふん！ 譯してゐるね！」

「いゝえ、まだ初めたばかりですの。」

「今テオドルさんが此所を出て行つたやうだが、何をしに來たんだね？」

「佛英辭典を借りにいらつしやつたんですの！」

「ほお！ 何んのためだらうな？ あの人は英語が讀めないんだよ。」

「さあ、何んのためにお使ひになるか、一向私にはお話しになりませんでしたわ！」

「その手紙を見せるとは云はなかつたかね？ ……」

「いゝえ、そんな事！ まだ一行書いたか書かない時のことでしたから……」

「ふん！ さうか！ だが、もう讀んだことは全部讀んだらう？」

「えゝ……まだちつとも譯してないんですの！」

「いゝや、そんなことを聞いてるんぢやないよ！ それは全部讀んで了つたかどうかと云ふのだ！」

「まあ、そのことならお答へ出來ませんわ。」

「何故？」

「だつて、ヴェルフランさんがこの手紙のことは、たとへ誰れにでも話してはいけないと仰つたからです。」

「おい！ もう忘れたか？ ヴェルフランさんも俺れも同じことなんだぞ！ そんなことは百も二百も承知してゐるだらう！ おい、よく耳をほじくつて聞くんぞ！ いゝか、ヴェルフランさんの命令は、一旦はこの俺れの口の中を通るのだ！ だから、俺れは一々みんな目を通して置く必要があるんだ！ 解つたか！」

「まあ、では、ヴェルフランさんの一身上のことにも……？」

「おや、そんならこの手紙は ……何かい？ ヴェルフランさんの一身上に關した手紙なんだね？」

ペリーヌはしまつたと思つた。

「いゝえ、さう云ふ譯でもないんですけど、もしさうだつたらどうなさいますと伺ふんですわ。」

「うむ、それなら尙ほ更ら知つて置く必要がある。いゝか！ ヴェルフランさんはあんまり物事に心

配し過ぎて身體を壊したつてことは、お前だつて薄々は知つてゐるだらう？ 今までにまた心配事が多過ぎたからなのだ。いゝか！ だから、これ以上何かの大きな知らせでもあつたら、あの人はどつちにしても助るまい。その知らせが非常に喜ばせることでも、また悲しませることでも、結果はやつぱり同じことだらう。何しろ今が一番絶對安靜にしてゐなければならぬ時なのだ。解つたかね？ だから、俺れが一應聞いて置く譯なんだ！ いゝかね？ ぢかでなく俺れからあの人に話すとなりやあ、あの人がだつて驚ろかない丈の餘裕が作れるといふものだ！ それでないとこれ以上あの人が身體でも悪くしたら： それこそ全く大變だからな。まあ、少しは俺れの身にもなつて見ろ！ こんなにヴユルフランさんのためばかり思つてクヨクヨ心配してゐるのに、お前が俺れの云ふことを聞かないで、そのまゝその譯した手紙をぢかにあの人に見せたりしたら、折角のこの俺れの細い心遣ひも水の泡となつて了ふのだ。どうだね？ その邊のことが解るだらう？ うむ、解る筈だ！ 解る筈だ！ 俺れはお前が仲々物解りがいゝことは前から知つてゐるんだから……」

彼れのさう云ふ聲はいつもの怒鳴り附ける調子とは違つて、いかにも穩かなどこか媚びるやうな調子さへあつた。

けれども彼女は顔色を變へたまゝ彼れを眺めてゐた。

「どうだ？ よく解つて呉れたらうね？ いや、この位りの道理がお前に解らない筈がない！ いゝかね？ くどいやうだがもう一度云ふよ。いゝかね？ これは我々……いや全町村の——いやしくもヴユルフランさんから多少の恩を蒙つてゐるものには大問題なのだ！ 誰れ一人としてあの人の健康を心配しないものはないのだ！ 考へてもごらん！ お前だつてあの人には大變な御恩になつてゐるのだぞ！ まるで食ふや食はずだつたお前が、これ丈けのお給金を戴いてかうして居られるのも一體誰れのお蔭だと思ふ！ 大變な出世ぢやないか！ また俺れ達にしたところで、誰れ一人としてあの人のために心から奉公してゐないものはないのだ。なあ、そのところが解るだらう？ あの人は見掛けは大變丈夫さうだが、實際はさうぢやないのだ。随分今までの苦勞心配でからだを非道くして終つてゐるのだ！ そこへ持つて来て目が見えなくなつたらう？ それからは弱つたのが滅切りと見えて來たんだ。本當にお氣の毒な人だと思ふ。俺れはあの人のからだに少しでもよくなることなら、この俺れのからだを縮めても更らに惜しいとは思はないのだ！ それに……あの人はこの頃になつて餘計俺れを舐りにしてゐるやうだ！ それを思ふと俺れは餘計さう考へないでは居られない！ お前

だつてやつぱりさうだらう？ どうだ？ これ丈け云つたら俺れの心持が解つたらう？ え？ オウ
ルリー、これ丈け云つてその道理が解らないやうぢや困るぜ。』
タルウエルは滔々とまことしやかに話して聞かせた。

これがタルウエルをまるで知らない前だつたら、恐らくペリーヌはその言葉に胡麻化されたに違ひ
ない！ けれども前には女工たちの噂を聞いたし、この間はこの間でまたフアブリーとモンブルウと
の話も聞いてゐるので、(しかもこの方の話は信用して介はないと彼女は思った。それはこの二人は人
の性格の批判は充分出来る教養のある人たちだつたから……) ペリーヌはどうしてもタルウエルの言
葉が信用出来なかつた。何んといふ不真面目な男だらう？ 話して貰ひたいばかりに、心にもない善
人らしい風をして、彼女を欺して目的を達しやうといふのだ。お、何んといふ卑劣な人間だらう！
成る程、先刻ヴルフランがこの手紙を誰れにも見せてならぬと云つたのは、こんな事の起ること
を初めから知つてゐたからだらう？ さうに違ひない！ さうに違ひない！ それならば尙ほ更らの
こと、彼女はヴルフランの言葉に従はねばならない。

タルウエルは机に倚りかゝりながら、彼女の顔をあのギョロリと光つた目で見詰めてゐる。彼女は

まるで催眠術でも掛けられるやうに氣が遠くなつて行くので、一生懸命に勇氣を出して何氣ない風を
してゐた。嘘で、どこか皺枯れ聲ではあつたがそれでもキツパリと彼女は云ひ切つた。

『でも、この手紙はどんな方にも見せるなとヴルフランさんから固く云ひ渡されてありますから……』

それを聞くとすぐタルウエルは持前の痲癩がムラ／＼と起りかけたが、何故かそれをデツと耐へて
やさしく云つた。

『うむ、それはさうだらうとも……ふむ、それはさうだらうとも……。だが、俺れは他人ぢやないん
だぜ！ 俺れは……まあ、一口に云つて了へば……ヴルフランさんの手足のやうなものなんだぜ』
しかし彼女は答へなかつた。

そこで到頭タルウエルは去り出した。

『おい！ 馬鹿！ 貴様ぐらゐ馬鹿は世の中にならぬ。』

彼れは尖々しい聲で怒鳴り出した。

『え、馬鹿で結構でございます！』

眞蒼になりながらも彼女は云つた。

「よおし！ さうか！ わかつたぞ！ おい、オウルリー！ 俺はもうちつと貴様が使へる奴かと思つたが、今日こそもう我慢がならないぞ！ 「え、馬鹿で結構です。」とは誰れに云ふ言葉なのだ！ 馬鹿ッ！ もう一度そんなことをぬかして見ろ！ この工場から放り出してしまふがどうだ！ 馬鹿ッ！ それを貴様承知でそんなことを云ふのか！ 俺はすぐにでも貴様をおつほり出してしまふんだぞ！ 解つたか？」

「え、解つてますわ！」

「何んだ？ よおし！ 解つてるんならそれでいゝ。だが、まあ……よく考へて見ろ！ おい！ ボヤボヤしないでよく考へて見ろよ！ 貴様の今日の身の上、もう明日はどうなつちまふか考へて見ろ！ 馬鹿！ 「え、解つてますわ！」なんてあつさり云ふもんぢやない！ もつとよく考へて見ろ！ 今といふのも可哀さうだから、兎に角今夜まで返事を待つてやら！ それまでにチャンと観念して返事をしろ！ 巫戯化したことを云ふと承知しないぞ！」

けれどもこれ丈け怒鳴り付けても、ペリーヌには一向通じないと見て取ると、タルウエルは少し拍

子の抜けたやうな顔附をしながら、前と同じ忍び足でコソ／＼と部屋を風のやうに出て行つた。

至急の電報

ペリーヌはヴェルフランが彼方の部屋で自分を待ち兼ねてゐると思ふと、いつまでもタルウエルのことばかりも考へては居られないので、早速また翻譯の先を進めて行つた。どうかもつと胸の中が静かになるやうに！ どうかもつと頭の中がハッキリとして来るやうに！ 彼女はさう思ひながらまた先刻の先を書きつゞけた。

御子息エドモン・パンダヴァオヌ氏が、當印度に於いて御結婚なさつたのは餘程以前のことです。そして、その御結婚當日の儀式に立ち會ひました牧師は、當教會の教主レクラアク氏でございます。

さて、そのエドモン氏夫人になられた女性は、マリイ・ドレッツサニイといふ婦人でございます。容姿は端正優美至つて氣立ての穏やかな女性でございます。以下のことは御参考にまで申し上げて置きますが、今日の一般印度婦人は最早や従前とは違つて、學問技藝何一つ具はらぬものではなく、女性としての教養の進歩は實に目ざましいものであります。かやうに今日の印度女性の一般でさへがさうであるのに、このマリイ・ドレッツサニイ嬢は深窓にあつて高等教育を受けた方であります。

このエドモン夫人の父君は最初バラモン教の熱烈な信者でありましたが、後にレクラアク氏の説教に感動してクリスト教信者になつて了りました。ところがこゝに印度の習慣として、バラモン教徒が他宗に歸依すると、當然同時にその一家は社會上の地位や名譽を失ふことになるのであります。これは我々から考へますと、大變理窟に合はない——どちらかと云ふと、隨分野蠻な、頑固な社會上の習慣ではあります。バラモン教がこの印度では一番に勢力があるのですから止むを得ません。(これは印度の習慣である。印度では波羅門教が全土を風靡してゐるので、即社會では誰れも彼れのない。若し教徒の中で他宗に改宗したものがあつたらば、その一族を穢多として扱ふ。)この一家も遂ひにその社會的——と云ふよりは——宗教的制裁を氣の毒にも受けたのであります。つまり基督教徒になつたと云ふ廉で、印度の社會ではこの

一家族を一種の機多として取扱ふやうになりました。

そこでこの美しい令嬢もやはり異端者として扱はれるやうになつたので、自然ヨーロッパ人たちの社交界に出入するやうになつたのであります。これは令嬢一人ばかりではなく、父君も亦こゝに有名なフランス貿易商と、ドレッツサニイ(印度)・アンド・ベルシエー(佛蘭西)商會といふ合名會社を起したのであります。この商會はその後間もなく相當世界にも知られるやうになつたのでございました。

そも／＼このマリイ・ドレッツサニイ嬢とエドモン氏とが初めてお會ひになつたところは、前に申し上げたフランスの貿易商ベルシエー夫人の一室でありました。その一瞬間がお二人を運命的にしっかりと結び付けて了ひました。間もなくお二人は互ひに愛し合ふやうになつたのであります。誰れ一人としてこの女性を讚美しないものはありませんでした。しかしながら残念なことには、私が當ダツカへ参つた時にはもう御夫妻ともに旅に出られた後なので、遂ひにこの婦人には今迄にお會ひしたことはないのであります。ではありますが、この好一對の御結婚に何故反對する必要があつたか、それは今だに私のもつとも了解に苦しむところでございます。しかし、これは別の問題にな

りますので、この事に就いては何も申上げる必要はございません。

かやうな譯で、一方には少くない反對があつたのであります。お二人の御結婚式は教主レクラック氏の手によつて恙なく當教會で行はれました。従つて、この御結婚は當方の帳簿に記載してありますので、もし御入用ならば御一報次第抄本をお送りしてもよろしうございます。

さて、エドモン氏御夫妻はそれから四年間ドレッツサニイ家で楽しく暮らして居られました。その中に間もなく御夫婦は玉のやうな令嬢を儲けられたのであります。今だにこの御夫婦を知つてゐるものは、實にお立派な御夫婦であつたとお噂して居ります程、お二人の仲は極めて人情の厚いものであります。

また一方、父君の創められたドレッツサニイ・アンド・ベルシエー商會も、日に日に繁昌して参る一方でありました。

ところが、この世の中は何んと云ふ儘にならないものでございませう？ それ程に一時は榮えた商會が、突然財界の不況でいけなくなつたと思つてゐる中に、バタ／＼と商賣が振はなくなつて間もなく没落の運命に陥つて了ひました。その失敗がドレッツサニイ夫妻のからだにも響いた

のでございませう。間もなくドレッツサニイ氏は病ひを發し、療養藥石の効も空しく遂ひに歸へらぬ旅へ上られました。次いで數箇月後には、お氣の毒なドレッツサニイ夫人も亦この世を去られたのであります。かやうな譯で、エドモン氏御夫妻は一時に御兩親を失つたばかりか、すつかり財産といふ財産をも見捨てなければならなくなつたのであります。どんなにお二人が歎かれたことございませう。一方父君と合資で貿易商を起したベルンシェー氏は、今回の事業失敗で印度がイヤになつたものか、そこ／＼に旅装を準備すると、一家を擧げてそのまゝフランス本國へ歸られて了ひました。そこでお氣の毒にもエドモン氏御夫妻は、まだホンのお小さい令嬢を抱へて、遂ひにこの廣い印度に誰れ一人として頼られるところもなくなつたのであります。

それから間もないことでありました。エドモン氏御夫妻は小さな令嬢をお伴れになつて、珍奇な植物・骨董類の蒐集といふのを名目となさつて、ダルフーツへと旅立たれたのでございました。その時、令嬢はまだいたいな三歳になられたばかりでありました。

それ以後、もうこゝに十何年の歲月は水のやうに流れましたが、エドモン氏御夫妻は遂ひに當ダツカへは姿をお見せにならないのでございます。しかし私はその後エドモン氏の或る御友人の方か

ら、エドモン氏御家庭がデエラに於いて暮らして居られるといふ便りを受け取つたと聞いたのであります。何んでもその手紙に依れば、その頃までエドモン氏御家族はチベットの國境とヒマラヤ山脈との山間を辿つて居られたのださうで、丁度そのデエラがその眞中だとか云ふので、そこに住居を構へられたと云ふことであります。

しかし、甚だ残念ながら、私はデエラ地方のことは一向存知ませんが、幸ひそこには當教會の分教會がありますので、お望みならばその牧師からあなたの方へ、精しいお手紙を差上げますやうに通知を致しませうか？ いかゞ致しませう？ その牧師からならもう少し詳細な御報告が出来ることゝ存じますか？

ペリトヌは遂ひに手紙を譯し終へた。そして、彼女は結びの「敬具」と書くのもそこ／＼に、紙を一まとめにするとヴェルフランの事務室へ急いで行つた。

その時、ヴェルフランはいら／＼した顔附で、部屋の彼方此方を危な氣に歩き廻つてゐた。「何んだ！ 大分手間が掛つたぢやないか？」

「え、濟みませんでした。手紙が長くてむづかしかつたもんですから……」

「ふむ！ なに、そんならいゝが……。誰れか邪魔をしたのぢやないかね？ わしはお前の部屋で二度ならず誰れか出這入りしたやうな音を聞いたが……」

さうヴエルフランの方から先を越されて見ると、却つてペリーヌには自分で一人クヨク心配してゐるよりもいゝので、彼女はヴエルフランに有りのまゝを物語つた。

「……それはテオドルさんとタルウエルさんです。」

「何んだつて……」

ヴエルフランは何かその先を云ふ積りらしかつたが、たゞ口をモグ／＼させてゐるばかりである。

「さあ、その前に手紙をこつちへお呉れ！ 外のことはあとにしやう。さ！ こゝへ坐つて、緩つくりと読んでくれ！ 大きな聲を出してはいけないよ。」

そこで彼女は殆んど聞き取れないやうな低い聲で手紙を読んだ。

ヴエルフランはそれを聞きながら時々呻くやうに呟いた。

「ふん！ お立派な御夫婦……」

「楽しく暮らす……？ 莫迦！」

「植物・骨董品の蒐集……？ ふん、それが何んだ！」

「何んだつて？」

「ほう！ 或る友人か……」

「だが、何處の何んて云ふ男だらう？」

ペリーヌが悉皆り読み終へても、ヴエルフランはまだ何事か考へつゞけながら一言も口を開かなかつた。

臆て、突然にヴエルフランは云つた。

「どうだ？ お前にはフランス語も英語に譯せるかね？」

「やさしい文章なら出来ますわ。」

「電報だよ！」

「はい、電報でも出来ますわ。」

「さうか！ ぢや、その小さなテエブルのところへ坐つて貰はう！」

ヴェルフランはさう云つて、ペリーヌに次の文章をフランス語で書き取らせた。

(受信人—ダツカ教會・内フィールズ宛)

お手紙有難う。最後の便りを受け取つた友人の名を知らせてくれ。至急電報にて、たのむ。序に
デエラ教會の牧師の名も知らせてくれ。牧師へは手紙をこちらで出す。

(発信人—ヴェルフラン・パンダウオアヌ)

「これ丈けのものを出来る丈け短く、はつきりと意味の解るやうに英語で書いてくれ。一字六十五錢の割りだから、無駄が一つでもあつてはならない。字もハツキリと書くんだよ?」

「電文はすぐ出来上つた。」

「幾字あるね?」

「三十七字ございます。」

「さあ、では……お前が自分でこれを電信局へ持つて行つて、間違ひのないやうにして打つて来てくれ!」

ヴェルフランは金をペリーヌに渡しながら云つた。

彼女は頼信紙を手にとつと、すぐ飛ぶやうに部屋を出て行つた。

ところが間の悪い時は悪いもので、ペリーヌはバツタリとヴェランダのところでタルウエルに出遭つて了つた。彼れは先刻から鶺鴒の目鷹の目になつて、両手をポケットへ突つ込みながら歩いてゐたのである。

「おい! 何處へ行くんだい?」

鋭い聲をペリーヌに浴びせた。

「電報を打ちに参りますの。」

仕方がないのでその通りを答へた。

するとタルウエルはチラリと片手の頼信紙に目を注いだと思ふと、いきなり手荒くそれを引つた。つた。

そして彼れはそれを急いで開けて見た。しかしその中の文字が英語で一つも讀めないで、彼れはいま／＼しさうに怒鳴つた。

『おい！ あとで一寸話があるんだ！ いゝか？』

彼れは顔を眞赤にしてゐるところを見ると餘程怒つてゐるらしい。

『はい。』

ペリーヌは素直に答へた。

聽て、三時の刻限近くなると、ヴェルフランは外出するからとペリーヌを呼んだ。ペリーヌはウキリアムの代りの馭者は一體どうするんだらうと心配になつた。

ところがペリーヌはヴェルフランから今日も馭者になれと云はれて驚いて了つた。

『お前は昨日日本當に上手に走らせてくれた。どうだ？ 今日だつて出来ないといふことはないだらう！ それに……今日は一寸お前に話したいこともあるのだから、かうして二人切りにならないと困るのだが……どうだね？』

さう云はれて見るとペリーヌも承知しない譯には行かなかつた。

馬車は走る……村の街道を走つて行く 往來の人たちは「おや！ 今日も亦だよ！」と云ふ顔附で

見送る……。聽て馬車はしづかに小道へ這入る……。するとヴェルフランは先刻のタルウエルとテオ

ドールの一件を根柢り葉柢り訊ね出した。

『お前は先刻……テオドールとタルウエルとが事務室へ這入つて來たと云つたね？』

『はゞ。』

『一體何んの用事で這入つて來たのかね？』

さうヴェルフランから短刀直入に云はれて見ると、さて何んと返事をしたものか、一寸塗方に暮れてペリーヌは黙つてゐた。

『こら！ 何を愚圖々々してゐるのだ？ 正直に何んでも話してくれる約束ではないか！』

『はい、濟みません！』

彼女はいかにも苦しさに云つた。だが、いつその事打明けやう！ さう決心したペリーヌは、それからテオドールのした一仔始終を殘らずヴェルフランに話して聞かせた。

『それ丈けかね？』

一通りペリーヌの話聞き終ると、ヴェルフランは嚴かな調子で念を押した。

「はい、それだけでございます。」

「で、タルウエルは……？」

ヴェルフランはまた重々しい口調で云つた。そこで、彼女はタルウエルのことも逐一詳細に涉つて物語つた。しかし「あの人の命にかゝはる云々」と云うところはだけは、彼女はわざと云はないで了つた。その代りには電報を途中で引つたことや、あとで話があると云つたことなどを、細くヴェルフランに話して聞かせた。

二人は初めてしみじみと語り合ふ。ペリーヌの手からは手綱が離される。馬車はコ、の行くまゝに任せる……。自由になつたコ、はうれしさうだ。たゞ一筋に走る街道を右へ左へ、吹き送る風のにく……ムツとする暖い草のいきれを嗅いで廻る……。鼻がクンクンと鳴る……。ぶる／＼と時々震へる……。

二人は暫らくの間無言であつた。けれどもヴェルフランの顔には暗いもの悲しさうな色が漂ふ。ペリーヌは思はずヴェルフランの顔を見上げる。

「心配をしないがい。この事は決して誰れにも云はないからね。それからまた……お前に仕返しをしようと思つてゐても、わしは必ず傍で護つてやらう。わしは以前から……こんな事が起るだらうと思つてゐたよ。だが、もうこれからは二度とそんな事のないやうにしよう。これからはお前はわしの部屋で仕事をして貰はう。だが、やつぱりフランツアの下宿へ歸つて行くのでは何んにもならんことになる。きつと彼奴等はお前の下宿へまで押し寄せることだらう。もうかうなつては仕方がない！ わしはお前を邸へ引取らう。お前とわしとこれからは一緒に暮らすのだ。部屋も當てがはう。飯も一緒に食べやう！ もうこれ以上良策はないのだ。だが、それにしてもこの上ともに用心が肝心だ。彼奴等はお前から、わしの秘密を嗅ぎ出さう嗅ぎ出さうとしてゐるのだ。こんど打つた電報の返事とは殊に秘密にして置かねばならない。お前を邸へ引き取ることは彼奴等にはいゝ見せしめになるのだ。それに、お前に對してはまた少しばかりはお禮心にもなる筈だ！」

ペリーヌは初めはどうなることかと震へてゐたが、このヴェルフランの情けある言葉を聞くとうれし涙が流れて來た。

「オウルリーよ！ わしはお前がどんなに苦勞と戦つて來たかを知つてからは、お前を、しんから信用